豊富村埋蔵文化財調査報告第３集

山梨県東八代郡豊富村

平成７・８年度
村内遺跡発掘調査報告書

1997

豊富村教育委員会

正　誤　表

『平成７・８年度村内遺跡発掘調査報告書』

ページ	行	誤	正
例言	6	執筆は・	執筆・
調査組織	下から３	萩原松江	萩原まつ江
1	8	関原弥治郎	弥二郎
３４	１４	約６７ｍ	６１．２ｍ
４０	4	１号小穴にに	１号小穴に
４９	２３	Ⅳ層	Ⅵ層
写真図版９	右下	土偶出土状況	駒平遺跡１号炉

豊富村埋蔵文化財調査報告第３集

山梨県東八代郡豊富村

平成７・８年度
村内遺跡発掘調査報告書

1997

豊富村教育委員会

序

豊富村は、南に御坂山塊の山々が連なり、北側に笛吹川が流れています。また、曽根丘陵を中心に古代の遺跡が多く分布しており、自然だけでなく、歴史的環境にも恵まれた村です。

豊富村は、「豊富村第２次総合計画」策定後、21世紀に向けた田園都市づくりをパストラル・シティ豊富と称して推進しています。それは、本村の産業の活性化を促し、農村と都市の融合を目指し快適な生活空間を創出していこうというものであります。そのため、最近では、村の各所で工場誘致、道路建設、公園整備などの他、豊富村に永住を希望される方々が増えた証でしょうか、宅地開発や個人住宅の建設が相次いで行われています。

このように住環境の整備が進む一方、それらの開発行為が埋蔵文化財包蔵地で行われるため、開発に伴う埋蔵文化財の調査件数も増加しております。

本書は、平成７～８年度に調査が行われたその報告でありますが、特に目を引くのは、本村を代表する王塚古墳の前方部の周溝を調査する機会を得て、その周溝の覆土から円筒埴輪の破片が多数出土したことです。上半分が全周して復元できるものもあり、その中には、ヘラ記号と呼ばれる線刻の印が描かれたものがあり、大変貴重な発見もありました。

また、駒平遺跡では、縄文時代中期初頭の土器が多数発見され、また、本村では、初めての土偶の胴部や脚部が出土し、縄文人の精神生活の一端を垣間見ることができます。

なお、今回の調査にあたり、ご指導・ご協力をいただきました地元地権者の方々をはじめ、関係各位に厚く感謝申し上げます。

本報告書が今後、有意義に活用されることを希望いたします。

1997年３月31日

豊富村教育委員会

教育長　　萩　原　保　正

例　言

1．　本書は、平成７・８年度に山梨県東八代郡豊富村内で発掘された遺跡調査の報告書である。

2．　発掘調査は、文化庁・山梨県より補助金を受けて、豊富村教育委員会が実施した。

3．　発掘調査及び出土品の整理は、豊富村教育委員会が実施した。

4．　本書における出土品及び記録図面・写真は豊富村教育委員会が保管している。

5．　本報告書の執筆は・編集・写真撮影は、岡野が行ったが、分析依頼・委託した部分については、文頭に記した。

6．　本調査にあたり、山梨県教育庁学術文化課及び豊富村各区の住民の皆様、地権者の皆様に御理解・御指導をいただきながら調査を進めることができた。心から謝意を表する次第である。

7．　発掘調査・出土品の整理及び報告書の作成については、次の方々から御協力・御教示を賜った。記して謝意を表する次第である。

（敬称略）

出月洋文・中山誠二（山梨県教育庁学術文化課）、末木健・今福利恵（山梨県立考古博物館）、坂本美夫・新津健・保坂康夫・笠原みゆき・石神孝子（山梨県埋蔵文化財センター）、猪股喜彦（釈迦堂遺跡博物館）、林部光（中道町教育委員会）、野崎進（境川村教育委員会）、伊藤修二（八代町教育委員会）、望月和幸（御坂町教育委員会）、小渕忠秋（石和町教育委員会）、瀬田正明（一宮町教育委員会）、和田豊（三珠町教育委員会）、飯島泉（塩山市教育委員会）、三澤達也（山梨市教育委員会）、大嶌正之（敷島町教育委員会）、田中大輔（昭和町教育委員会）、小宮山隆（長坂町教育委員会）、志村憲一・平塚洋一・佐々木満（甲府市教育委員会）、櫛原功一・畑大介（帝京大学山梨文化財研究所）

調査組織

調査主体	豊富村教育委員会
調査担当者	岡野秀典
事務局	萩原保正（教育長）・中込清彦（教育課長）・飯室隆人（社会教育係長）・今井賢・井上妙・中楯紀男・鶴見貴美恵（平成７年度）・井上陽子（平成８年度）・水野徳仁
調査・整理参加者	（平成７年度）相原ツネ子・石原次代・石原花子・長田長美・長田貴代美 河野紀久代・塚田よ志江・中沢浦子・萩原定子・萩原松江 （平成８年度）相原ツネ子・石原喜代の・長田長美・塚田よ志江・中沢浦子・村松俊江・萩原定子・桜井里子・小林うゑ子・小林述子

目　次

序
例言・調査組織
目次
第１章　平成７・８年度の調査概要……1
第２章　地理的歴史的環境……1～2
第３章　平成７年度高部宇山平遺跡の調査……3
第４章　平成７年度三枝氏館跡の調査……4～6
第５章　平成７年度駒平遺跡の調査……7～21
第６章　平成８年度大鳥居宇山平遺跡の調査……22～35
第７章　平成８年度大福寺境内の調査……36
第８章　平成８年度横畑遺跡の調査……37
第９章　平成８年度駒平遺跡の調査……38～48
第10章　平成８年度明治遺跡の調査……49～50
附編　明治遺跡の自然科学分析……51
引用・参考文献……56

挿図目次

第１図　周辺遺跡分布図（1/25,000）……2
第２図　調査区位置図……3
第３図　調査区全体図……3
第４図　調査区全体図(1/3,000)……4
第５図　土層図（1）……5
第６図　土層図（2）……6
第７図　調査区全体図(1/3,000)……7
第８図　土層図（1）……7
第９図　土層図（2）……8
第10図　土層図（3）……9
第11図　１～３号土坑……10
第12図　縄文土器（1）……11
第13図　縄文土器（2）……12
第14図　縄文土器（3）……13
第15図　縄文土器（4）……14
第16図　縄文土器（5）……15
第17図　縄文土器（6）……16
第18図　縄文土器（7）……17
第19図　縄文土器（8）……18
第20図　縄文土器（9）……19
第21図　土製品……19
第22図　石器（1）……19
第23図　石器（2）……20
第24図　調査区位置図(1/10,000)……22
第25図　調査区全体図……22
第26図　土層図（1）……23
第27図　土層図（2）……24
第28図　第３トレンチ１号溝……26
第29図　第６トレンチ１号溝……26
第30図　円筒埴輪（1）……27
第31図　円筒埴輪（2）……28
第32図　円筒埴輪（3）……29
第33図　円筒埴輪（4）……30
第34図　円筒埴輪（5）……31

第35図　調査区位置図(1/10,000)……36
第36図　調査区全体図……36
第37図　調査区位置図(1/10,000)……37
第38図　調査区全体図……37
第39図　調査区全体図(1/3,000)……38
第40図　土層図(1)……39
第41図　土層図(2)……40
第42図　第19トレンチ遺構群……41
第43図　2号炉……41
第44図　縄文土器(1)……43
第45図　縄文土器(2)……44
第46図　縄文土器(3)……45
第47図　土製品……45
第48図　石器……46
第49図　調査区位置図(1/10,000)……49
第50図　第1トレンチ……50
第51図　第2トレンチ……50

表目次

第1表　埴輪観察表(1)……32
第2表　埴輪観察表(2)……33

写真図版目次

図版1　高部宇山平遺跡調査前風景　高部宇山平遺跡第2トレンチ　三枝氏館跡遠景　三枝氏館跡第3トレンチ　三枝氏館跡第9トレンチ　三枝氏館跡第14トレンチ
図版2　駒平遺跡第11～18トレンチ調査前風景　駒平遺跡作業風景　駒平遺跡第4トレンチ　駒平遺跡第18トレンチ　駒平遺跡第14トレンチ土器出土状況(1)　駒平遺跡第14トレンチ土器出土状況(2)
図版3　駒平遺跡縄文土器(1)　駒平遺跡縄文土器(2)　駒平遺跡縄文土器(3)　駒平遺跡縄文土器(4)　駒平遺跡縄文土器(5)　駒平遺跡縄文土器(6)
図版4　駒平遺跡縄文土器(7)　駒平遺跡縄文土器(8)　駒平遺跡縄文土器(9)　駒平遺跡縄文土器(10)　駒平遺跡縄文土器(11)　駒平遺跡縄文土器(12)
図版5　駒平遺跡縄文土器(13)　駒平遺跡縄文土器(14)　駒平遺跡土製円盤　駒平遺跡土偶(1)(正面)(側面)　駒平遺跡凹石(1)　駒平遺跡石鏃
図版6　大鳥居宇山平遺跡調査前風景(中央の小山は王塚古墳)　大鳥居宇山平遺跡作業風景　大鳥居宇山平遺跡第3トレンチ1号溝　王塚古墳(手前は第3トレンチ1号溝)　大鳥居宇山平遺跡第3トレンチ1号溝埴輪出土状況　大鳥居宇山平遺跡第2トレンチ1号土坑
図版7　大鳥居宇山平遺跡第5トレンチ　大鳥居宇山平遺跡第10トレンチ　王塚古墳埴輪(1)　ヘラ記号(1)　王塚古墳埴輪(2)　王塚古墳埴輪(3)
図版8　王塚古墳埴輪(4)　王塚古墳埴輪(5)　王塚古墳埴輪(6)　ヘラ記号(2)　大福寺境内調査前風景　大福寺境内第1トレンチ
図版9　横畑遺跡第1～3トレンチ全景　横畑遺跡第1トレンチ　駒平遺跡第19～27トレンチ調査前風景　駒平遺跡第19トレンチ　駒平遺跡3号小穴土偶出土状況　駒平遺跡1号炉
図版10　駒平遺跡2号炉　駒平遺跡第26トレンチ　駒平遺跡縄文土器(15)　駒平遺跡土偶(2)(正面)(背面)　駒平遺跡縄文土器(16)　駒平遺跡縄文土器(17)
図版11　駒平遺跡凹石(2)(側面)(正面)　明治遺跡全景　明治遺跡第1トレンチ調査前風景　明治遺跡第1トレンチ　明治遺跡第2トレンチ
図版12　明治遺跡のプラント・オパール

第１章　平成７・８年度の調査概要

	調査地点	調査原因	調査期間	調査結果
1	高部宇山平遺跡 高部1535	個人住宅	95. 7/20～7/21	遺物の出土があるが希薄であり、遺構の検出なし。 工事には支障なし。
2	三枝氏館跡 木原1836-1他	道路建設	96. 1/17～2/27	遺物の出土があるが希薄であり、遺構の検出なし。 工事には支障なし。
3	駒平遺跡 木原96-1他	道路建設	96. 1/17～2/27	遺構・遺物の検出あり。 本調査が必要。
4	大鳥居宇山平遺跡 高部1888-1他	農業関連	96. 5/15～6/3	遺構・遺物の検出あり。 遺構の部分以外に果樹植栽。
5	大福寺境内 大鳥居1621	会館建設	96. 9/24	遺構・遺物の検出なし。 工事に支障なし。
6	横畑遺跡 大鳥居3446他	道路建設	96. 12/17 ～12/19	遺物の出土があるが希薄であり、遺構の検出なし。 その地点での工事には支障なし。ただし、調査地南側の台地で本調査が必要。
7	駒平遺跡 木原17他	道路建設	97. 1/9～1/22	遺構・遺物の検出あり。 本調査が必要。
8	明治遺跡 高部465他	その他開発	97. 1/17～2/27	遺構・遺物の検出なし。 工事に支障なし。

第２章　地理的歴史的環境

豊富村は、山梨県のほぼ中央、甲府盆地の南端に位置する。地形的に見ると、御坂山塊の北斜面の山地と曽根丘陵台地、浅利川流域の平坦地、及び笛吹川流域の沖積地とに分かれる。

村の南西は、標高650～950mに及ぶ急峻な御坂山塊の北面斜面の山地に占められ、これらの山地から平地に移る尾根の末端部に標高240～380mで強粘土質からなるローム層で覆われた曽根丘陵が広がっている。御坂山塊の関原峠の山腹に源流を発する浅利川が村の中心に流れており、その浅利川流域に沿って集落が発達している。浅利川が笛吹川に注ぐ一帯は、沖積地形であり、かつての氾濫原である。現在は、明治以来の区画整理以降、水田が広がっている。

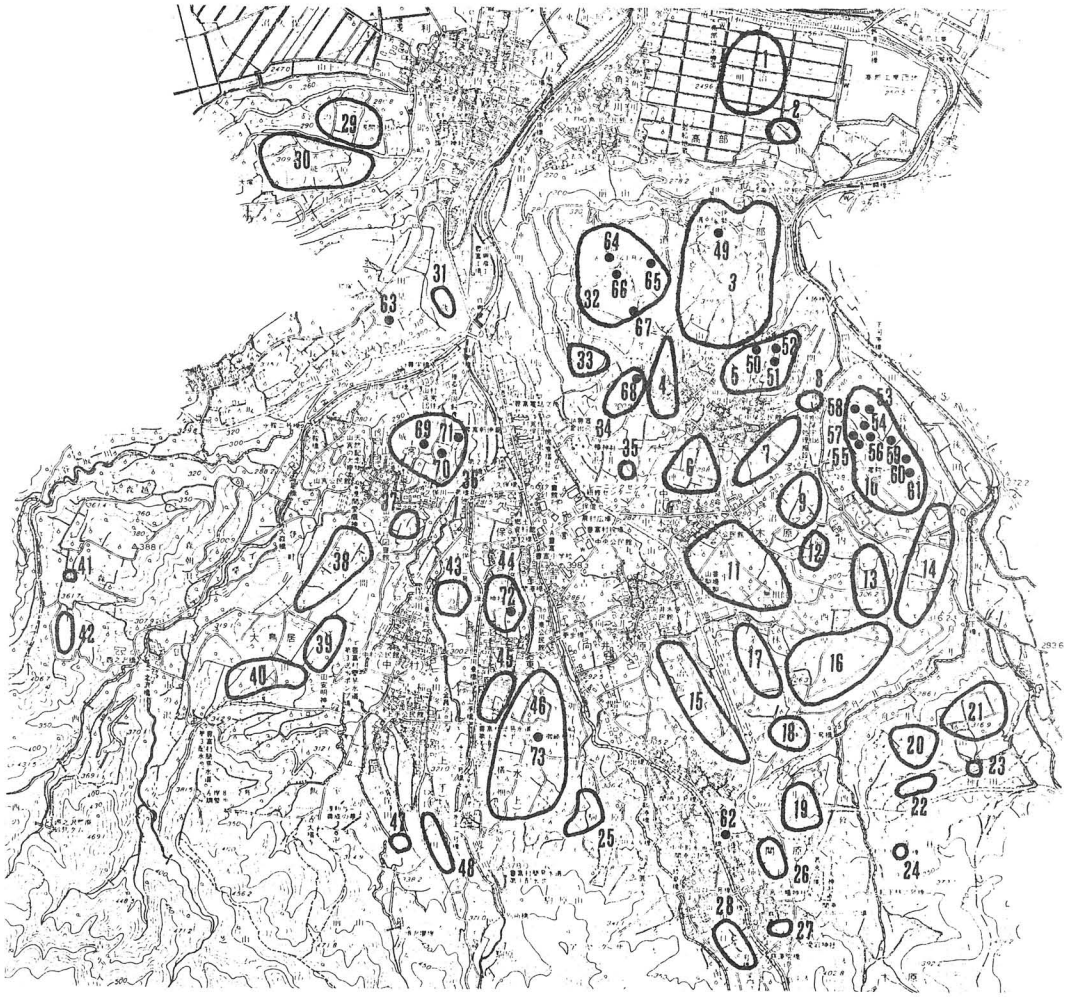
豊富村の遺跡分布は、曽根丘陵の台地上で占める。その初現として、横畑遺跡、関原弥治郎遺跡から先土器時代のナイフ形石器が出土している。

それに続く縄文時代の遺跡は、35か所確認されている。その中で、駒平遺跡は中期前半を主体とし、横畑遺跡では、中期後半の住居址が検出した。高部宇山平遺跡においては、後期中葉の土坑から注口土器の完形品が出土するなど、前期から後期にわたって遺構・遺物が各遺跡から出土している。また、弥生時代は、14か所に分布している。

古墳時代は、散布地が24か所で、古墳が25基あるが、その多くの墳丘が削平されている。その分布として、５世紀後半の王塚古墳を中心とする宇山平古墳群、６世紀前半とされる三星院古墳を中心とする三星院古墳群、城原古墳群、田見堂及鳥居原古墳群の４群からなる。

奈良・平安時代の豊富村一帯は、『和名抄』によると、八代郡沼尾（ぬまのお）郷に属するとされるが、現在この沼尾郷に比定される遺跡は見つかっていない。

中世になると、甲斐源氏の一族浅利与一義成の支配する所となり、その伝承も村内各地に残る。また、三星院門前の小丘が戦国時代の武田家家臣三枝土佐守虎吉の館跡といわれる。



1．明治遺跡	2．地蔵田遺跡	3．高部宇山平遺跡	4．宇山遺跡
5．中尾遺跡	6．代中遺跡	7．代中東遺跡	8．関沢遺跡
9．三枝氏館跡	10．上野原遺跡	11．駒平遺跡	12．高内遺跡
13．上三口西遺跡	14．上三口遺跡	15．弥二郎遺跡	16．東原遺跡
17．原遺跡	18．中原遺跡	19．浜井場遺跡	20．付山南遺跡
21．付山北遺跡	22．神田南遺跡	23．神田北遺跡	24．旧三星院跡
25．駒原遺跡	26．柿戸原遺跡	27．柿戸原南遺跡	28．山口遺跡
29．宮の下遺跡	30．熊野原遺跡	31．浅利氏館跡	32．大鳥居宇山平遺跡
33．釜池西遺跡	34．釜池東遺跡	35．浜井戸遺跡	36．城原遺跡
37．見間北遺跡	38．見間遺跡	39．椚田遺跡	40．椚田北遺跡
41．南大森遺跡	42．西の沢遺跡	43．宮の脇遺跡	44．久保遺跡
45．川東遺跡	46．横畑遺跡	47．久保田遺跡	48．前田遺跡
49．伊勢塚古墳	50～52．無名墳	53．三星院古墳	54～61．無名墳
62．おさんこうじ古墳	63．金塚古墳	64．王塚古墳	65．二子塚古墳
66～68．無名墳	69．城原大塚古墳	70～72．無名墳	73．お御崎さん古墳

第１図　周辺遺跡分布図（1/25,000）

第３章　平成７年度高部宇山平遺跡の調査

１．調査経緯

平成７年７月４日　文化庁に発掘通知を提出

平成７年７月20日　発掘調査を開始

平成７年７月21日　発掘調査終了

平成７年７月25日　南甲府署に遺失物発見届提出

２．調査方法及び基本層序

東八代郡豊富村高部字伊勢塚他に所在する高部宇山平遺跡は、甲府盆地の南側から東側に連なる曽根丘陵を形成する宇山平と呼ばれる台地上の北側に立地する。

当遺跡内の北端で個人住宅の計画があり、試掘調査を実施した。調査面積は、60㎡である。調査方法は、調査対象地に応じて２×10ｍのトレンチを３か所設定して掘り下げた。

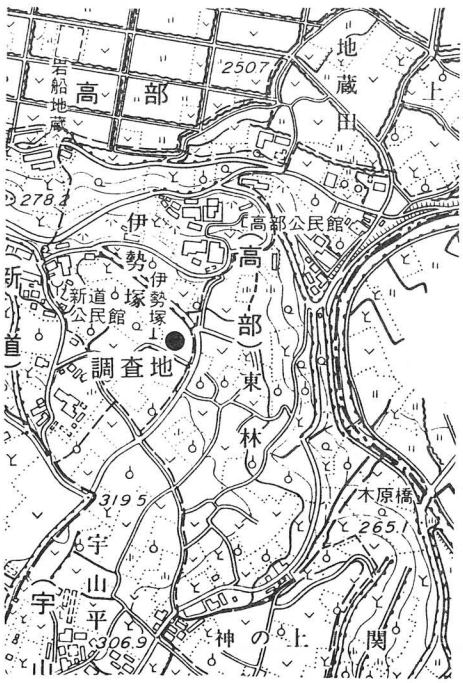
本調査の基本層序は、次のとおり。なお、地表から第Ⅳ層までの深さは、50㎝前後である。

第Ⅰ層　褐色土（耕作土）　　第Ⅱ層　暗褐色土　　第Ⅲ層　黒褐色土

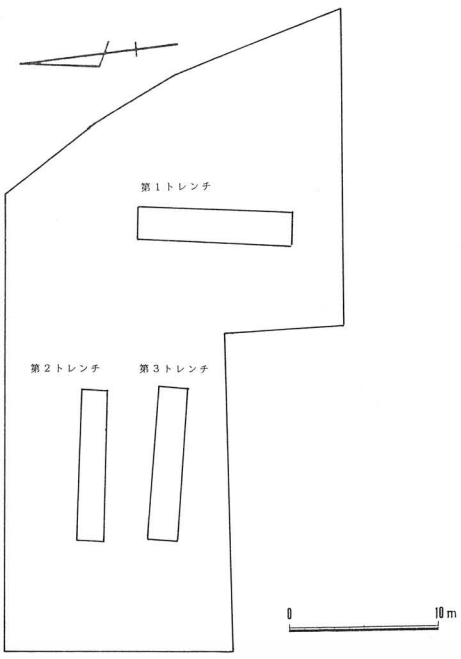
第Ⅳ層　黄褐色ローム

３．まとめ

調査の結果、弥生土器が１点、土師器の破片が３点出土したが、人為的な遺構は検出されなかった。



第２図　調査区位置図（1/10,000）



第３図　調査区全体図

第４章　平成７年度三枝氏館跡の調査

１．調査経緯

平成８年１月12日　文化庁に発掘通知を提出

平成８年１月17日　発掘調査を開始

平成８年２月27日　発掘調査終了

平成８年３月１日　南甲府署に遺失物発見届提出

２．調査方法及び基本層序

東八代郡豊富村木原字北沼に所在し、曽根丘陵の一角である舌状台地の先端部に立地する。

『甲斐国志』によると、三枝松土佐守ノ居跡（木原村）の項に「東西三十間、南北六十間許岡山ニ松三四株アリ水田回リテ荒湟ノ形宛然タリ」とある。三枝松土佐守とは、武田家の重臣三枝土佐守虎吉であり、その館跡が本地である。かつては、虎口状の遺構らしきものも存在していたようだが、近年の土砂採取により崩されてしまい、当時、堀の役目を果たしていたと思われる湿地帯が畑地となっている。

この館跡の西側に村道建設の計画があり、試掘調査を行った。調査面積は、217㎡である。調査方法は、調査対象地に応じて幅２m、長さは任意のトレンチを20か所設定して、掘り下げた。

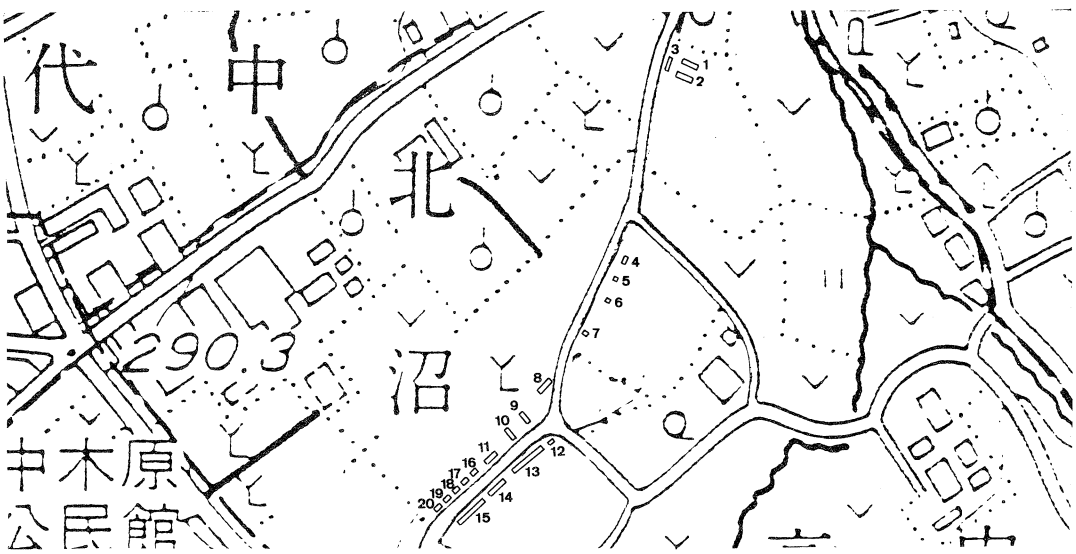
本調査の基本層序は、次のとおりである。

第Ⅰ層　褐色土（耕作土）　　第Ⅱ層　褐色土（ローム・ブロック混入層）

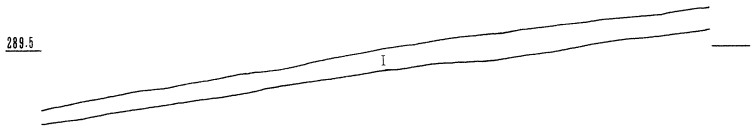
第Ⅲ層　黄褐色ローム

３．まとめ

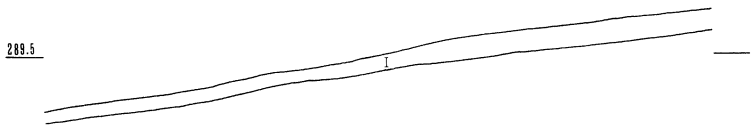
調査の結果、縄文土器片が数点出土したが、中世の城館につながる遺構・遺物は出土しなかった。



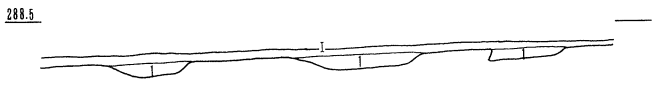
第４図　調査区全体図（1/3,000）



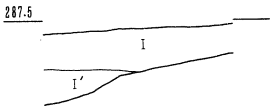
第１トレンチ北壁土層



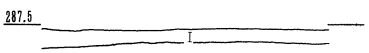
第２トレンチ北壁土層



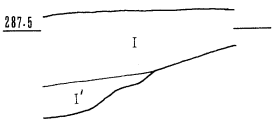
第３トレンチ東壁土層



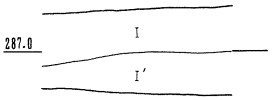
第６トレンチ北壁土層



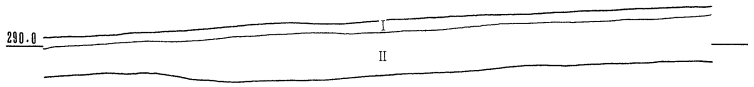
第４トレンチ東壁土層



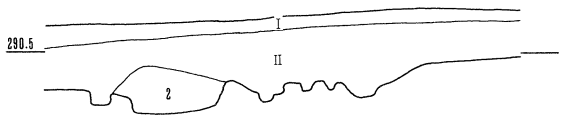
第５トレンチ北壁土層



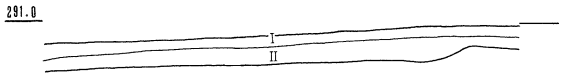
第７トレンチ北壁土層



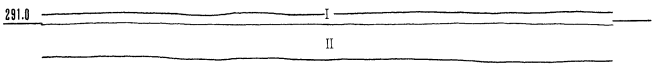
第８トレンチ東壁土層



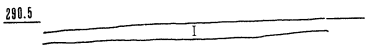
第９トレンチ北壁土層



第10トレンチ北壁土層



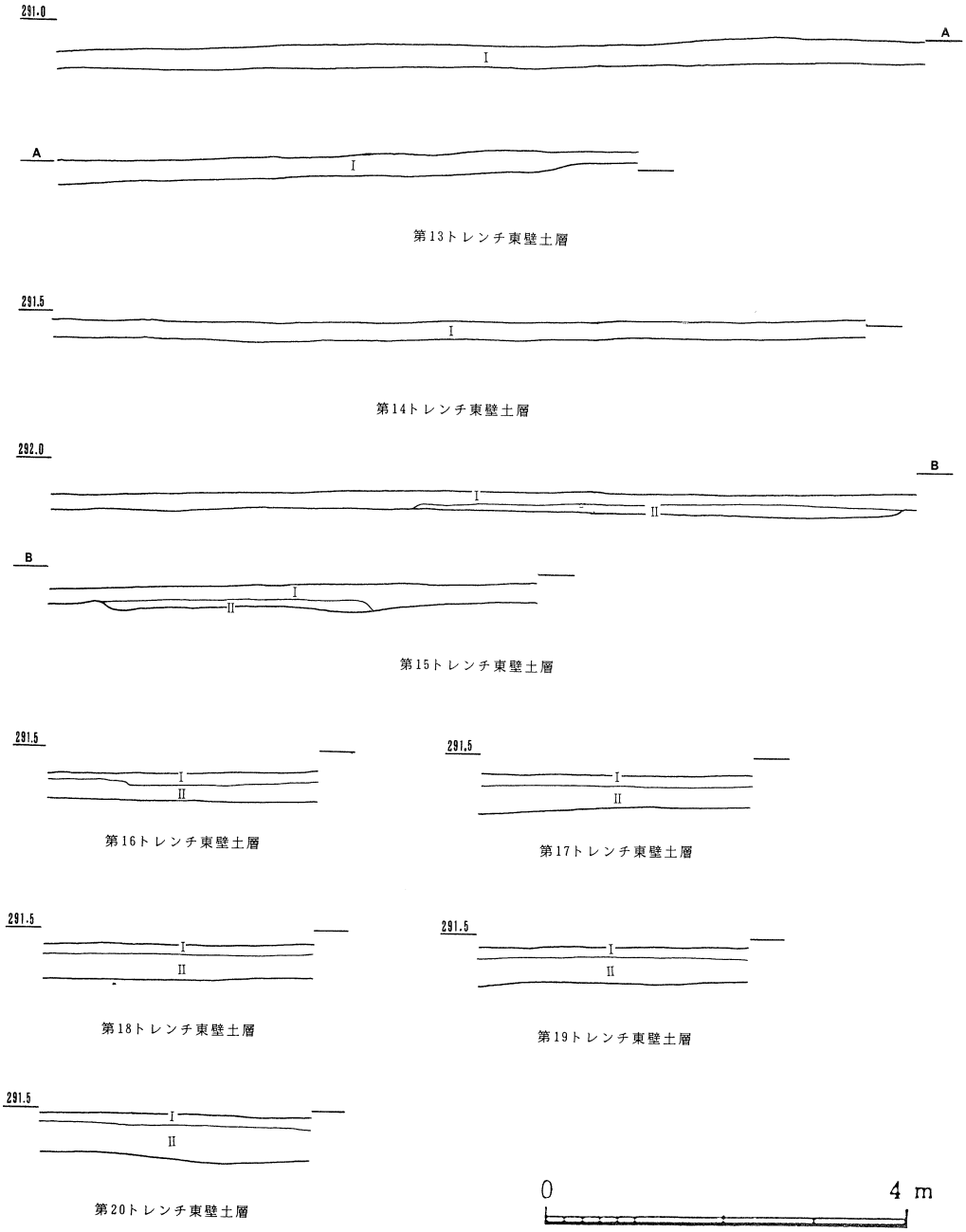
第11トレンチ西壁土層



第12トレンチ東壁土層

I　褐色土　　しまりなし　耕作土
I′　褐色土　　しまりややあり　耕作土
II　褐色土　　しまりあり　ロームブロック多く含む　耕作土
1　明褐色土　白色粘土塊・小礫含む　攪乱
2　褐色土　　しまりあまりない　ローム粒多く含む　攪乱

第５図　土層図(1)


291.0
A
I
A
I
第13トレンチ東壁土層
291.5
I
第14トレンチ東壁土層
292.0
B
I
II
B
I
II
第15トレンチ東壁土層
291.5
I
II
第16トレンチ東壁土層
291.5
I
II
第17トレンチ東壁土層
291.5
I
II
第18トレンチ東壁土層
291.5
I
II
第19トレンチ東壁土層
291.5
I
II
第20トレンチ東壁土層
0
4 m

第6図　土層図(2)

第５章　平成７年度駒平遺跡の調査

１．調査経緯

平成８年１月12日　文化庁に発掘通知を提出
平成８年１月17日　発掘調査を開始
平成８年２月27日　発掘調査終了
平成８年３月１日　南甲府署に遺失物発見届を提出

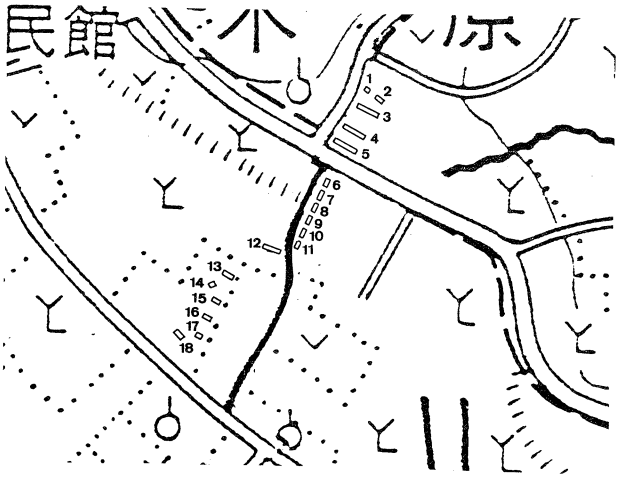
２．調査方法及び基本層序

東八代郡豊富村木原字駒平に所在し、曽根丘陵西側の一角に広がる台地平坦部に立地する。

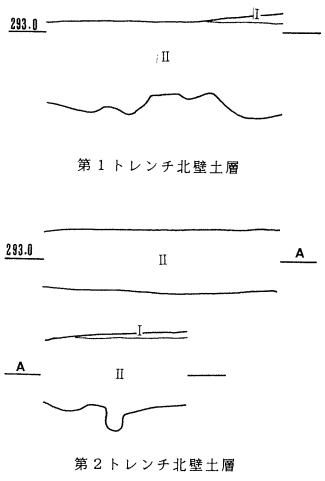
当遺跡のほぼ中央に縦断して村道建設計画があり、試掘調査を行った。調査面積は、173㎡である。調査方法は、調査対象地に応じて幅２ｍ、長さは任意のトレンチを18か所設定して掘り下げた。

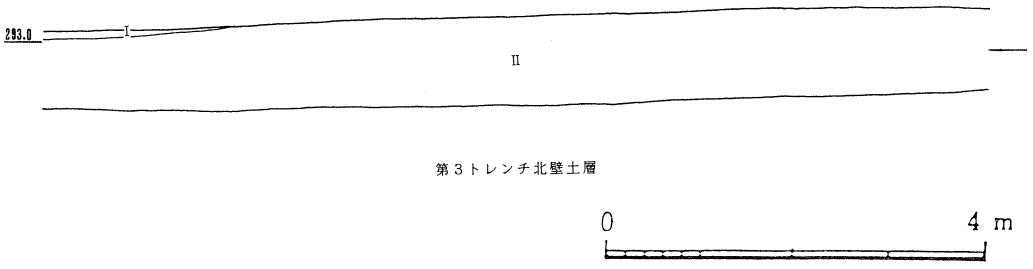
本調査の基本層序は、次のとおりである。

第Ⅰ層　褐色土（耕作土）　　第Ⅱ層　黒褐色土　　第Ⅲ層　明褐色土
第Ⅳ層　黄褐色ローム

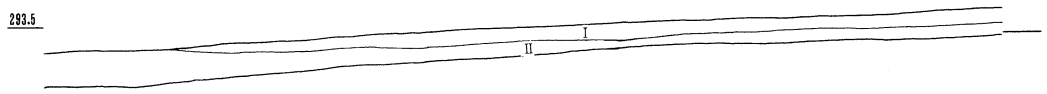


第７図　調査区全体図（1/3,000）

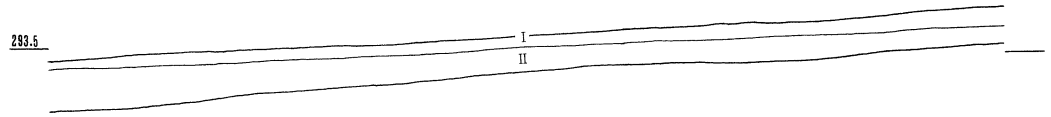




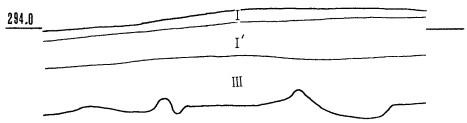
第８図　土層図(1)



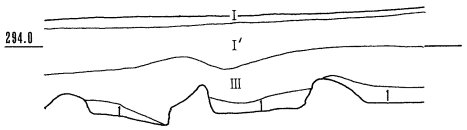
第４トレンチ北壁土層



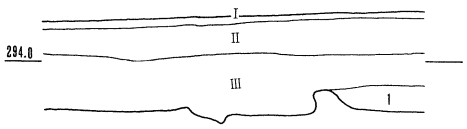
第５トレンチ北壁土層



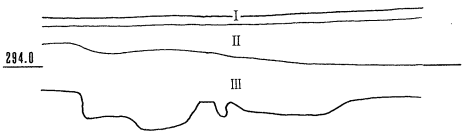
第６トレンチ東壁土層



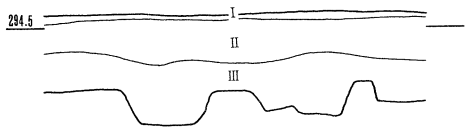
第７トレンチ東壁土層



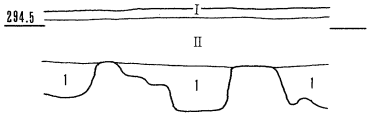
第８トレンチ東壁土層



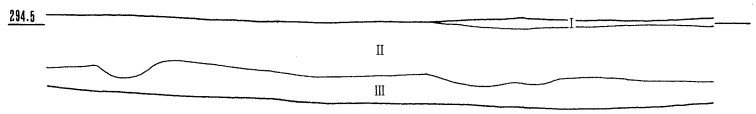
第９トレンチ東壁土層



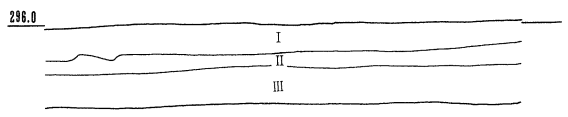
第10トレンチ東壁土層



第11トレンチ東壁土層

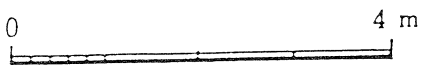


第12トレンチ北壁土層

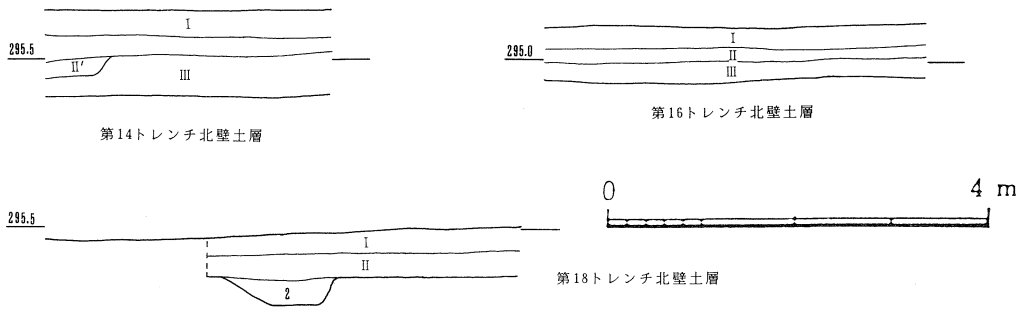


第13トレンチ北壁土層

I　褐色土　しまりなし　耕作土
I′　褐色土　しまりなし　ローム粒含む　耕作土
II　黒褐色土　しまりなし
II′　黒褐色土　しまりなし　褐色土多く含む
III　褐色土　しまりなし　黒色土・ロームブロック含む
1　褐色土　しまりなし　ロームが全体的に含まれる　黒色土含む　撹乱
2　黒褐色土　しまりあり　ローム粒含む　II層より暗い　３号土坑の覆土



第９図　土層図(2)



第10図　土層図(3)

3．検出された遺構と遺物

(1)第13・14トレンチの遺物（第12～23図）

遺構は発見できなかったが、縄文時代中期初頭の五領ヶ台式土器がまとまって出土した。第13トレンチが2×5m、第14トレンチが2×3mの設定と調査面積が狭いため、詳細は不明だが、多数の土器の出土や炉と思われるような焼土も見られたので、住居内の可能性もある。

1～29・49は、第13トレンチのIII層から出土したものである。1～4は、口唇部に縄文帯を持ち、胴部は縄文地に沈線文を施す。5～8は、口縁部で口唇部に縄文帯を持つ。9～15は、縄文地に沈線文。16～18・20は、縄文地に半載竹管による沈線。19は、刻目口縁で沈線文。21は、Y字形刻文。22は、隆線で区画を作り、その内側に押引きをする。23・24は、隆線文。25～29は、底部で、25は、縄文地に沈線文で、胴部下半部に結節縄文を施す。26は、縄文LR。27は、結節縄文。28は、垂下隆線。29は、沈線文。49は、浅鉢である。外面の口縁端部と内面の口唇部に連続爪形文を施す。

1～21・25～29・49は、縄文時代中期初頭の五領ヶ台式土器、22～24は、縄文時代中期前半である。

30～37は、第13トレンチのII層から出土したもので、30は、有孔鍔付土器。31は、押引文。32～34は、大石式によく見られるY字形刻文。35・36は、押引文により楕円区画を作る。37は、口縁部にC字文を貼付する。

30～34は、縄文時代中期初頭の五領ヶ台式土器で、35～37は、縄文時代中期前半である。

38～52は、第14トレンチのIII層から出土したもので、38は、口縁部に3段の押引文と1段の複合鋸歯文で、胴部は、沈線区画内に沈線による逆U字文と綾杉文のような斜線を組み合わせる。39は、口縁部が複合鋸歯文と押引文の下部に条線、胴部が押引文の下部に複合鋸歯文、平行線、斜格子文を沈線で施す。40は、口縁部に1段の複合鋸歯文と押引文、そして2本の沈線を廻らす。胴部は、縄文地で上位に1段の複合鋸歯文と3本の平行沈線を廻らし、上位から底部にかけて8本単位の懸垂文で区画を4分割している。底部に網代痕が残る。41～45は、複合鋸歯文である。46は、半載竹管による懸垂文、47は、縄文地に沈線文、48は、波状口縁で集合

沈線、50～52は、浅鉢の口縁部で、内面に３～４段の押引文を施す。

38～52は、縄文時代中期初頭の五領ヶ台式土器である。

53～60は、土製円盤である。53～59は、第13トレンチのII層から、60は、同III層から出土した。幅は、2.5～4.2cmである。61は、土偶の脚部で第13トレンチのII層から出土した。

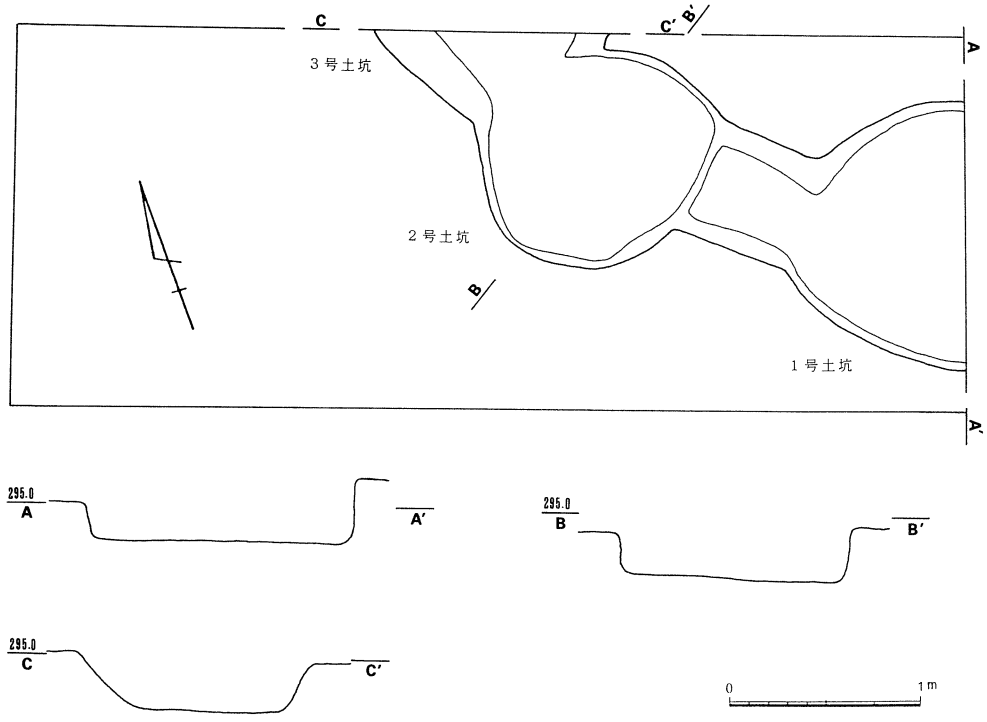
62～65は石鏃で、いずれも無茎。黒曜石製である。66～69は、凹石である。いずれも安山岩を使っている。

(2)第18トレンチの遺構と遺物（第11図）

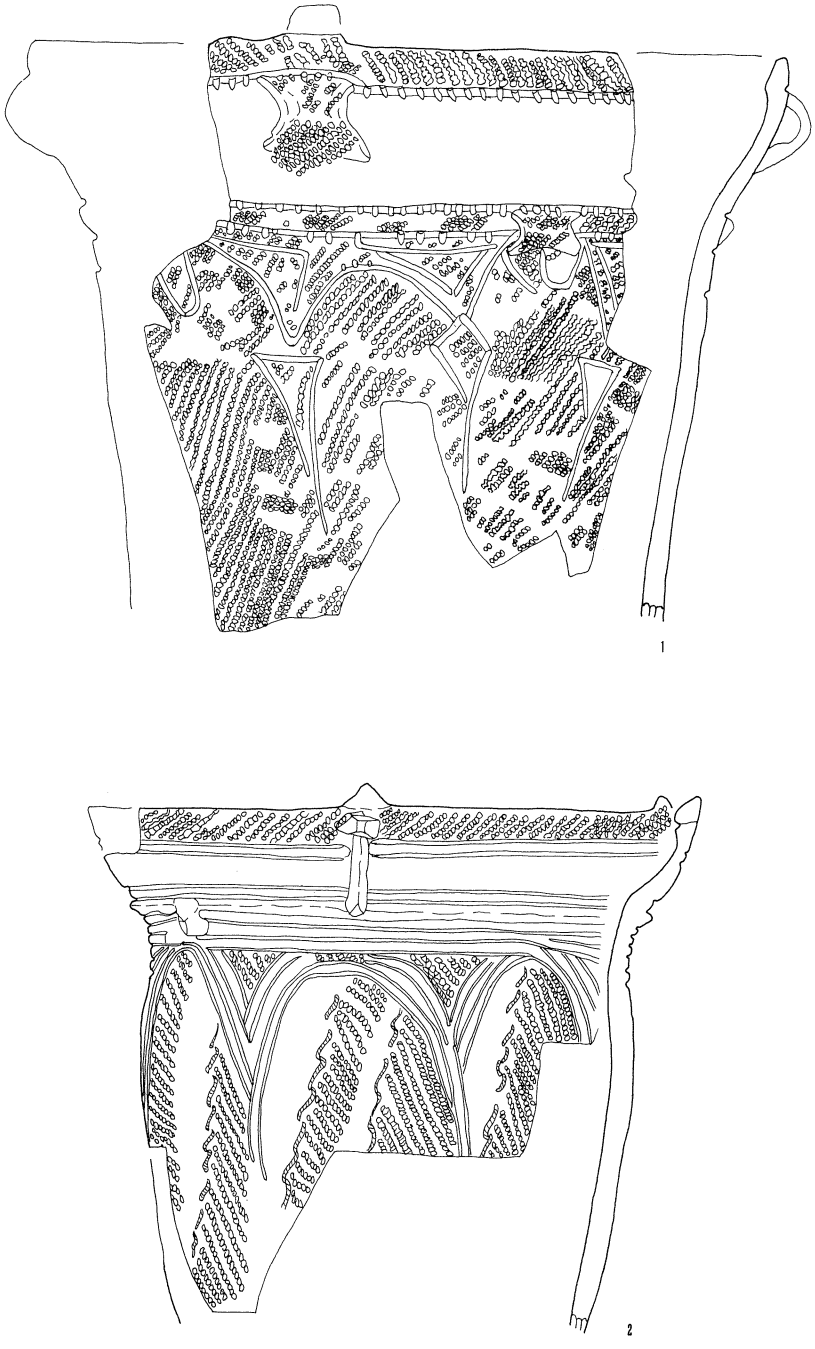
１号土坑（第11図）

第18トレンチの東端に位置し、東側に延びる。平面プランは、円形を呈し、東西95cm以上、南北140cm、深さ35cmを測る。西側に張り出た落ち込みが続き、２号土坑と切り合う。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は、平坦である。

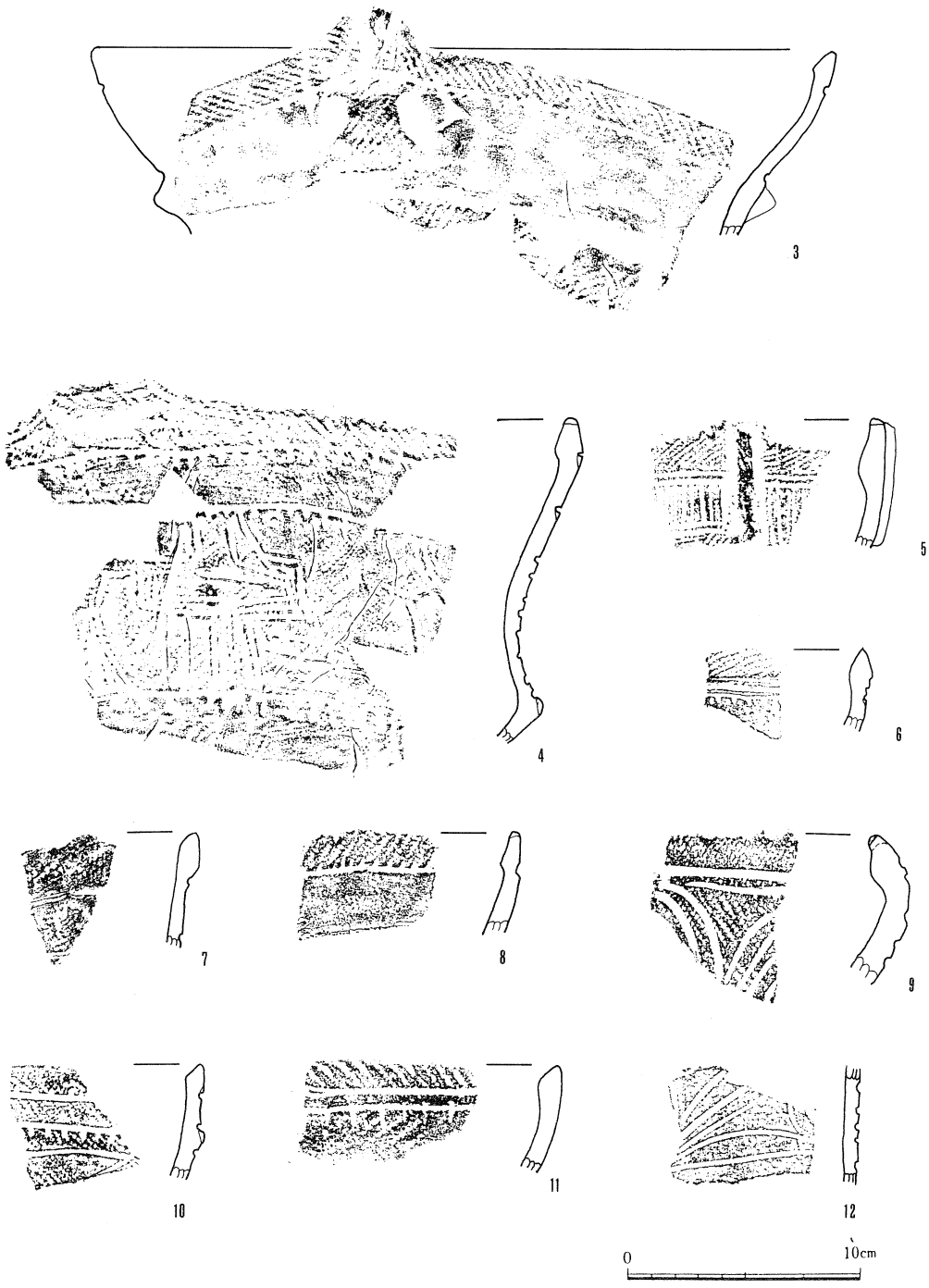
１～３号土坑は、当初、１本の溝と思っていっしょに掘り上げたが、掘削後、３つの土坑に分かれることが判明した。そのため、出土遺物は、１～３号土坑まとめて取り上げてしまった。その内容は、縄文土器の細片が10点ほど出土しているだけで、時期不明である。



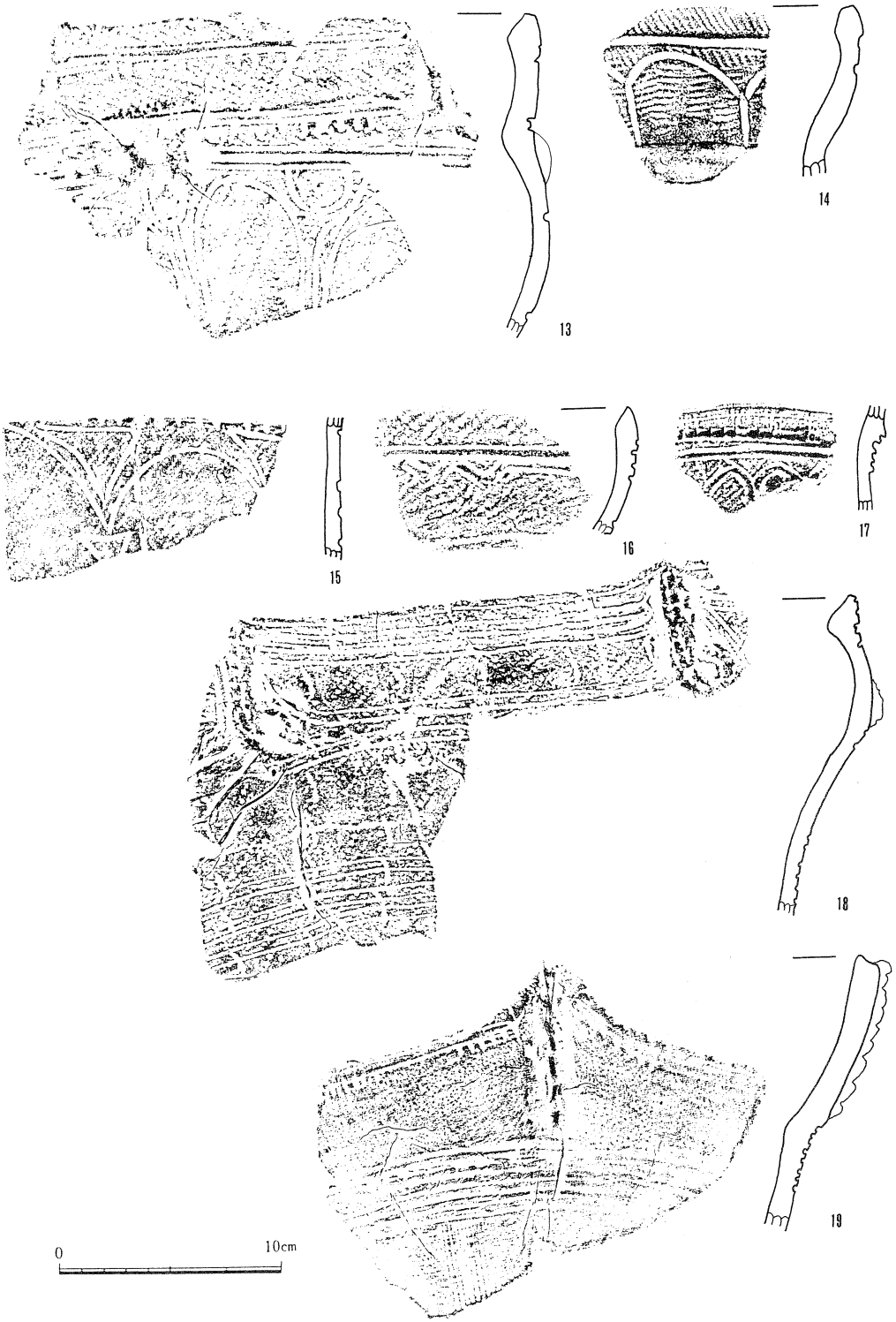
第11図　１～３号土坑



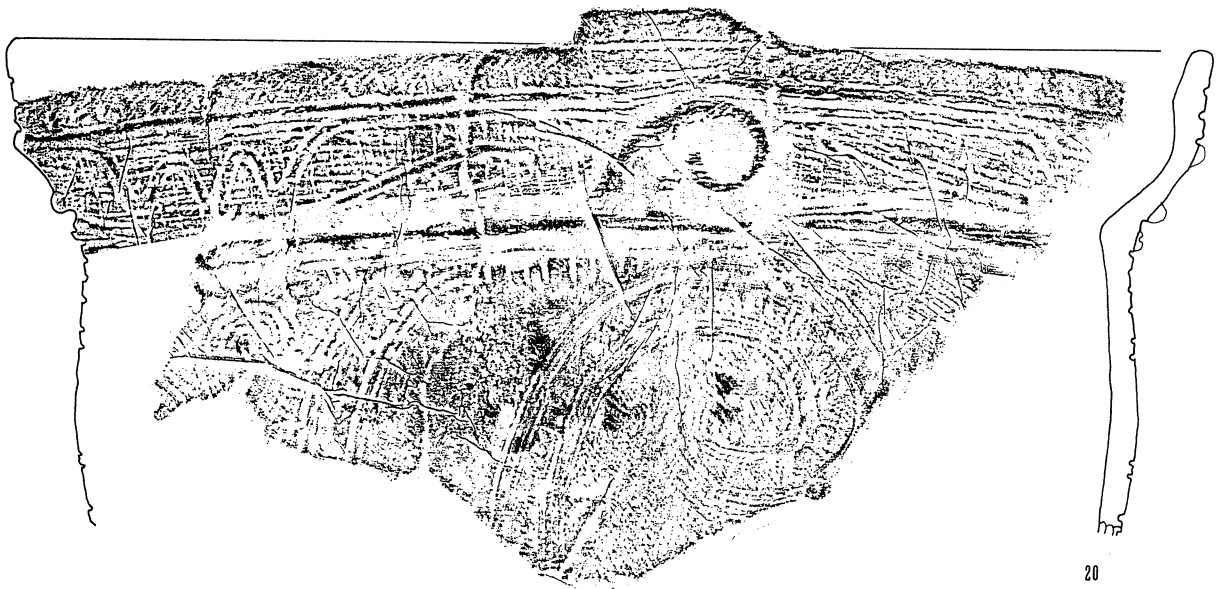
第12図　縄文土器(1)



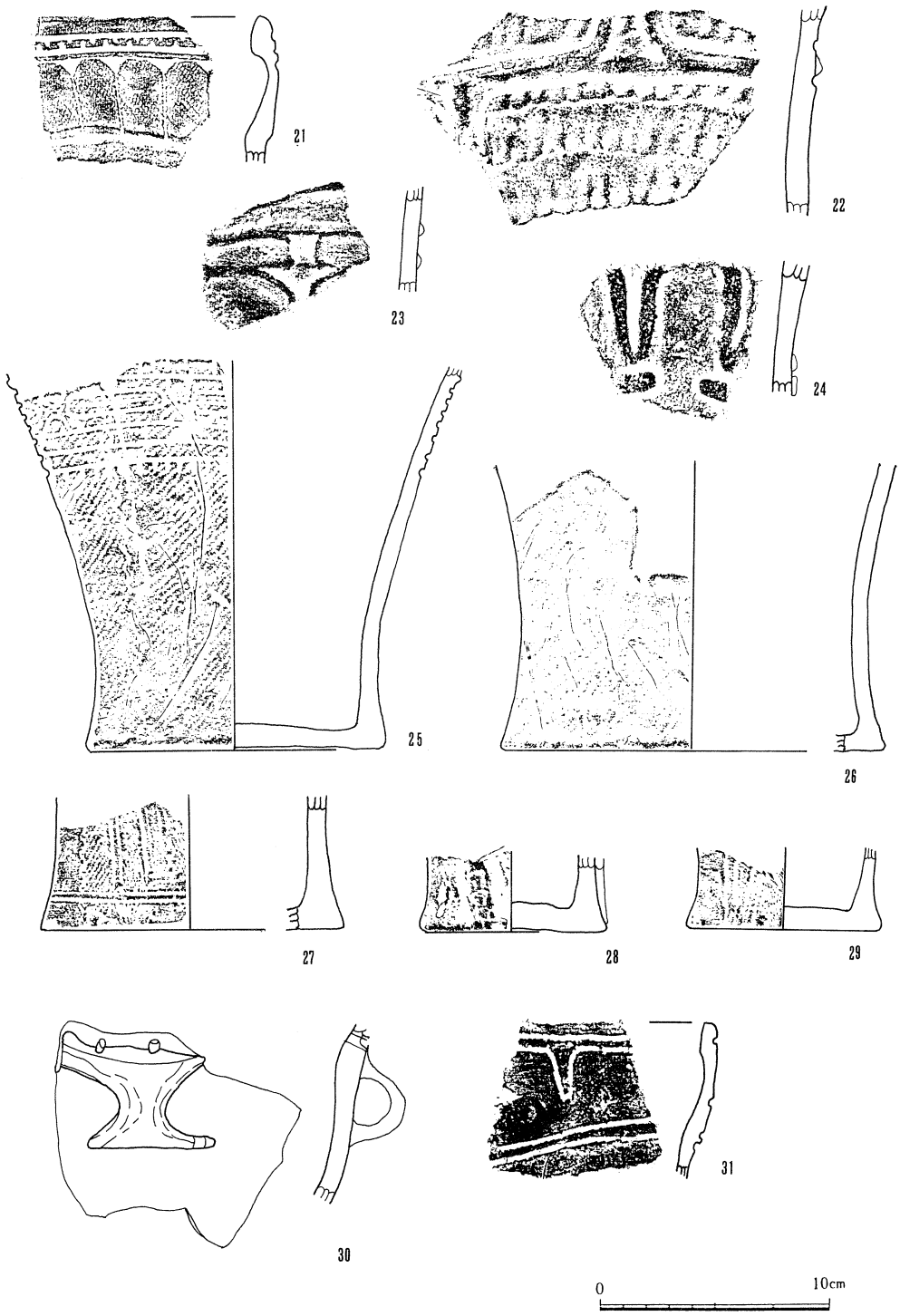
第13図　縄文土器(2)



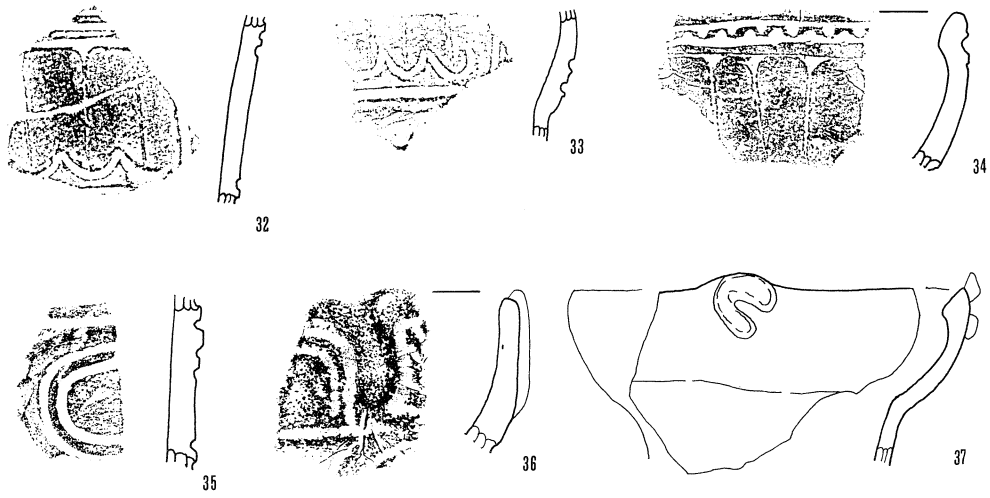
第14図　縄文土器(3)

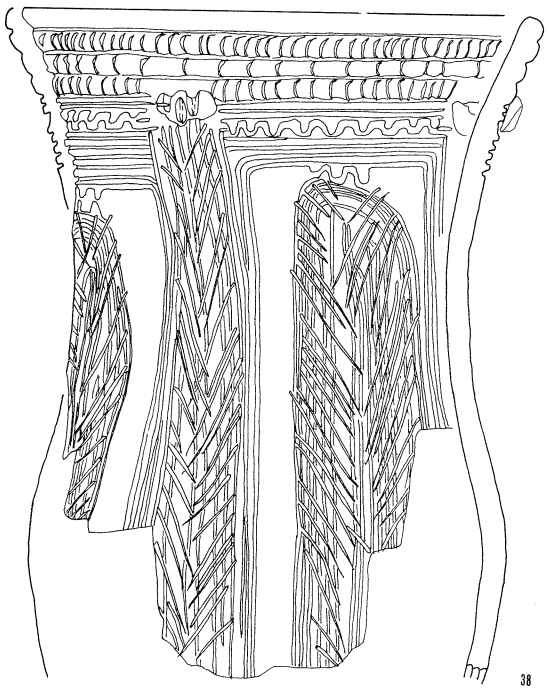


第15図　縄文土器(4)

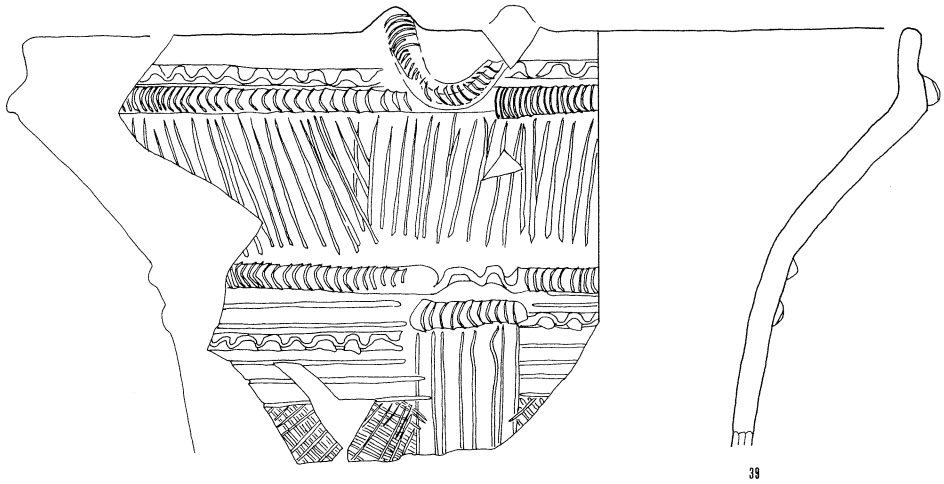


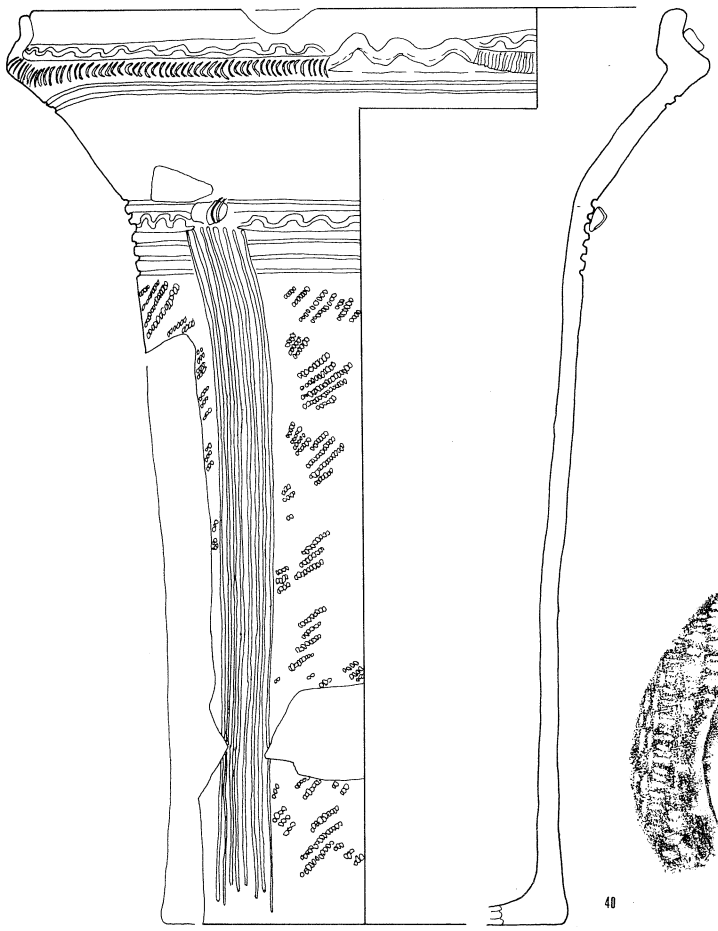
第16図　縄文土器(5)



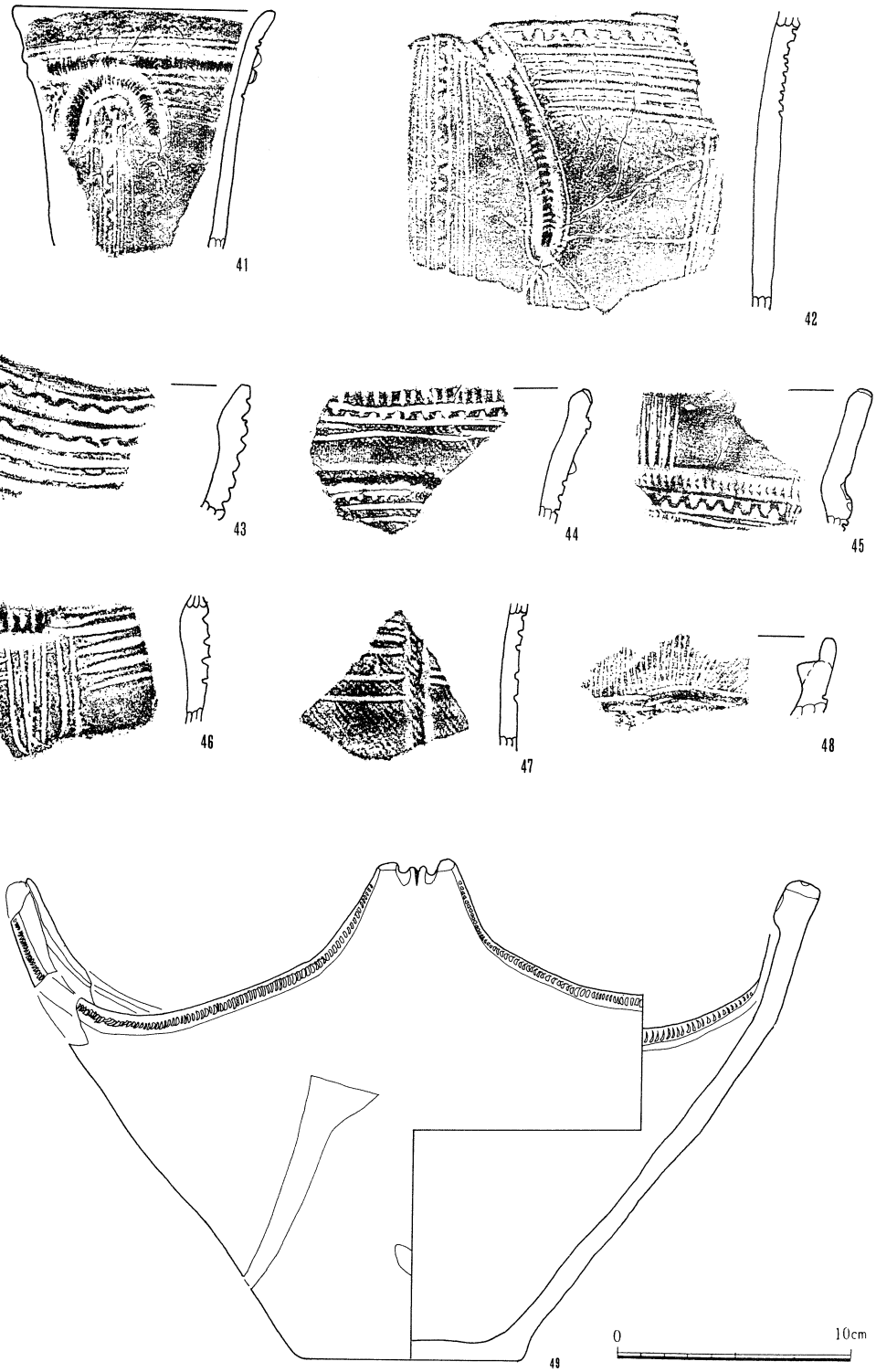


第17図　縄文土器(6)

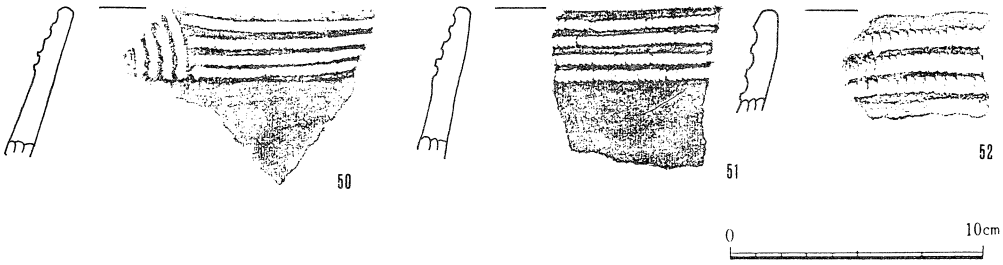




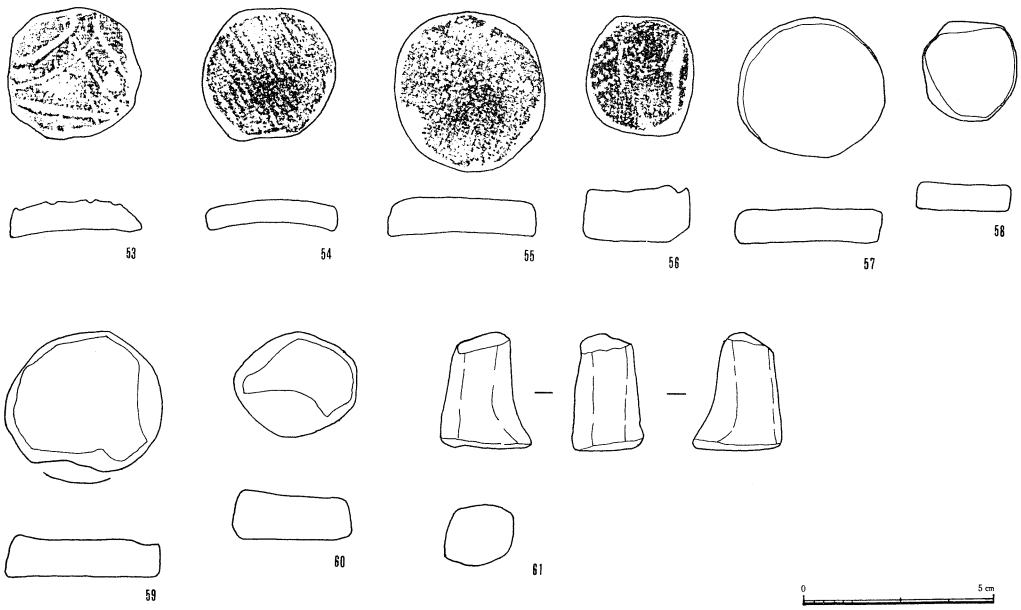
第18図　縄文土器(7)



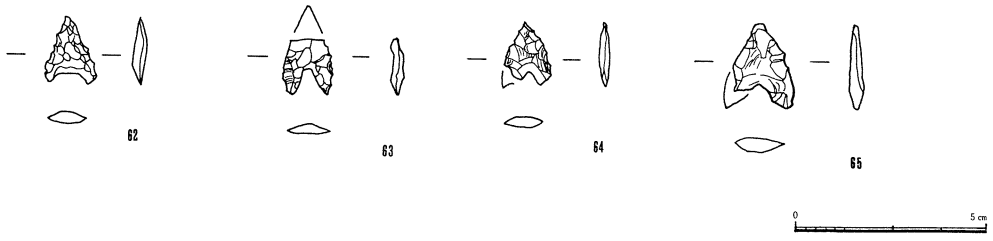
第19図　縄文土器(8)



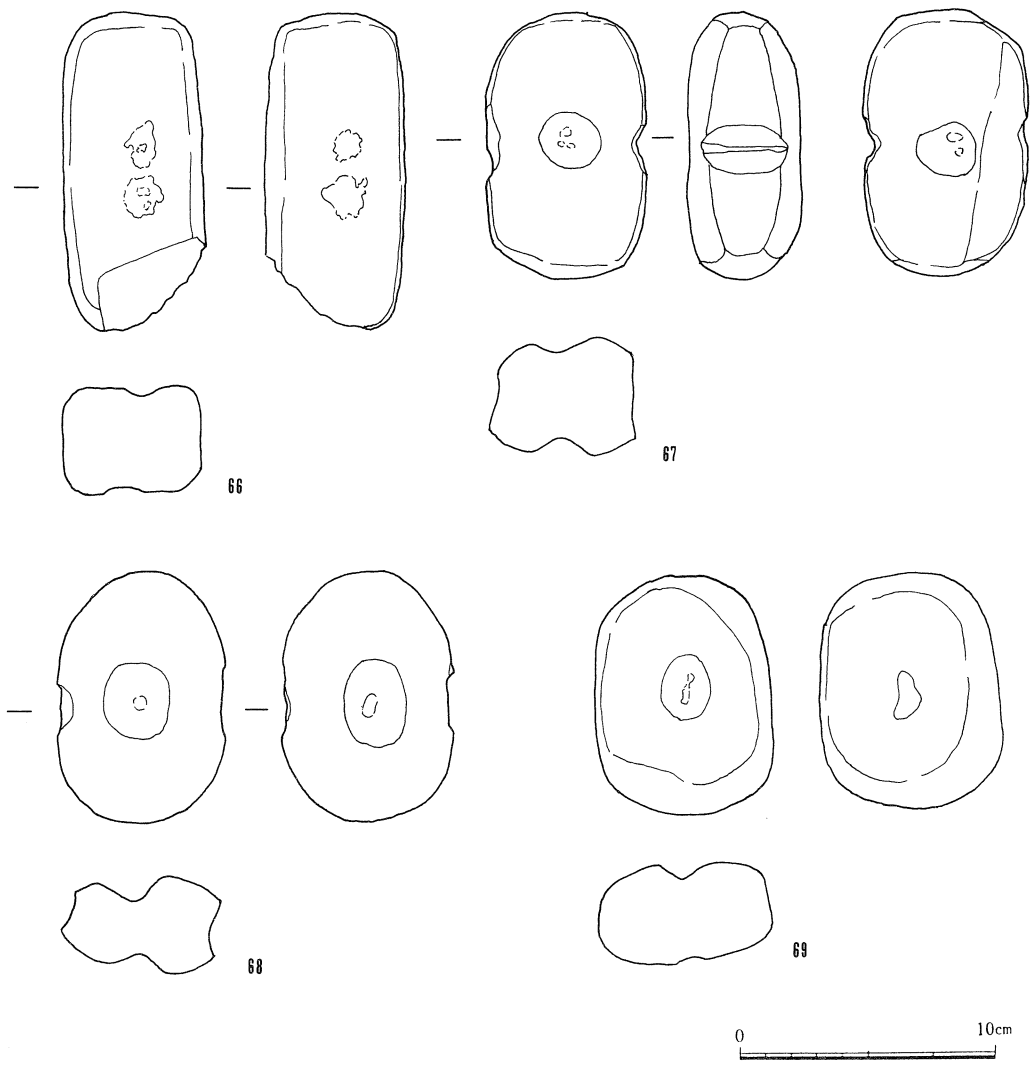
第20図　縄文土器(9)



第21図　土製品



第22図　石器(1)



第23図　石器(2)

2号土坑（第11図）

第18トレンチの中央に位置し、北側は3号土坑と切り合っている。平面プランは、円形を呈しており、東西130㎝以上、南北115㎝、深さ28㎝を測る。壁面は、ほぼ垂直に立ち上がり、底面は、平坦である。

3号土坑（第11図）

第18トレンチの北側に位置し、南側は、2号土坑と切り合っている。平面プランは、円形を

呈するものと思われ、東西130㎝以上、深さ30㎝を測る。壁面は、急に立ち上がり、底面は、ほぼ平坦である。

4．まとめ

調査の結果、時期不明の土坑が3基検出された。当初、溝と思って覆土を掘削していたが、調査の過程で、3基の土坑が重なっていることが判明した経緯があるので、新旧や出土遺物の帰属はわからない。

今回の調査では、縄文時代中期初頭のいわゆる五領ヶ台式土器が一括して発見されたのは、大きな成果といえるであろう。これらの土器群は、五領ヶ台式後半のものであり、その中には、一部長野県に多く見られる大石式と思われるような文様も混じっている。これらの土器群が遺構に伴うものかどうかは、今回の調査でわからなかったが、それは今後の調査に期待したい。その他、特筆できるものは、時期がわからないが、土偶の脚部や土製円盤が出土し、本村では、初めての出土となる。

今回の調査は、調査面積が狭かったにもかかわらず、これほどの成果を上げたことは、本遺跡が内容の濃い遺跡であることの証であろう。

第６章　平成８年度大鳥居宇山平遺跡の調査

１．調査経緯

平成８年４月24日　文化庁に発掘通知を提出
平成８年５月15日　発掘調査を開始
平成８年６月３日　発掘調査終了
平成８年６月５日　南甲府署に遺失物発見届提出

２．調査方法及び基本層序

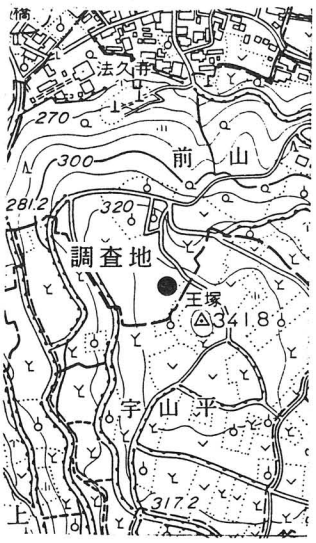
東八代郡豊富村大鳥居字宇山平・高部字前山に所在し、曽根丘陵を形成する宇山平と呼ばれる台地状の西側に立地する。同遺跡の中央部に帆立貝式古墳で知られる王塚古墳が占地する。

その王塚古墳の西側、高部地内で桃の植樹・栽培を行う集団化事業の計画があり、王塚古墳の前方部に近い所では、周溝にかかる可能性もあり、試掘調査を実施した。

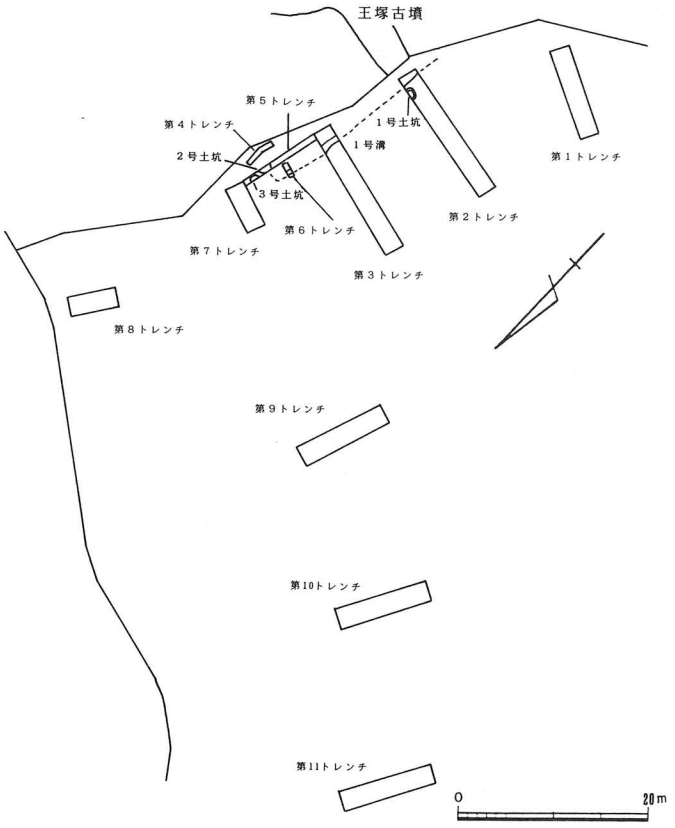
調査方法は、調査対象地に応じて幅0.4m～２m、長さは２～15mのトレンチを11か所設定して掘り下げた。

本調査の基本層序は、次のとおりである。

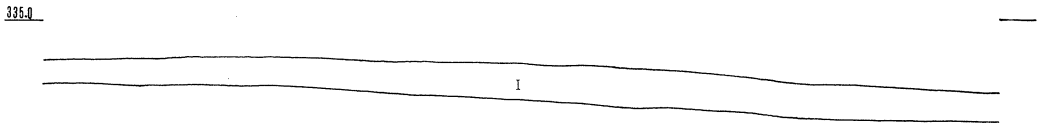
第Ⅰ層　褐色土（耕作土）　　第Ⅱ層　黄褐色ローム



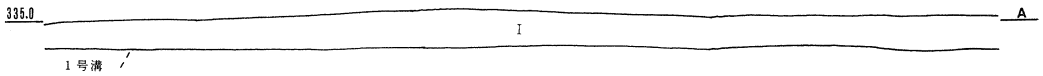
第24図　調査区位置図
(1/10,000)

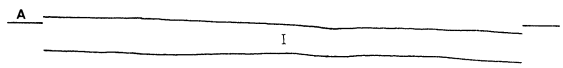


第25図　調査区全体図

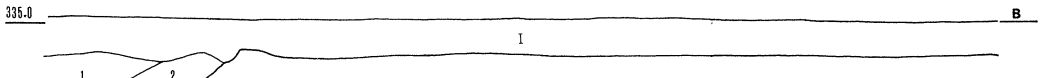


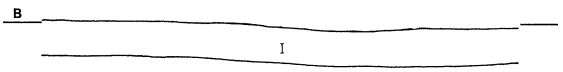
第１トレンチ南壁土層



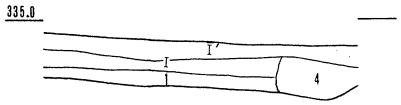


第２トレンチ南壁土層



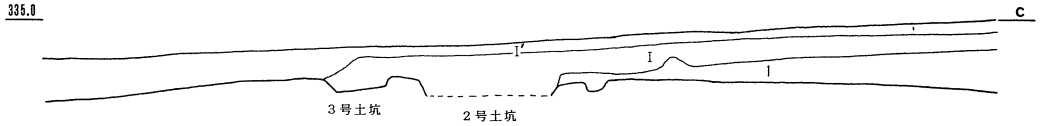


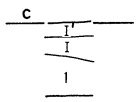
第３トレンチ南壁土層



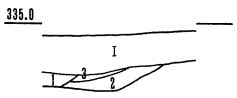
第４トレンチ西壁土層

I　褐色土　しまりなし　耕作土
I　褐色土　Ⅰ層よりしまりなし
1　黒褐色土　しまりなし　ローム少し含む　１号溝の覆土
2　褐色土　しまりなし　ローム少し含む　１号溝の覆土
3　暗褐色土　しまりなし　ローム含む　１号溝の覆土
4　褐色土　しまりなし　撹乱

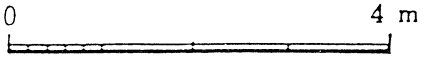




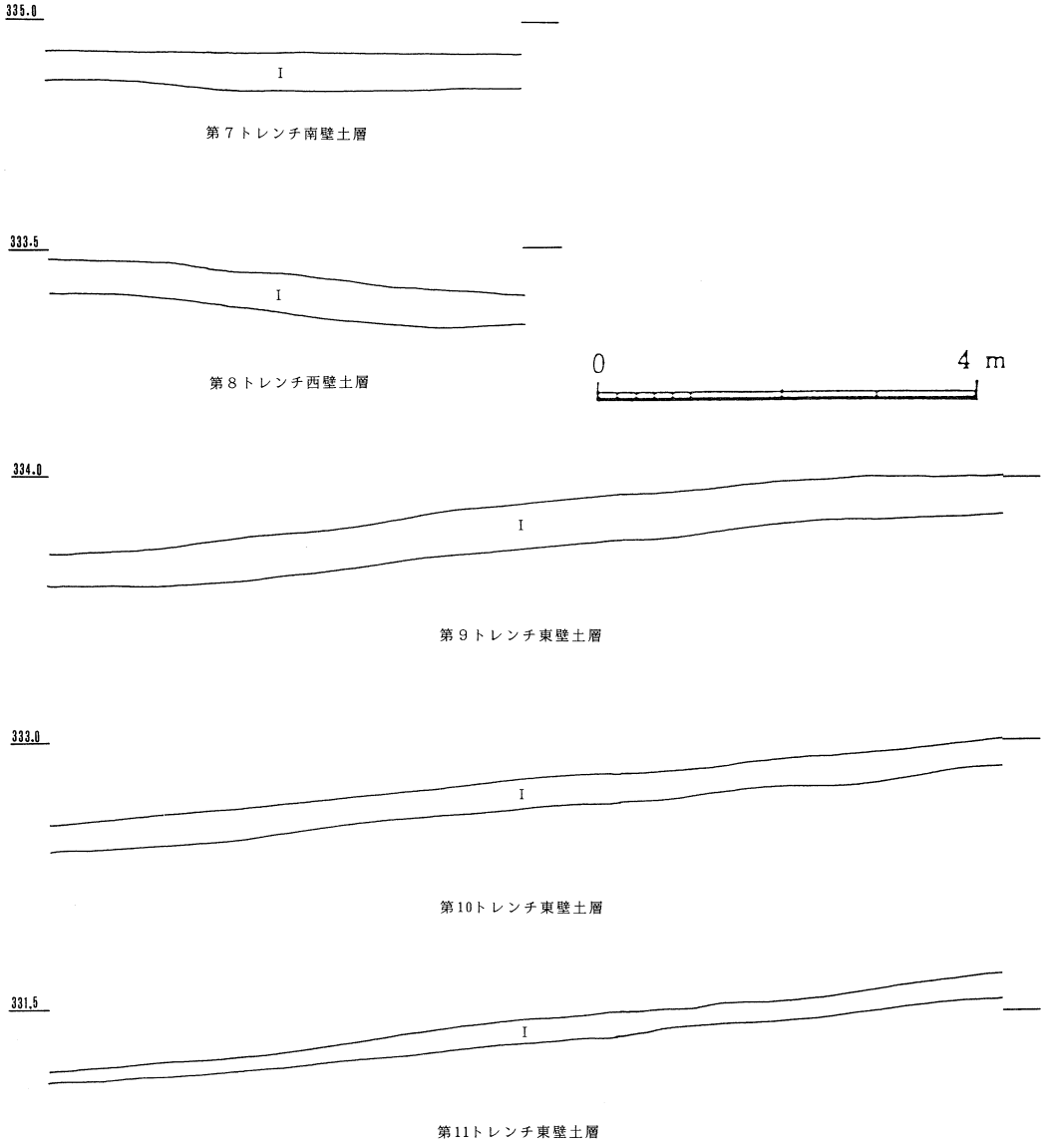
第５トレンチ東壁土層



第６トレンチ南壁土層



第26図　土層図(1)



第27図　土層図(2)

3．検出された遺構と遺物

(1) 第２・３・５・６トレンチの遺構と遺物（第25・28～34図）

１号土坑（第25図）

第２トレンチの東側に位置し、北側は調査区外に延びる。平面プランは円形を呈し、東西100㎝、南北80㎝以上、深さ20㎝を測る。立ち上がりは、ほぼ垂直で中に入り込み、袋状土坑

を呈する。覆土は、ローム小ブロックを含む。

出土遺物は、円筒埴輪の破片が数点混入していた。年代時期は、不明である。

1号溝（第28～34図）

王塚古墳の前方部を廻る周溝である。第2・3・5・6トレンチにかかって確認された。第2トレンチでは、調査区東端より90㎝西、第3トレンチでは調査区東端210㎝西の位置で西側の立ち上がりラインが確認でき、それに対する東側の立ち上がりは見つからなかった。また、前方部の北辺部確認のため、第5トレンチを設定したが、ちょうど立ち上がり推定ライン付近に2・3号土坑があり、撹乱されているため、平面プランでは確認できなかったが、3号土坑より北側の第7トレンチ内で、覆土の黒褐色土が見られず、おそらく、2号土坑あたりが前方部の北辺部になると思われる。

第2トレンチ側は、平面プランの確認のみを行い、覆土の掘削は行わなかった。第3・5・6トレンチ内で遺構の覆土を掘削し、周溝の状態を調べた。深さは第3トレンチでは、確認面より40㎝を測り、立ち上がりは比較的緩やかである。覆土は黒褐色土と褐色土の2層であり、遺物は黒褐色土から多く出土した。第6トレンチでは、黒褐色土と暗褐色土と褐色土の3層に分けられた。

出土遺物は、第3・5トレンチを中心に円筒埴輪の破片が多数出土した。この中には、口縁部から下に3条のタガまで復元できるものがヘラ記号入りを含め2点ある。また、主に上層の黒褐色土より30㎝前後の礫がいくつか出土した。ただし、それらが古墳の葺石に使われていたものかどうかは不明である。

(2) 第5トレンチの遺構と遺物（第25図）

2号土坑（第25図）

第5トレンチの北側に位置し、東西両側は、調査区外に延びる。平面プランは、やや方形を呈するものと思われ、東西65㎝以上、南北100㎝以上である。完掘はせず、平面プランを確認したにとどめた。

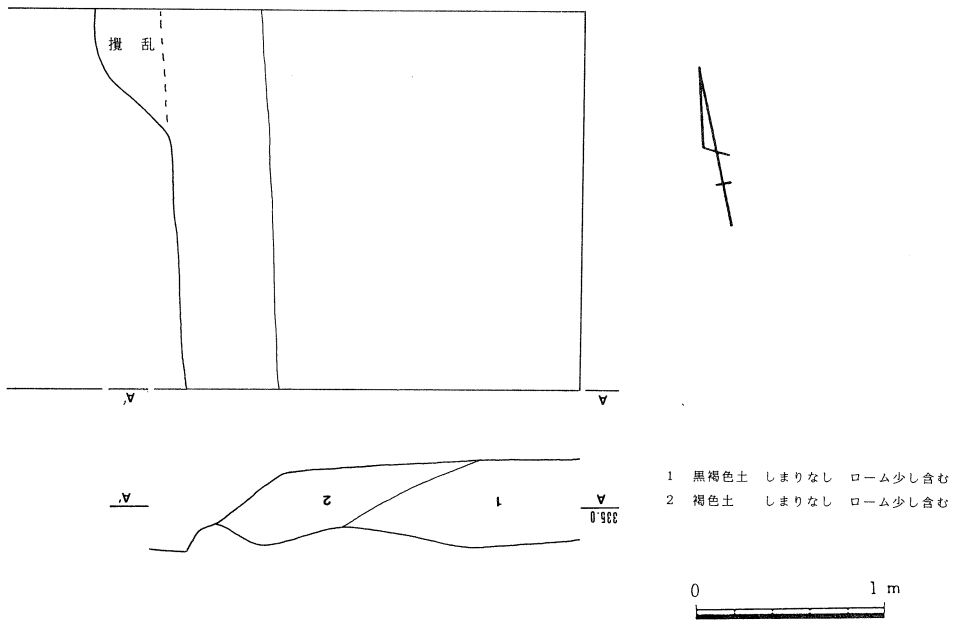
3号土坑（第25図）

第5トレンチの北側、2号土坑の北側に位置する。西側は調査区外に延びる。平面プランは円形を呈し、東西60㎝以上、南北105㎝以上である。完掘はせず、平面プランを確認したにとどめた。

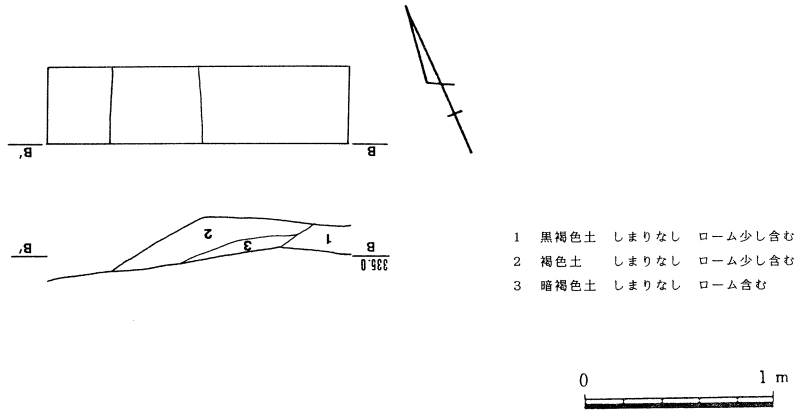
4．まとめ

調査の結果、王塚古墳の周溝と思われる溝と3基の土坑が検出された。土坑については、近年掘られた芋穴かもしれない。

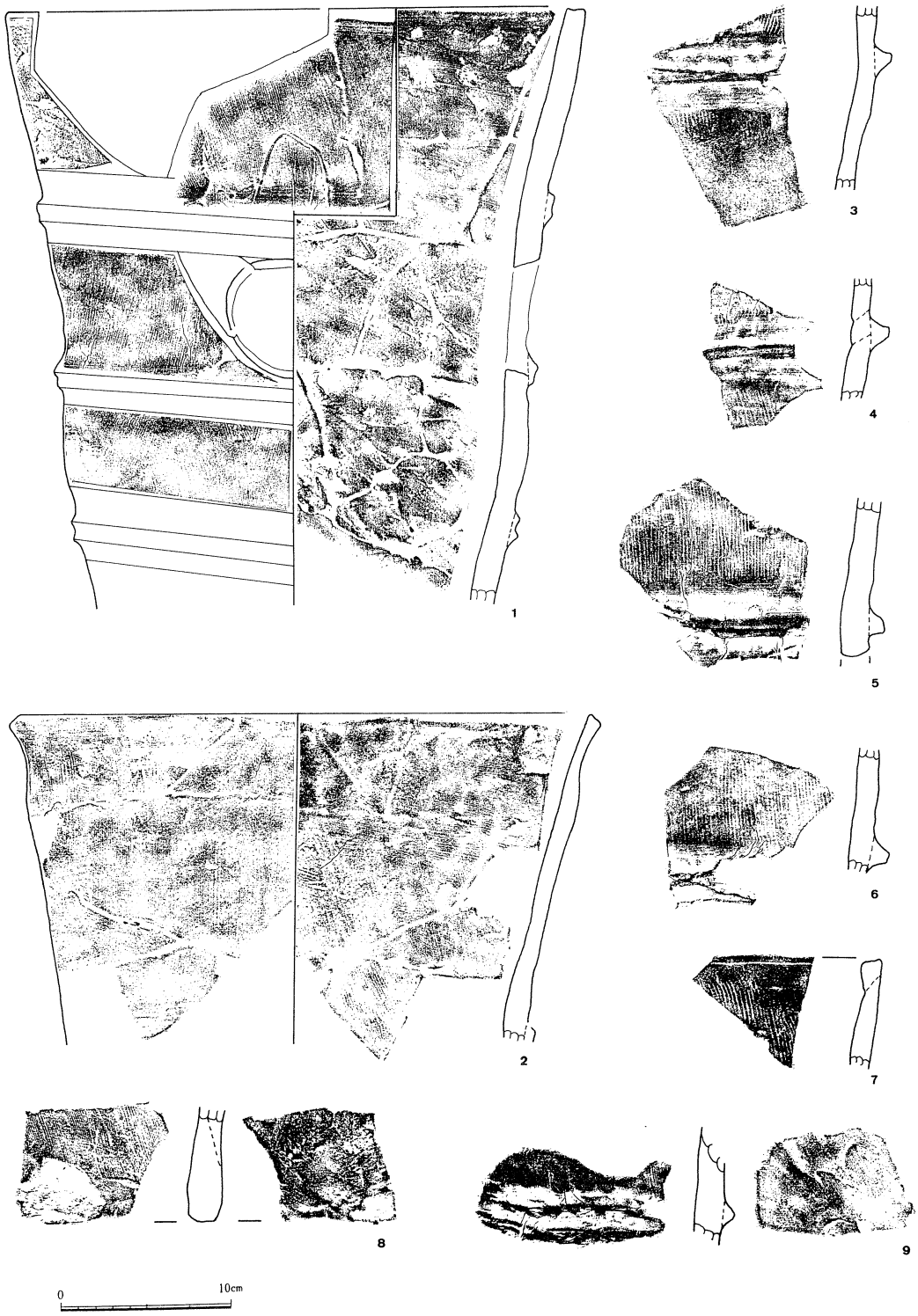
王塚古墳は、帆立貝式古墳とされ、外部施設として、墳丘に円筒埴輪を廻らせ、人物・馬形



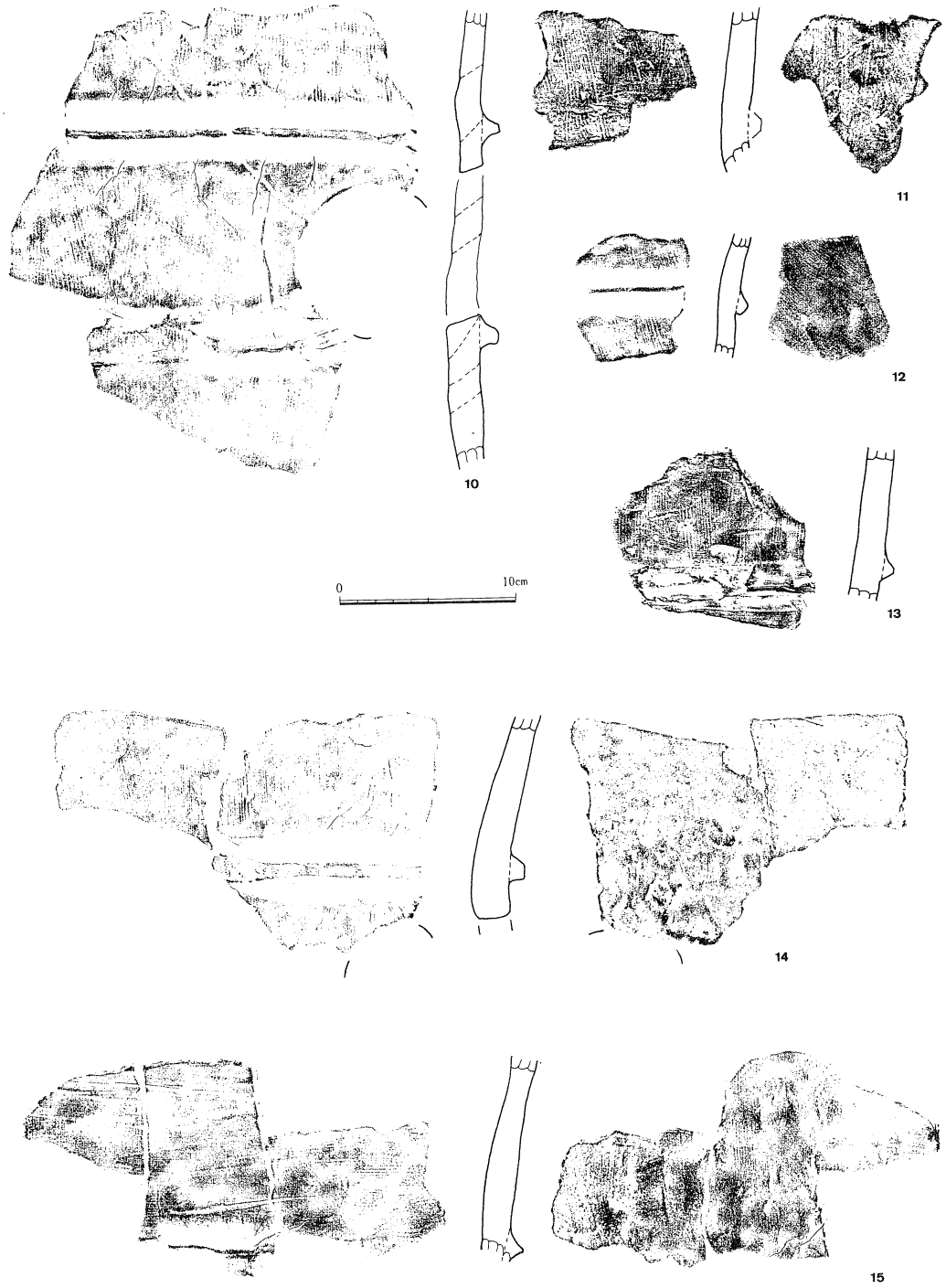
第28図　第３トレンチ１号溝



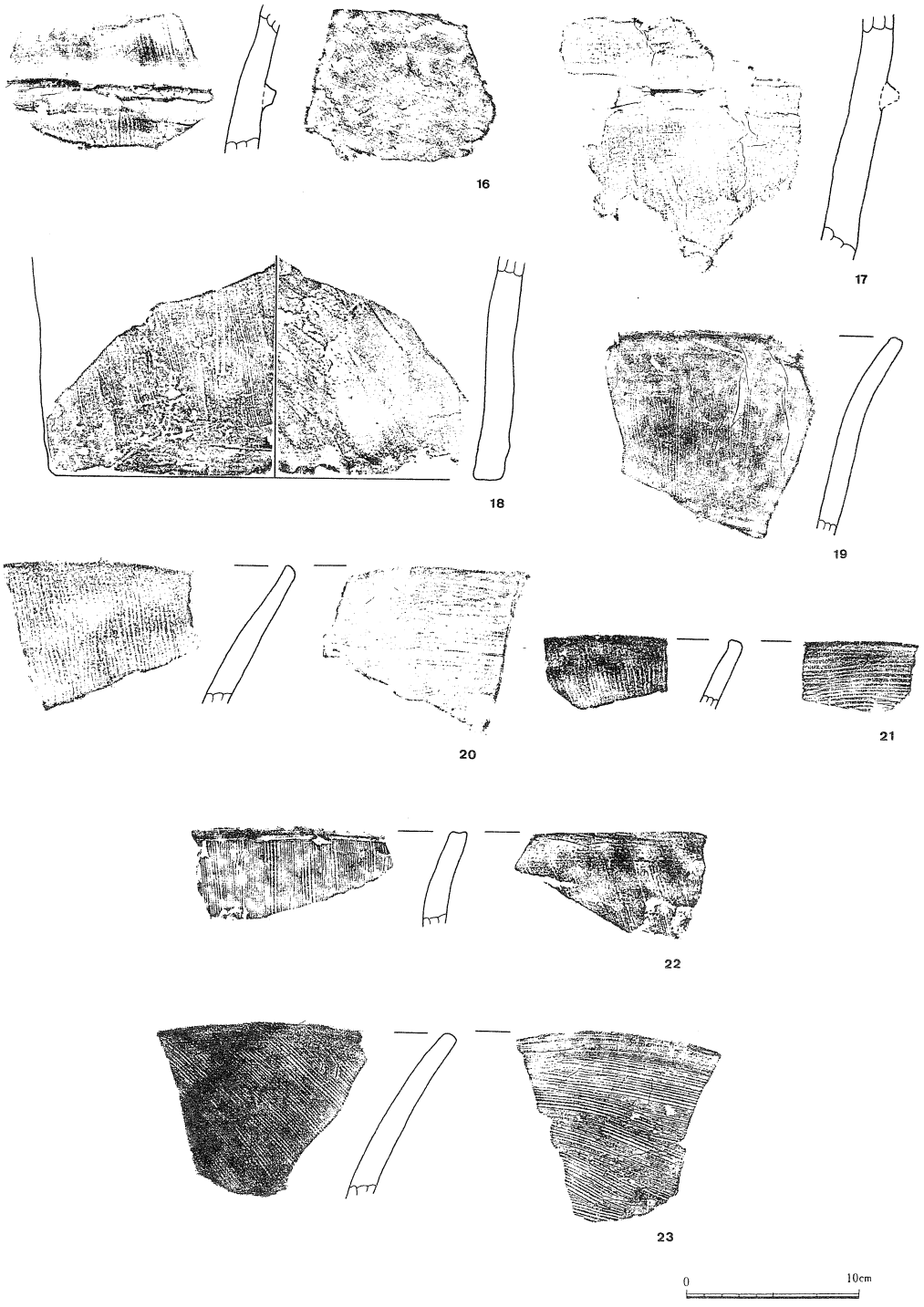
第29図　第６トレンチ１号溝



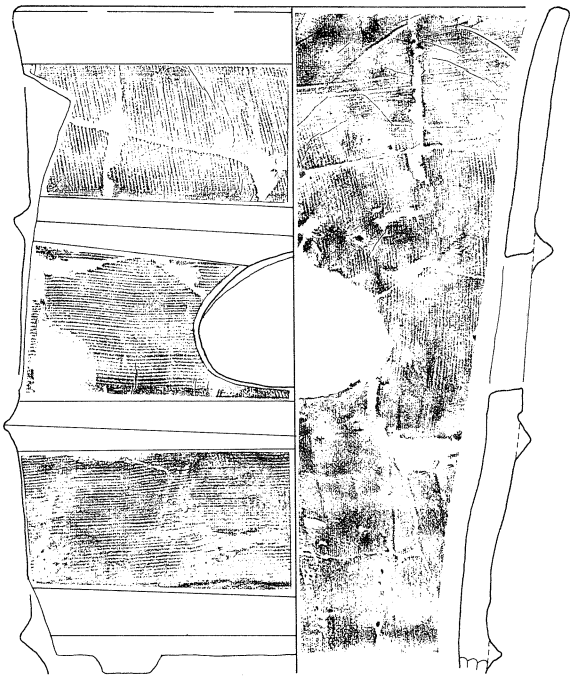
第30図　円筒埴輪(1)

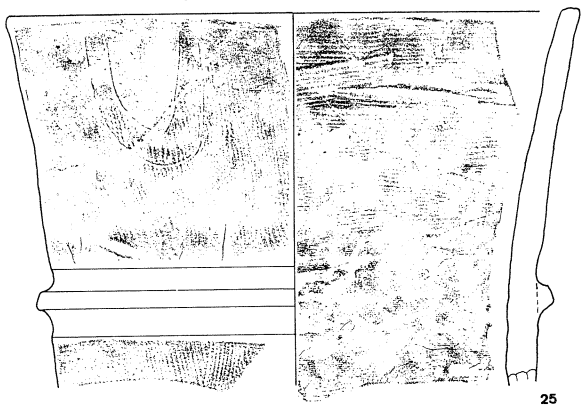


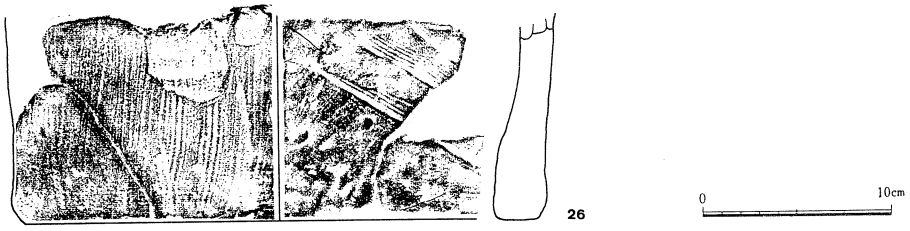
第31図　円筒埴輪(2)



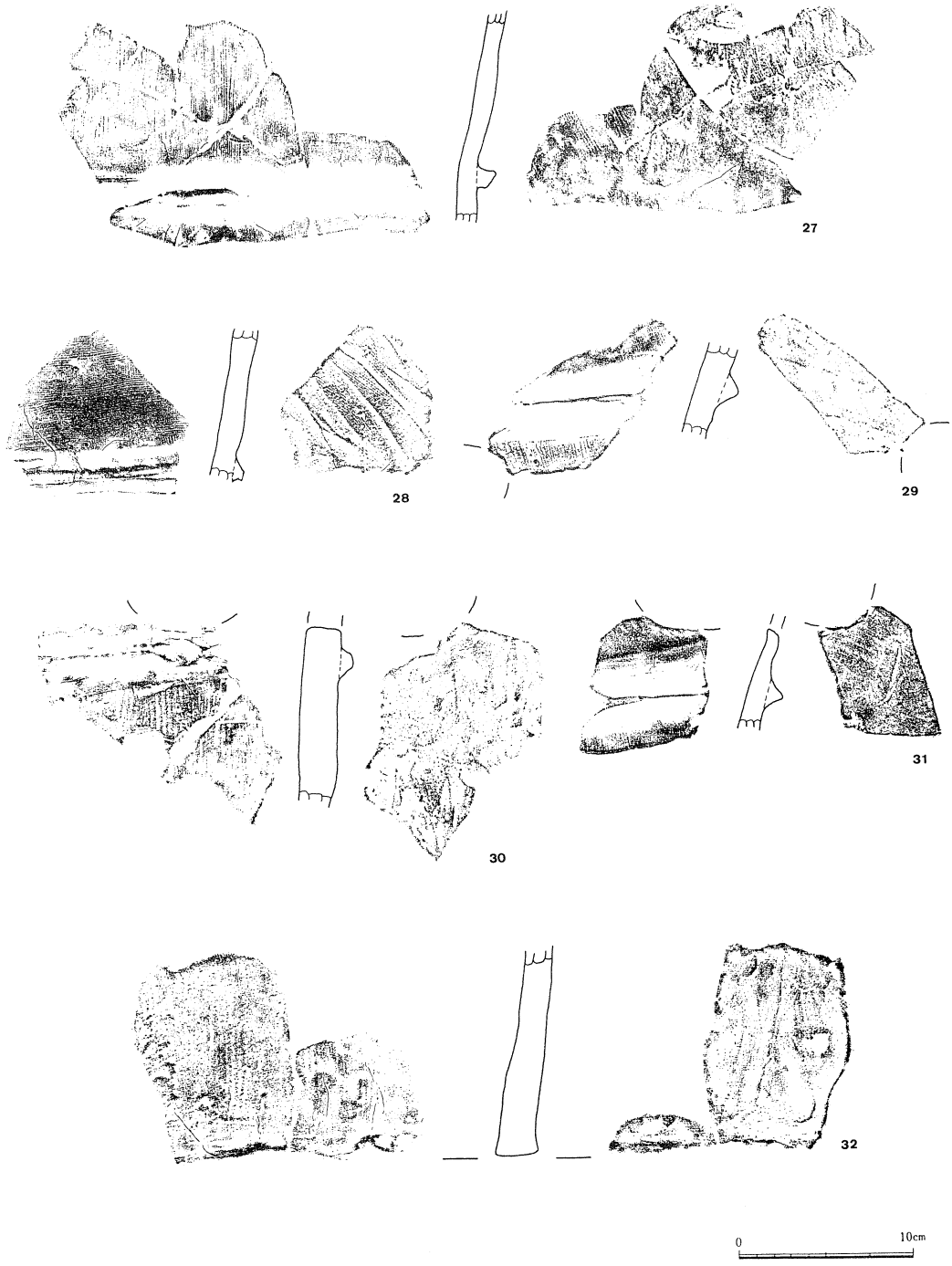
第32図　円筒埴輪(3)







第33図　円筒埴輪(4)



第34図　円筒埴輪(5)

第１表　埴輪観察表(1)

No.	出土地点	器　種	内　外　面　の　手　法	法量(cm)	タガの形状	色　調	焼成	胎土	備　　考
1	3トレンチ1号溝	円筒埴輪	外面タテハケメ調整(８本/cm) 内面口縁部は横方向のヘラナデ 胴部縦方向のヘラナデ	口径34.4	台　形 M　形	橙褐色	良	細	透かし孔だ円形 ヘラ記号「⋂」
2	〃	〃	外面タテハケメ調整(８本/cm) 内面口縁部ナナメのちヨコハケ調整(８本/cm) タガ間ヨコのちナナメハケメ調整(８本/cm)	口径32.8		〃	〃	〃	
3	〃	〃	外面タテハケメ調整(５本/cm) 内面ヘラナデ		台　形	赤褐色	〃	〃	
4	〃	〃	外面タテハケメ調整(５本/cm) 内面ナデ		〃	〃	〃	〃	
5	〃	〃	外面タテハケメ調整(５本/cm) 内面ヘラナデ		〃	〃	〃	〃	
6	〃	〃	外面タテハケメ調整(５本/cm) 内面ヘラナデ		〃	〃	〃	〃	
7	〃	〃	外面タテハケメ調整(５本/cm) 内面ヘラナデ		〃	〃	〃	〃	
8	〃	〃	外面タテハケメ調整(８本/cm) 内面ナデ		〃	橙褐色	〃	〃	
9	〃	〃	外面タテハケメ調整(９本/cm) 内面タテハケメ調整(９本/cm)		〃	〃	〃	〃	
10	〃	〃	外面タテハケメ調整(４～５本/cm) 内面ナデ		〃	赤褐色	〃	〃	透かし孔円形
11	〃	〃	外面タテハケメ調整(９本/cm) 内面タテハケメ調整(９本/cm)			〃	〃	〃	
12	〃	〃	外面タテハケメ調整(９本/cm) 内面ナナメハケメ調整(９本/cm)		三角形	〃	〃	〃	
13	〃	〃	外面タテハケメ調整(７本/cm) 内面ヘラナデ		台　形	〃	〃	〃	
14	〃	〃	外面タテハケメ調整(８本/cm) 内面ナデ。一部ヨコハケメあり。		〃	〃	〃	〃	
15	〃	〃	外面タテハケメのち横方向のヘラナデ (10本/cm) 内面タテハケメ(６本/cm)のちナデ		三角形	〃	〃	〃	
16	〃	〃	外面タテハケメ調整(７本/cm) 内面ナナメハケメ調整(10本/cm)		台　形	〃	〃	〃	

第2表　埴輪観察表(2)

No.	出土地点	器　種	内　外　面　の　手　法	法量(cm)	タガの形状	色　調	焼成	胎土	備　考
17	3トレンチ 1　号　溝	円筒埴輪	外面タテハケメ調整(10本/cm) 内面ナナメ方向のナデ			橙褐色	良	細	
18	〃	〃	外面タテハケメ調整(7本/cm) 内面ナナメ方向のヘラナデ	底径 26.0		〃	〃	〃	
19	5トレンチ 1　号　溝	〃	外面タテ方向のヘラナデ 内面ヨコ方向のヘラナデ			〃	〃	〃	
20	〃	〃	外面タテハケメ調整(5本/cm) 内面ヨコハケメ調整(4本/cm)		三角形	〃	〃	〃	
21	〃	〃	外面タテハケメ調整(5本/cm) 内面ヨコハケメ調整(4本/cm)			〃	〃	〃	
22	〃	〃	外面タテハケメ調整(9本/cm) 内面タテハケメ調整(9本/cm)			〃	〃	〃	
23	〃	〃	外面ナナメハケメ調整(6本/cm) 内面ヨコハケメ調整(6本/cm)			〃	〃	〃	
24	〃	〃	外面口縁部タテハケ調整(6本/cm)。タガ間タテハケメのちB種ヨコハケメ調整(6本/cm)。 内面口縁部は横方向のヘラナデ。胴部はタテハケメ調整(5本/cm)及び縦方向のヘラナデ。	口径 29.0		〃	〃	〃	透かし孔だ円形
25	〃	〃	外面タテハケメ調整(5本/cm) 内面口縁部はタテハケ(5本/cm)。 胴部はナデ。	口径 30.0	台　形	〃	〃	〃	ヘラ記号「 」
26	〃	〃	外面タテハケメ調整(7本/cm) 内面ナナメハケメ調整(3本/cm)	底径 28.0		〃	〃	〃	
27	〃	〃	外面タテハケメ調整(9本/cm) 内面タテハケメ調整(10本/cm)		台　形	〃	〃	〃	
28	〃	〃	外面タテハケメのち ヨコハケメ調整(10本/cm) 内面ナナメハケメ調整(9本/cm)		〃	〃	〃	〃	
29	〃	〃	外面タテハケメ調整(8本/cm) 内面ナデ		三角形	〃	〃	〃	
30	〃	〃	外面タテハケメ調整(3本/cm) 内面ヘラナデ		台　形	〃	〃	〃	
31	〃	〃	外面タテハケメ調整(6本/cm) 内面ヘラナデ		三角形	〃	〃	〃	
32	〃	〃	外面タテハケメ調整(5本/cm) 内面ヘラナデ			〃	〃	〃	

埴輪も存在していたらしい。内部施設は、天井部の蓋石を屋根上に組み合わした、山梨県では唯一の合掌式石室の形態を呈し、副葬品には、横矧板鋲留式短甲２、頸鎧１、挂甲１、小札鋲留式眉庇付冑１、鉄鉾３、鉄剣５、鑿１、直刀８、鉄鏃約500本と鉄製品が大量に出土した。これらから王塚古墳の年代時期として、５世紀後葉の築造とされている。王塚古墳の周辺に、近年の耕作によりその多くが削平されてしまったが、多数の円墳がかつて築かれており、宇山平古墳群と呼ばれている。王塚古墳は、その盟主的な古墳である。

規模については、今回の調査で王塚古墳の前方部側の周溝が確認できたことは意義深く、これまで前方部が耕作により削平を受けて、現在の長さより、元は長かったのではないかという見方もあったが、現在残る墳丘の端部より約２ｍ西で周溝の立ち上がりが確認された。前方部の長さに関して、築造当初と現存の墳丘とそれほど変わりがないことを示すものである。もっとも、前方部の北半分が耕作のために削平されているのは、現状から明らかであり、前方部幅の解明は、今後の課題である。後円部側はというと、昭和51・55年度に道路拡幅のため調査を行ったことがあり、その際に周溝の一部が確認されたことがある。これらのことから、現在の墳丘の全長は、約67ｍあるが、前方部の周溝の端部から後円部の周溝の端部までの距離は、90ｍ前後と推定される。

出土した埴輪については、すべて円筒埴輪であり、器材埴輪及び人物埴輪は含まれていなかった。すべてが墳丘からの流れ込みであろう。口縁部から底部まで完形品となるものはなく、口縁部から下に向かってタガ３条まで復元できるものが２点ある他は、すべて破片である。底部の出土が極めて少なく、いまだに墳丘に埋め込まれたままとなっているのであろうか。埴輪の器面を観察すると、多様な調整の様相が見られる。すなわち、２次調整を見ると、外面は、口縁部がタテハケメ、タガ間は、工具を器壁上で止めながらも連続的に行うＢ種ヨコハケメやタテハケメ、タテハケメのちヘラナデなどが見られ、内面は、口縁部付近をヨコハケメで施し、その下はタテハケメもしくはタテ方向のヘラナデで行っている。工具も何種類かある。タガの断面も三角形と台形がある。透かし孔は円形、もしくはだ円形を呈する。焼成段階でできる黒斑は、今回見つかった埴輪から全く確認できなかった。つまり、野焼きのような方法より須恵器窯のような窖窯で焼かれたと想定される。恐らく、王塚古墳のそう離れていない所に窯を築き、埴輪を焼いたのではないかと思われる。年代時期については、川西編年のⅣ期に相当し、５世紀後葉であろう。

また、２点の埴輪片には、ヘラ記号が描かれていた。ヘラ記号の持つ意味については、個人もしくは集団の工人がそれぞれ固有に印を持ち、他工人の製品と区別するためにつけられたといわれる。ヘラ記号は、全部の製品に描かれることはなく、何本に１本という割合で見つかるのがふつうである。埴輪の調整方法もいくつかの種類が見られることから、数グループの工人集団が製作に参加していて、彼らに製作個数が割り当てられて、王塚古墳に供給したと推定される。

王塚古墳は、昭和45年に村の史跡として文化財に指定されており、大切に保存しているが、山梨県内で数少ない埴輪を伴う古墳として研究者から注目されている古墳であり、学術的に意

義深い古墳でもある。ぜひとも、いかなる開発からも守っていかねばならない古墳であり、今回の植樹の際には、周溝部の部分は、避けてもらうことになっている。

第７章　平成８年度大福寺境内の調査

１．調査経緯

平成８年９月20日　文化庁に発掘通知を提出
平成８年９月24日　発掘調査を開始
平成８年９月24日　発掘調査終了

２．調査方法及び基本層序

東八代郡豊富村大鳥居字飯室に所在し御坂山塊の西側の麓の一角に立地する。

大福寺は、寺伝によると、奈良時代の天平年間に創建したとされ、境内の北東の一角に鎌倉時代の御家人浅利与一義成の墓塔もあり、歴史が深い。

その本堂北側の庫裡を取り壊して、法事などが行えるような会館を建設する計画があり、試掘調査を実施した。調査面積は、18㎡である。調査方法は、調査対象地に応じて２×９ｍのトレンチを１か所設定して掘り下げた。

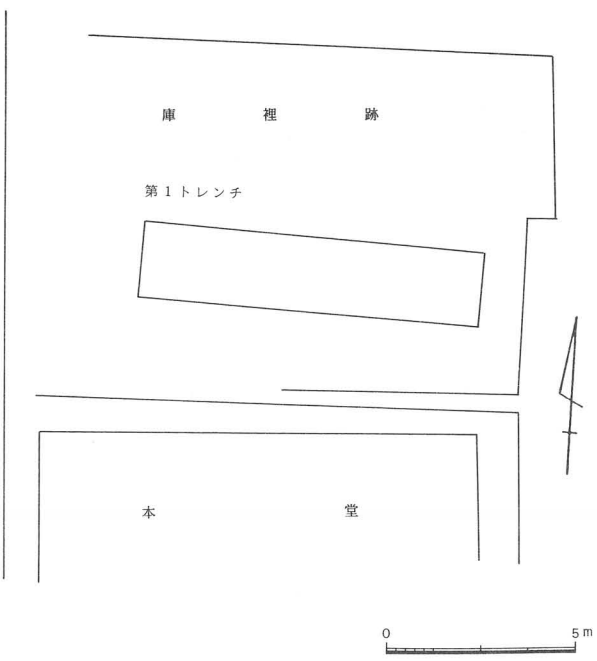
本調査の基本層序は、次のとおりである。なお、第Ｉ層の厚さは、20㎝前後である。

第Ｉ層　黄白色粘質土（盛土）　　第II層　茶褐色粘質土（地山）

３．まとめ

調査の結果、遺構・遺物は出土しなかった。

第35図　調査区位置図
(1/10,000)



第36図　調査区全体図

第８章　平成８年度横畑遺跡の調査

１．調査経緯

平成８年12月17日　発掘調査を開始
平成８年12月17日　文化庁に発掘報告を提出
平成８年12月19日　発掘調査終了
平成８年12月25日　南甲府警察署に遺失物発見届提出

２．調査方法及び基本層序

東八代郡豊富村大鳥居字横畑に所在し、御坂山塊から舌状に飛び出した曽根丘陵の台地上に広く立地する。

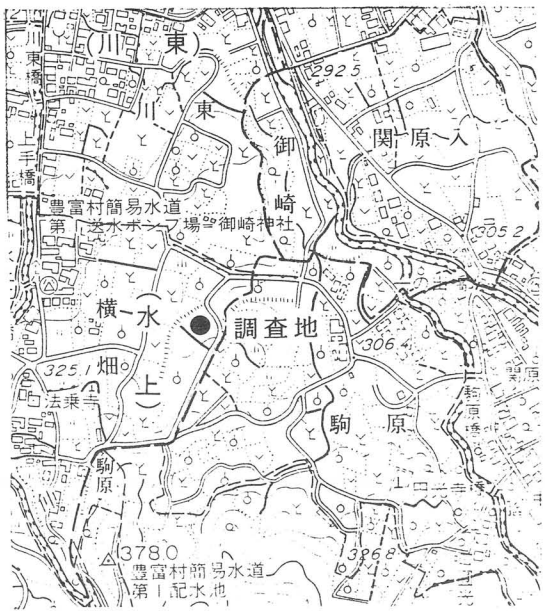
当遺跡内の一部に村道建設の計画があり、試掘調査を実施した。調査面積は、60㎡である。調査方法は、調査対象地に応じて２×10mのトレンチを３か所設定して掘り下げた。

本調査の基本層序は、次のとおりである。

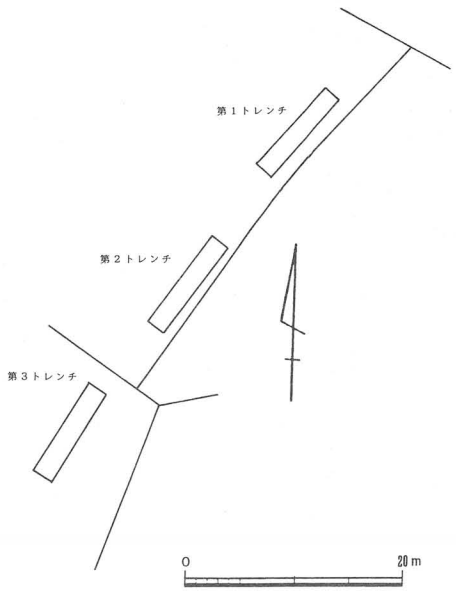
第Ⅰ層　褐色土（耕作土）　第Ⅱ層　黒褐色土　第Ⅲ層　黄褐色ローム（地山）
第Ⅳ層　暗褐色土（地山）　第Ⅴ層　黄白色土（地山）

３．まとめ

調査の結果、遺構は検出せず、第１トレンチから縄文土器の破片が２点出土しただけであった。調査地は、1985年に行われた農業水利事業に伴う調査の発掘調査地の北側で、北方向に下る斜面を畑地に整地するために大きく削平されている。この調査地より北側は、谷状に落ち込んでいく。このような状況から、遺跡分布は、調査地南側の台地上に広がるものと思われる。



第37図　調査区位置図（1/10,000）



第38図　調査区全体図

第９章　平成８年度駒平遺跡の調査

１．調査経緯

平成９年１月９日　発掘調査を開始
平成９年１月13日　文化庁に発掘報告を提出
平成９年１月22日　発掘調査終了
平成９年１月27日　南甲府署に遺失物発見届提出

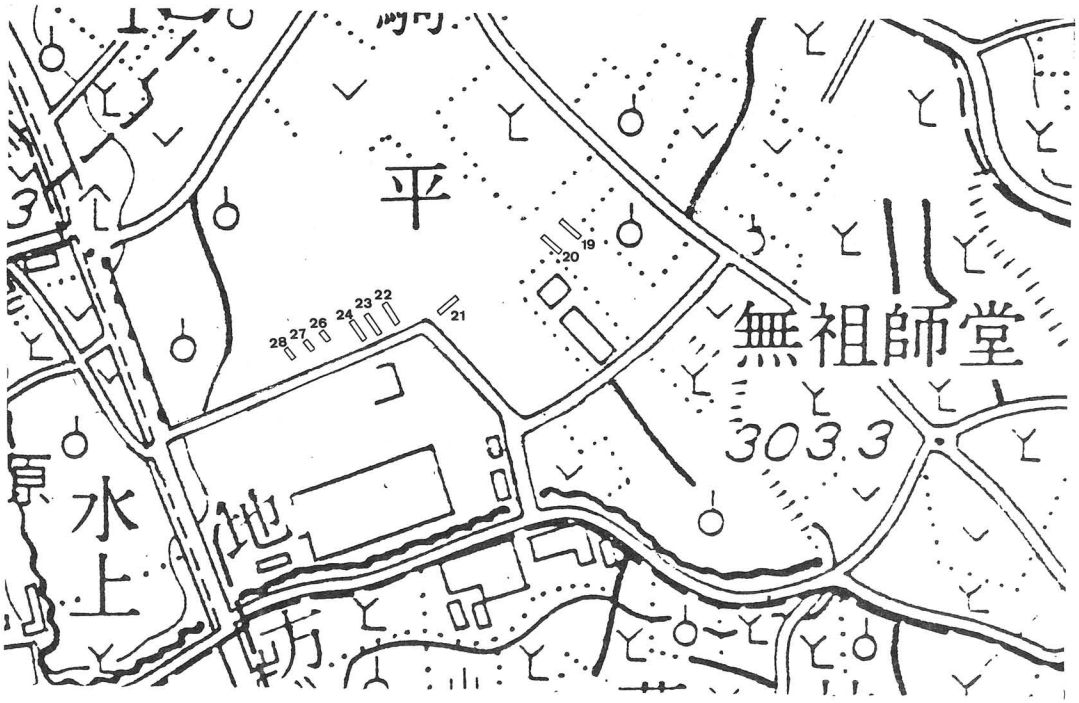
２．調査方法と基本層序

東八代郡豊富村木原字駒平に所在し、曽根丘陵西側の一角に広がる台地平坦部に立地する。

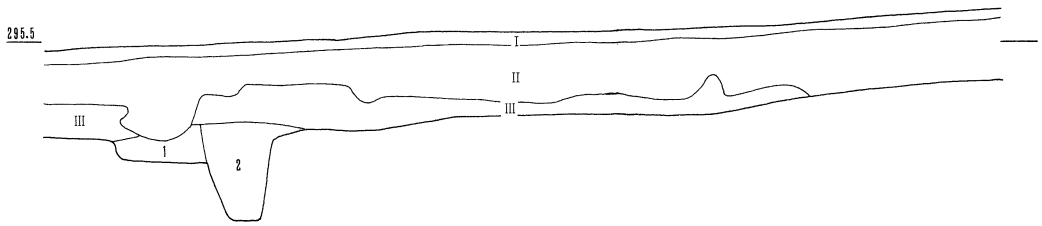
平成７年度に行われた村道建設に伴う試掘調査の継続であり、前年度より南側を中心に調査を行った。調査面積は、150㎡である。調査方法は、調査対象地に応じて幅２ｍ、長さは、５～10ｍのトレンチを９か所設定して掘り下げた。また、トレンチ番号・遺構の名称は、前年度の継続ということで、トレンチ番号が第19トレンチから、土坑番号は４号から始めることとする。

基本層序は、前年度とほぼ同じであるが、前回に第Ⅱ層とした黒褐色土が見られず、第Ⅰ層と第Ⅲ層との間に暗褐色を呈する土が見られた。したがって、今回の基本層序は、次のとおりである。

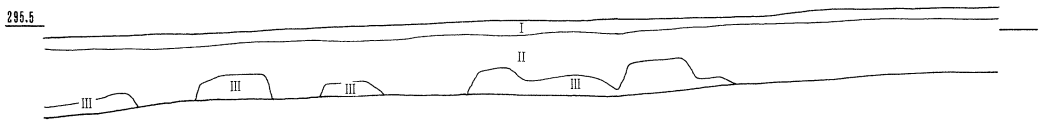
第Ⅰ層　褐色土（耕作土）　　第Ⅱ層　暗褐色土　　第Ⅲ層　明褐色土
第Ⅳ層　黄褐色ローム



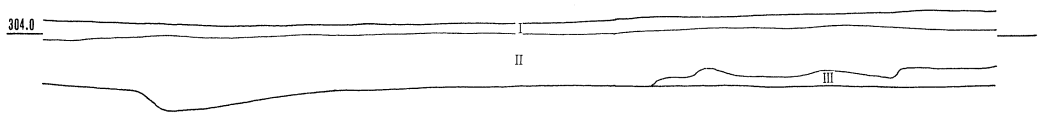
第39図　調査区全体図（1/3,000）



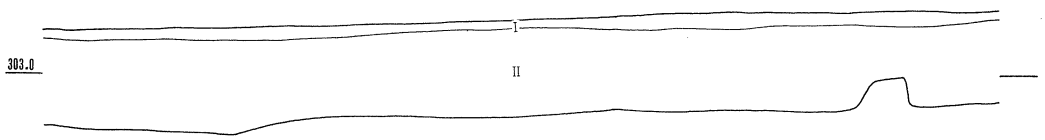
第19トレンチ北壁土層



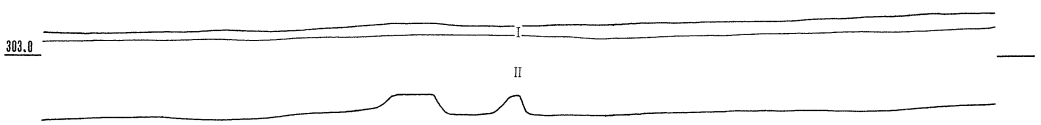
第20トレンチ北壁土層



第21トレンチ西壁土層

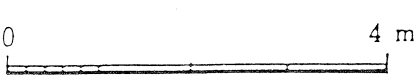


第22トレンチ北壁土層

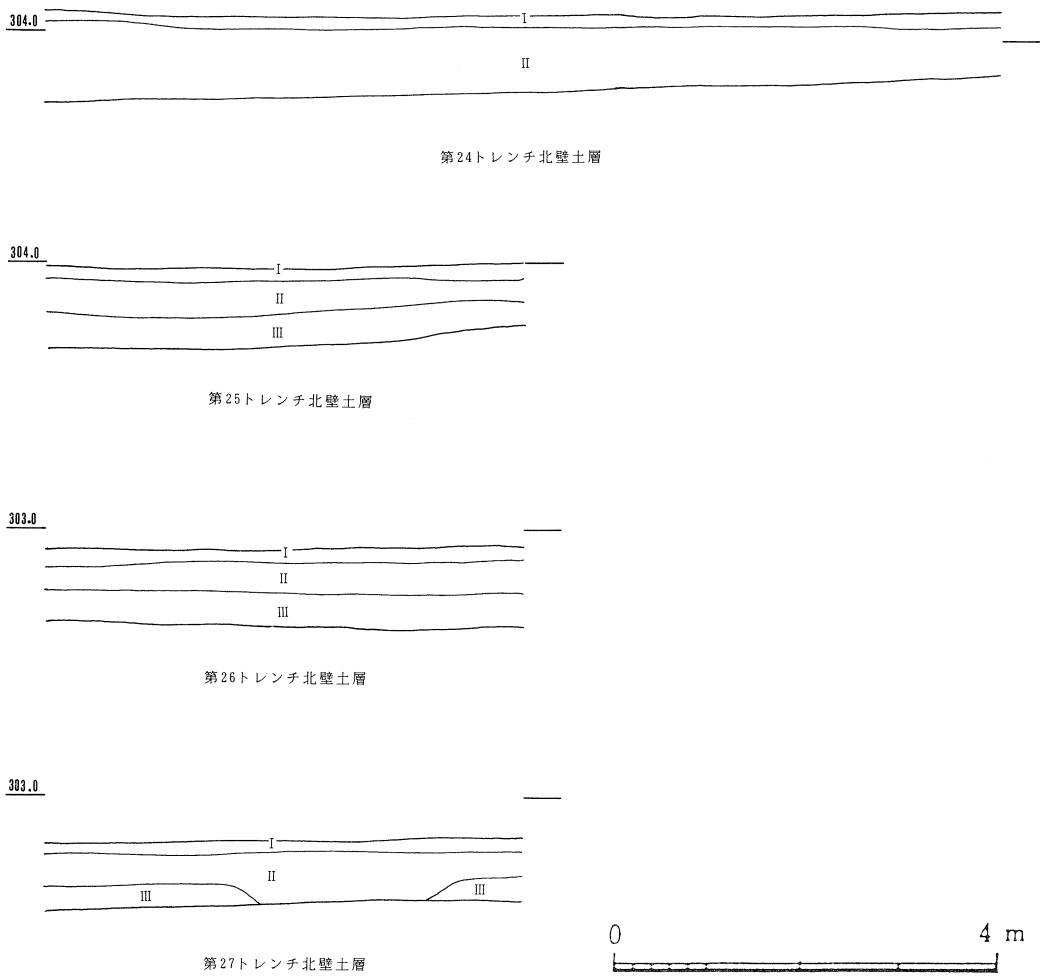


第23トレンチ北壁土層

I　褐色土　しまりなし　耕作土
II　暗褐色土　しまりなし
III　明褐色土　しまりなし
1　暗褐色土　しまりなし　焼土粒・炭化物含む　4号土坑の覆土
2　暗褐色土　しまりなし　焼土粒・炭化物含む　1層より暗い
1号小穴の覆土



第40図　土層図(1)



第41図　土層図(2)

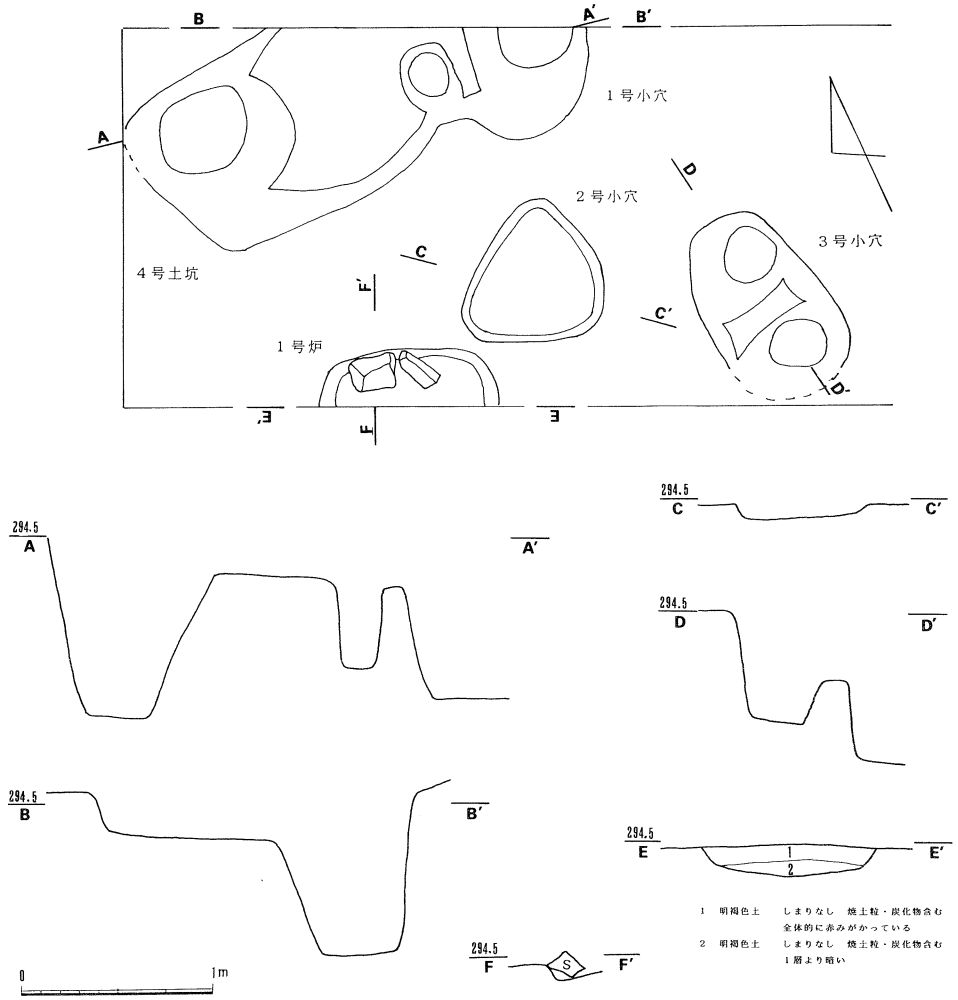
3．検出された遺構と遺物

(1) 第19トレンチの遺構と遺物（第42・44・45・48図）

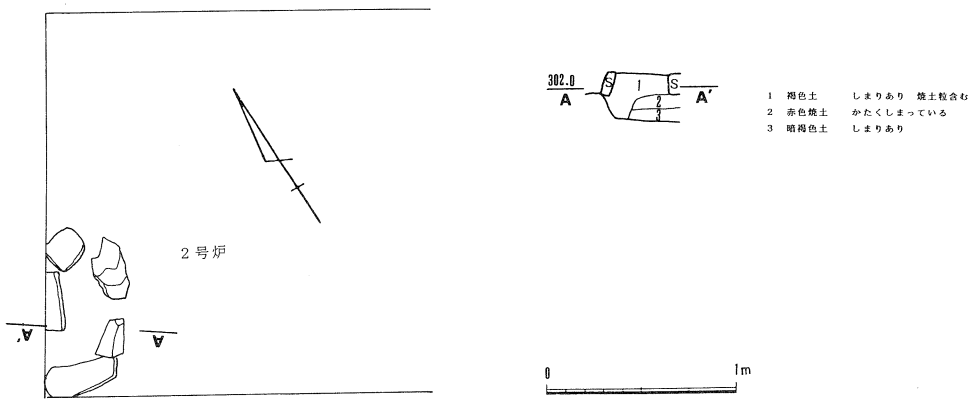
4号土坑（第42・44・48図）

第19トレンチの西端に位置し、東側は、1号小穴にに切られている。平面プランは、隅丸方形を呈し、東西166㎝以上、南北100㎝、深さ20㎝を測る。底面の東西両側にピット状の落ち込みがあり、深さは、底面から東側が45㎝、西側が77㎝まで落ちる。

出土遺物は、縄文時代中期前半の土器が約40点（1～4）と磨製石斧（40）が1点、また、東側のピットから5点、西側のピットから約30点（5・6）の同時期の土器が出土した。



第42図　第19トレンチ遺構群



第43図　2号炉

1号小穴（第42・44図）

第19トレンチの西側に位置し、西側は、1号小穴を切っている。平面プランは、円形を呈し、東西74㎝、南北60㎝以上、深さ100㎝を測る。急な立ち上がりであり、底面は平坦である。

出土遺物は、縄文時代中期前半の土器が約20点の土器が出土した。8は、連続爪形文の下部に縄文ＲＬ。

2号小穴（第42図）

第19トレンチの西側に位置する。平面プランは、やや五角形を呈し、東西75㎝、南北75㎝、深さ8㎝と浅い。底面は、平坦である。

出土遺物は、縄文時代中期前半の土器が2点の土器が出土した。

3号小穴（第42・47図）

第19トレンチの中央、やや南よりに位置する。平面プランは、だ円形を呈し、東西65㎝、南北100㎝を測る。底面の南北両側にピット状の落ち込みがあり、深さは、遺構確認面より北側が60㎝、南側が80㎝を測る。急な立ち上がりを呈し、底面は、平坦である。

出土遺物は、縄文時代中期前半の土器が約20点出土した。また、無文の土偶の胴部（35）が北側のピットの上層で、遺構確認面より5㎝程度掘り下げたところで、正面が下に向き、ほぼ水平の状態で出土した。

1号炉（第42・44図）

第19トレンチの西側に位置し、南側は、調査区外に延びる。東西92㎝、南北30㎝以上、深さ30㎝を測る。底面は、ややレンズ状を呈する。覆土は明褐色土であり、明るさ具合から更に細分される。北側には、角ばった石材が2つ残っており、本遺構は、石囲炉であったと思われる。

出土遺物は、縄文時代中期前半の土器が15点出土した。9は、角押文と三角押文。

10～16は、II層出土で、10は、隆線による渦巻文。11は、隆線による斜格子文。12は、隆線区画内に条線。13は、縄文地に隆線文。14は、条線地に蛇行隆線。15は、条線。16は、有孔土器である。16は、縄文時代中期前半、10～15は、縄文時代中期後半である。

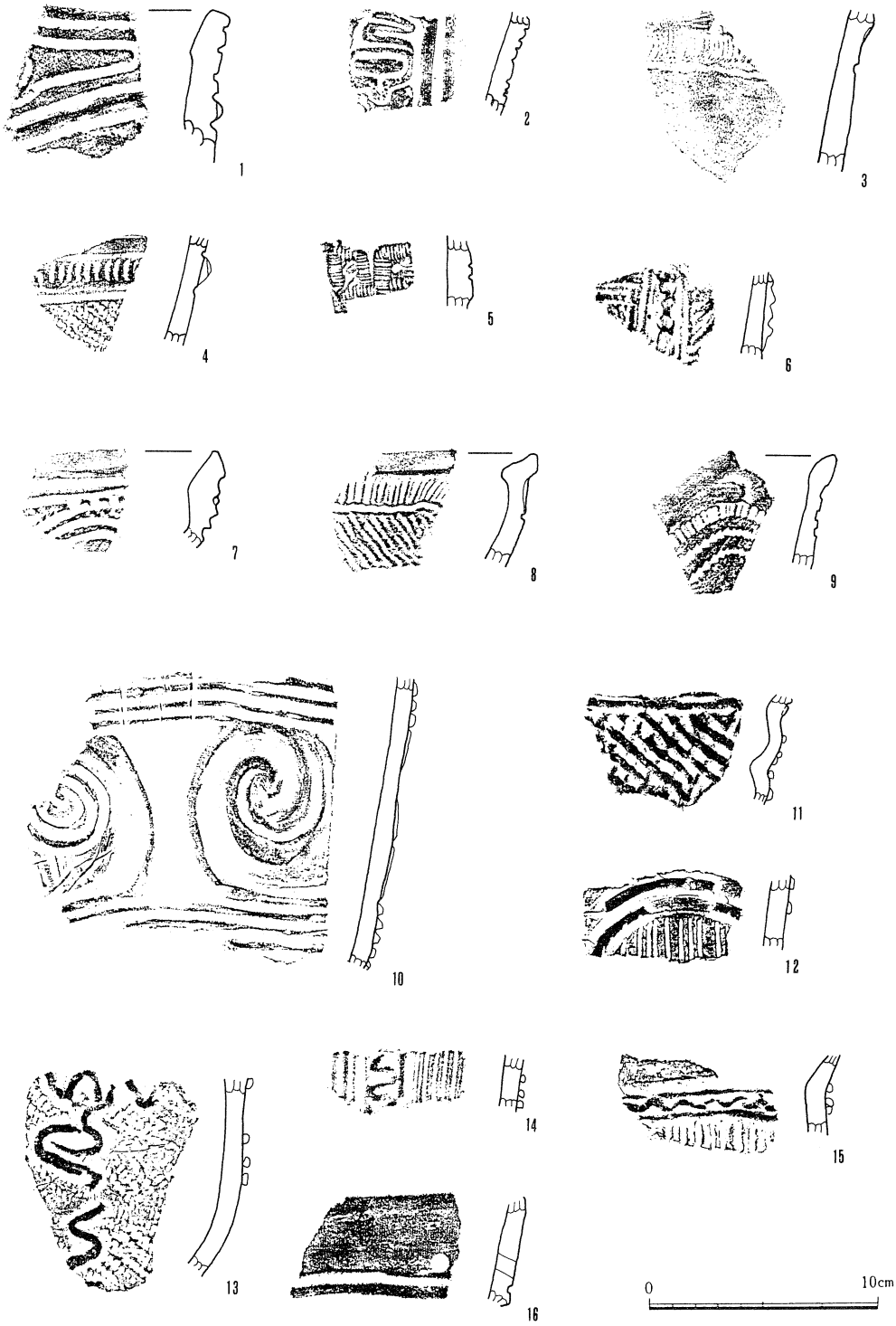
17～22は、III層出土で、17は、口唇部に縄文帯をもち、その下部に沈線文。18は、沈線文。19は、有孔土器である。20は、楕円区画内に連続爪形文と波状沈線。21は、楕円区画内に連続爪形文。22は、区画内に斜線文。

17～19は、縄文時代中期初頭、20～22は、縄文時代中期前半である。

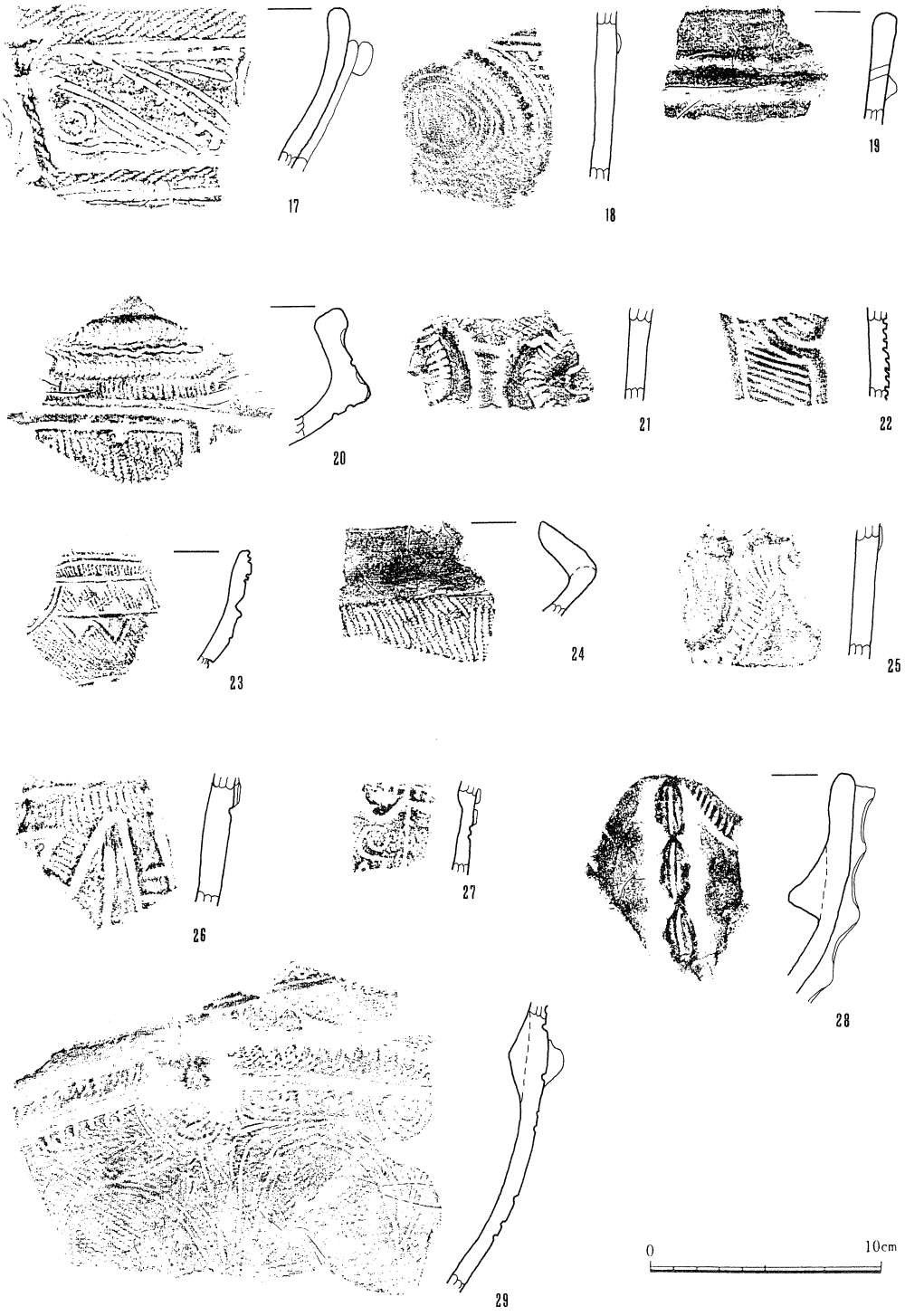
41は、磨石。III層出土で、安山岩製である。

(2) 第21トレンチの遺物（第45・47・48図）

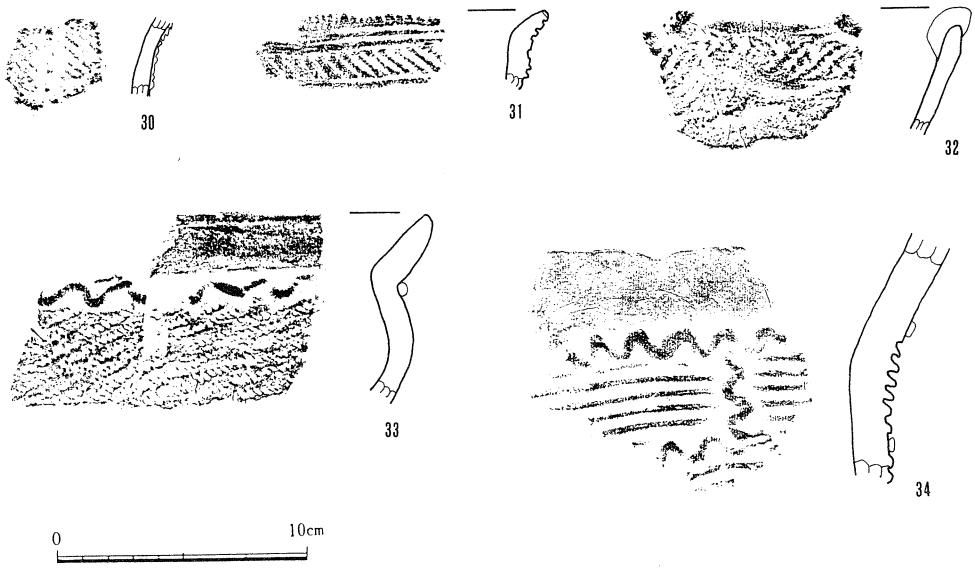
23～28は、II層出土で、23は、斜格子文に三角刻文。24は、縄文ＲＬ。25は、連続爪形文。



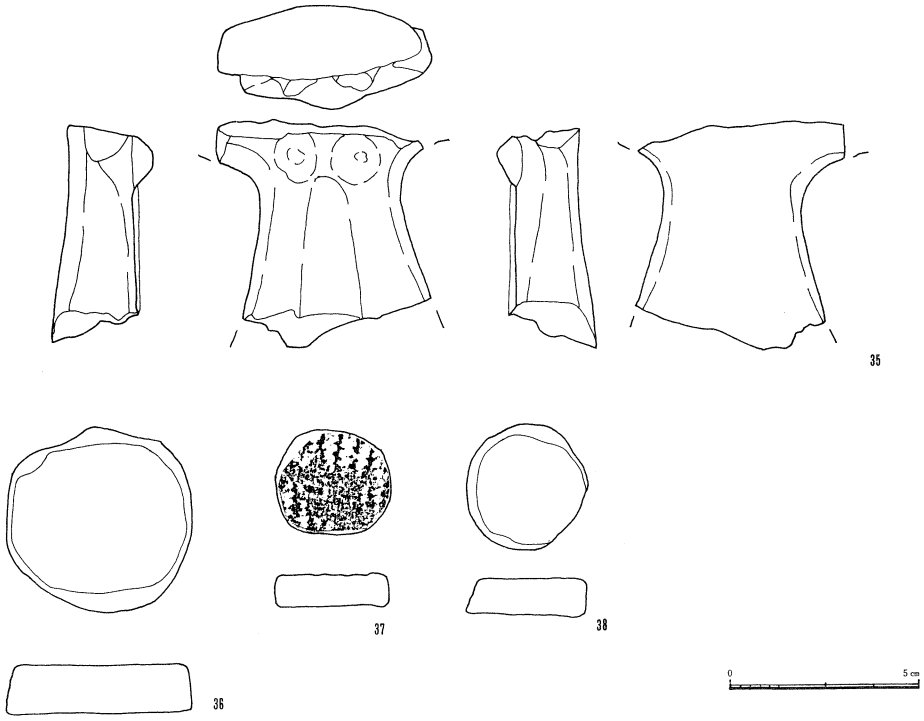
第44図　縄文土器(1)



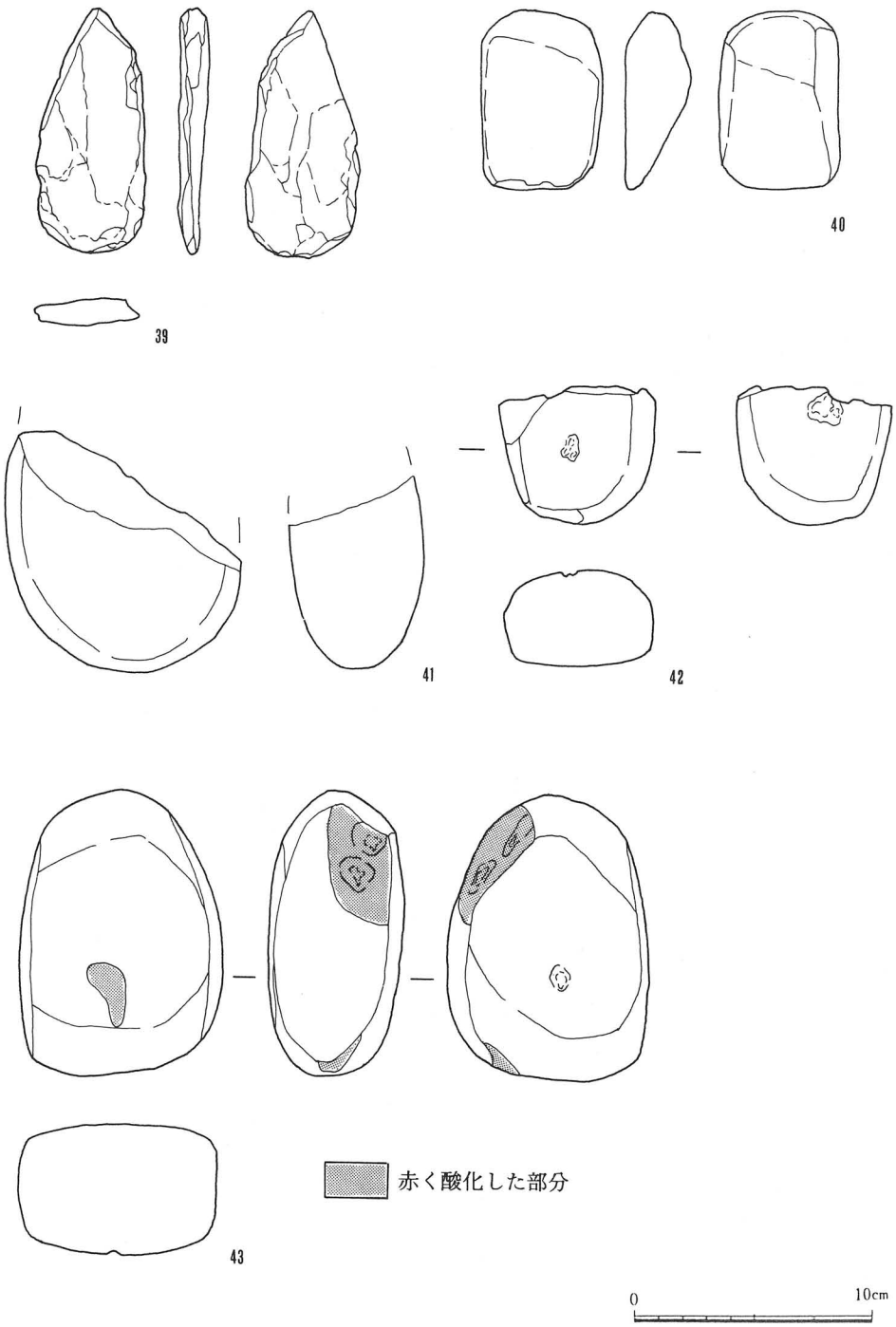
第45図　縄文土器(2)



第46図　縄文土器(3)



第47図　土製品



第48図　石　器

26は、隆線区画内に沈線文。27は、角押文。28は、隆線に押圧していき、その中に刻線を入れる。いずれも縄文時代中期前半の土器である。36は、土製円盤である。Ⅲ層出土。無文で、幅が4.9cmである。39は、打製石斧。Ⅲ層出土で、粘板岩製である。長さが10.3cm、幅4.6cm、厚さが1.0cmである。42は、凹石。Ⅲ層出土で、安山岩製である。

(3) 第23トレンチの遺物（第45図）

29は、縄文地に沈線文。Ⅲ層出土。縄文時代中期初頭の五領ヶ台式土器である。

(4) 第24トレンチの遺物（第46図）

30～31は、Ⅱ層出土で、30は、縄文ＲＬに結節状隆線で、縄文時代前期末の十三菩提式土器である。31は、刻目口縁で集合沈線文。縄文時代中期初頭の五領ヶ台式土器である。

(5) 第25トレンチの遺構と遺物（第43・46・47図）

2号炉（第43図）

第25トレンチの西南隅に位置する。東西45cm、南北90cm、深さ30cmを測る。底面は、平坦である。覆土は3層に分けられる。本遺構は、長方形プランを呈する典型的な石囲炉であり、長さ30cm前後の角石で囲い、5つ残っていた。

出土遺物は、無文の縄文土器片が1点出土した。

32～34・37は、Ⅲ層出土で、32は、刺突文で縄文時代中期初頭の五領ヶ台式土器である。33は、縄文ＬＲで、頸部に蛇行隆線をめぐらす。34は、蛇行隆線。縄文時代中期後半の土器である。37は、土製円盤である。縄文が施されており、幅は3.0cmである。

(6) 第26トレンチの遺物（第47・48図）

38は、土製円盤である。Ⅲ層出土。無文で、幅は、3.3cmである。

43は、凹石である。側面の凹み部分と正面の一部が何かの要因で赤く酸化している。長さが12.0cm、幅8.6cm、厚さが5.7cmである。安山岩製。

4．まとめ

調査の結果、土坑が1基、小穴が3基、石囲炉が2基検出された。第19トレンチの遺構群については、1軒の住居址に伴う柱穴であったり、屋内炉ではないかと考えられる。壁の立ち上がりを確認することができなかったが、耕作による削平を受けたために残らなかったのではないだろうか。特に、第19トレンチの遺構群の中の1つ、3号小穴から土偶の胴部が検出されたのが注目される。柱穴と思われる小穴からの出土であり、土偶はそのほとんどが遺構外からの出土であり本例のような出土状態は珍しく、このピットに埋めることで何らかの意味を持たせたのかも知れない。その反面、出土レベルが確認面にごく近いので流れ込みの可能性もある。

前年度の調査と合わせて考えると、今回の調査地より北側の第13トレンチあたりから今回の第19トレンチにかけて遺構・遺物が多く出土するようである。本遺跡で出土する土器は、中期後半の曽利式の土器も見られるものの、出土するそのほとんどが縄文時代中期初頭の五領ヶ台式土器から中期中葉の勝坂式土器にかけての土器がその大半を占めている。したがって、いわゆる縄文時代中期前半が本遺跡の主体的な時期と思われる。

前回と今回で試掘調査ではあるが、いくつかの大きな成果を上げることができた。1つは、前回第13・14トレンチで見つかった五領ヶ台式土器の一括資料である。遺構に伴うものかどうかは確認できなかったが、五領ヶ台式土器があれだけまとまって出土する例は珍しく、良好な資料として評価できるものであろう。また、豊富村では、初めての特殊遺物である土製円盤や土偶が出土したこと。時期は不明であるが、縄文時代中期前半代であろう。

試掘の段階でこれだけ大きな成果を上げられた遺跡であるので、本調査の際には、これ以上の成果が期待できよう。

第10章　明治遺跡の調査

1．調査経緯

平成９年２月17日　発掘調査を開始
平成９年２月24日　文化庁に発掘報告を提出
平成９年２月27日　発掘調査終了

2．調査方法と基本層序

東八代郡豊富村高部字明治に所在し、甲府盆地の南端に西流する笛吹川の左岸の沖積地に立地する。

この周辺では、近年、個人住宅や工場の建設などが盛んに行われているが、さらに水路建設が計画されており、地理的に推定して条里制以降、耕作地に利用された可能性があり、かつては、木樋なども耕作中発見されたこともあったりしたので、試掘調査を実施した。調査面積は、８㎡である。調査方法は、調査対象地に応じて２×２ｍの試掘坑を２か所設定して掘り下げた。

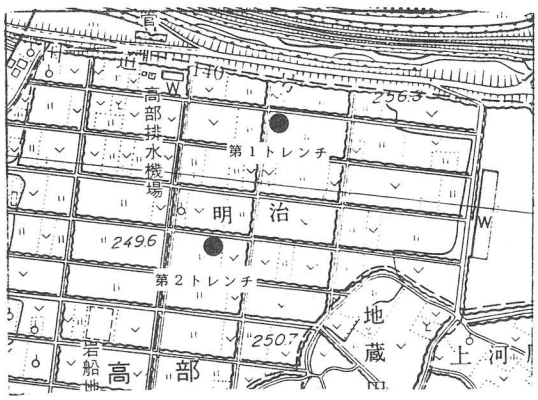
本調査の基本層序は、次のとおりである。

第Ⅰ層　灰褐色粘質土（現在の耕作土）　第Ⅱ層　暗灰色粘質土（旧耕作土）
第Ⅲ層　灰色粘質土　第Ⅳ層　青灰色粘質土　第Ⅴ層　暗灰色砂質土（ややシルト質）
第Ⅵ層　暗灰色粘質土（植物遺体含む）

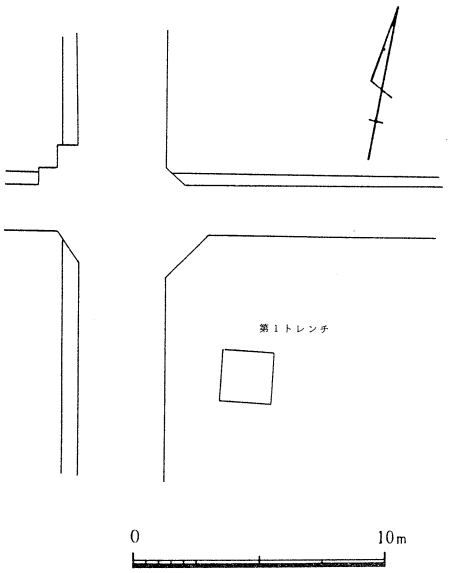
3．まとめ

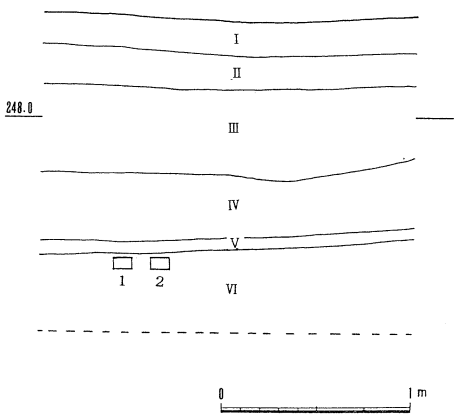
調査の結果、人為的な遺構・遺物は出土しなかった。２ｍたらずしか掘り下げることができなかったが、堆積状況を見ると、同じ富士川から分かれる釜無川周辺では、度重なる洪水により堆積した礫混じりの砂質土が中心であるが、調査地点においては、礫はほとんどなく、粘質土を主体とし、洪水層といえるのが第Ⅴ層であるが、厚い堆積状況は見られなかった。これまで笛吹川沿岸では、度重なる水害の被害を受けており、字名の明治もこれらの水害の復旧に耕地整理したその記念につけられたものである。このような歴史が明らかであるにもかかわらず、洪水層と考えられる土の堆積が少なかったのは意外であった。

第Ⅳ層の土壌やそれに含まれる植物遺体を採取して年代測定とプラント・オパール分析を行った。その結果は、附編に詳しいが、江戸時代の初め頃、遺跡周辺で稲作やそばの栽培が行われている可能性があるということである。



第49図　調査位置図（1/10,000）



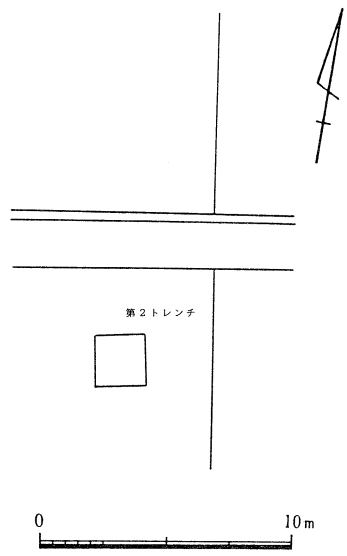


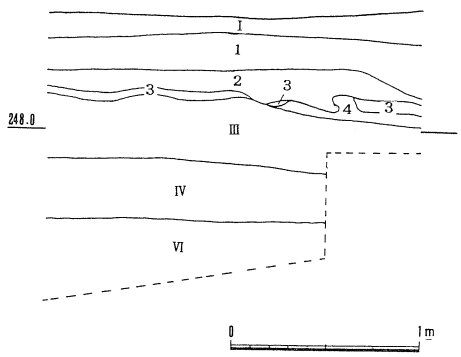
第１トレンチ北壁土層

I	灰褐色粘質土	しまりなし　粘性ややあり　現在の耕作土
II	暗灰色粘質土	しまりややあり　粘性あまりない　旧耕作土 鉄分が全体的に含まれる
III	灰色粘質土	しまりあり　粘性ややあり
IV	青灰色粘質土	しまりあまりない　粘性あり　シルトに近い 上半分に鉄分がたてに棒状に残る
V	暗灰色砂質土	しまりあまりない　粒子細かくややシルト質 青灰色粘質土含む
VI	暗灰色粘質土	しまりなし　粘性強い　植物遺体含む

土壌サンプル
1　放射性炭素年代測定
2　プラント・オパール分析

第50図　第１トレンチ





第２トレンチ北壁土層

I	灰褐色粘質土	しまりなし　粘性ややあり　現在の耕作土
1	黒灰色粘質土	しまりあり　粘性ややあり　鉄分部分的に含む
2	灰色粘質土	しまりあり　粘性ややあり　鉄分部分的に含む
3	青灰色砂	しまりなし　粒子細かい　全体的に醸化している
4	青灰色粘土	しまりなし　粘性強い
III	灰色粘質土	しまりあり　粘性ややあり
IV	青灰色粘質土	しまりあまりない　粘性あり　シルトに近い 上半分に鉄分がたてに棒状に残る
VI	暗灰色粘質土	しまりなし　粘性強い　植物遺体含む

第51図　第２トレンチ

附 編　明治遺跡の自然科学分析

㈱パレオ・ラボ　鈴木　茂

Ⅰ　明治遺跡の放射性炭素年代測定結果

1．測定結果

放射性炭素年代測定は、明治遺跡において行われた試掘調査No.1地点の粘土層（Ⅵ層）の年代を確認する目的で行われた。分析用試料は粘土層より検出された植物遺体1点である。測定等は地球科学研究所に依頼し、ＡＭＳ法（加速器質量分析計による質量分析法）により測定を行った。測定結果を表1に示す。なお、表中の測定値は以下の通りである。

^{14}Ｃ年代測定値：試料の^{14}Ｃ／^{12}Ｃ比から、単純に西暦1950年から何年前（yrs BP）かを計算した値である。半減期としてはLibbyの5568年を用いた。

補正^{14}Ｃ年代値：試料の炭素安定同位体比(^{13}Ｃ／^{12}Ｃ)を測定して試料の同位体分別を知り、^{14}Ｃ／^{12}Ｃの測定値に補正値を加えた上で、算出した年代。

δ^{13}Ｃ測定値：試料の測定^{14}Ｃ／^{12}Ｃ比を補正するための^{13}Ｃ／^{12}Ｃ比である。この安定同位体比は、下式のように標準物質の同位体比からの千分偏差（0／00）で表現する。

$$\delta^{13}C\ (O/OO) \quad \frac{(^{13}C/^{12}C)[試料]-(^{13}C/^{12}C)[標準]}{(^{13}C/^{12}C)[標準]} \times 1000$$

$(^{13}C/^{12}C\ [標準]=0.0112372)$

暦年代：過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}Ｃ濃度の変動に対する補正とにより，暦年代を算出する。

それには年代既知の樹木年輪の^{14}Ｃの公表されている詳細な測定値を使用した。この補正は10000年より古い試料には適用できない。

表1　放射性炭素年代測定結果

No.	試 料	^{14}Ｃ年代 yrs BP	δ^{13}Ｃ (O／OO)	補正^{14}Ｃ年代 yrs BP	暦 年 代		測定番号
1	植物遺体	260±50	−27.6	220±50	交点	AD 1665	
					2SIGMA	AD 1535 TO 1545	geo −5235
						AD 1635 TO 1700	
						AD 1720 TO 1820	beta−104024
						AD 1855 TO 1860	
						AD 1920 TO 1950	
					1SIGMA	AD 1650 TO 1680	
						AD 1755 TO 1805	
						AD 1940 TO 1950	

II　明治遺跡のプラント・オパール

イネ科植物は別名珪酸植物と呼ばれ、根より珪酸分を大量に吸収することが知られている。プラント・オパールとは、この吸収された珪酸分が葉や茎の細胞内に沈積し形成された植物珪酸体（機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体など）が、植物が枯れるなどして土壌中に混入して土粒子となったものを言い、機動細胞珪酸体については藤原（1976）や藤原・佐々木（1978）など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。また、土壌中より検出されるイネのプラント・オパール個数から稲作の有無および稲作地の広がりについての検討も行われている（藤原　1984）。このような研究成果から、近年プラント・オパール分析を用いて稲作の検討が各地・各遺跡で行われている。こうしたことから、ここ明治遺跡においても水田層とみられる層準より採取された試料についてプラント・オパール分析を行い、稲作の検討を行った。

1．試料と分析方法

分析用試料は、試掘№1地点（標高約250m）のⅥ層より採取された植物遺体を含む粘土1点である。なお、同等試料を用いて年代測定が実施され、260±50yrs BPが得られている（年代測定の章参照）。プラント・オパール分析はこの1試料について以下のような手順にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1ｇ（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02ｇのガラスビーズ（直径約40μm）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10μm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数はガラスビーズが300個に達するまで行った。

2．分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料1ｇ当りの各プラント・オパール個数を求め（表2）、それらの分布を図1に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料1ｇ当りの検出個数である。

検鏡の結果、全体に検出数は少なく、そのなかでイネのプラント・オパールは4,100個検出された。その他、ネザサ節型・クマザサ属型・シバ属・ウシクサ族が若干得られている。

表2　試料1g当たりのプラント・オパール個数

試料番号	イネ（個／g）	ネザサ節型（個／g）	クマザサ属型（個／g）	シバ属（個／g）	ウシクサ族（個／g）
	4,100	2,700	4,100	1,400	1,400

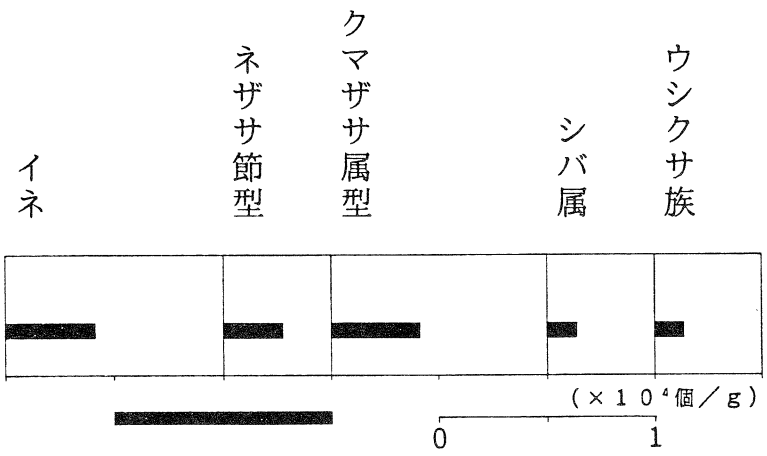


図1　明治遺跡のプラント・オパール分布図

3．稲作について

上記したように、イネのプラント・オパールが4,100個検出された。検出個数の目安として水田址の検証例を示すと、福岡市の板付北遺跡では、イネのプラント・オパールが試料1g当り5,000個以上という高密度で検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている（藤原　1984）。こうしたことから、稲作の検証としてこの5,000個を目安に、プラント・オパールの産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。今回の分析では5,000個に若干足りず、検出個数だけからみると稲作が行われていた可能性は低いと判断される。

こうしたことから、別の方面、すなわち花粉化石からも稲作について検討する目的で同試料

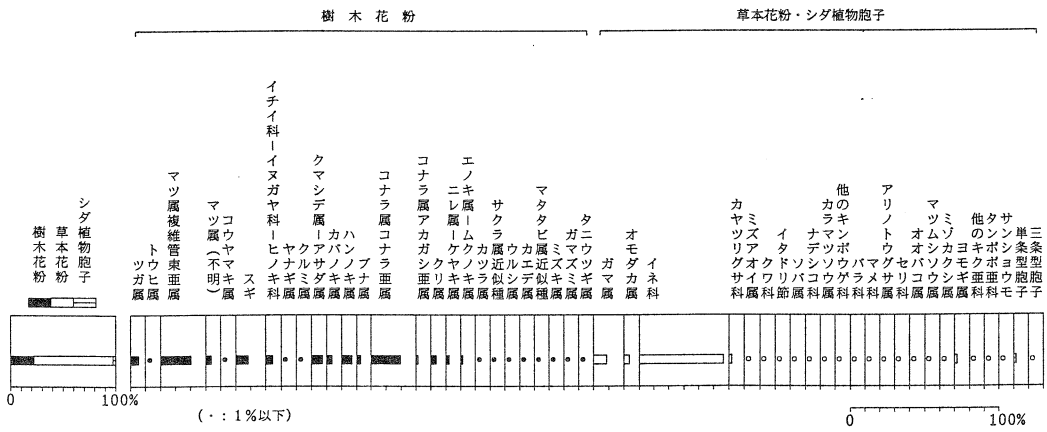


図2　明治遺跡の花粉化石分布図
（樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した）

表３　明治遺跡の産出花粉化石一覧表

和名	学名	
樹木		
ツガ属	*Tsuga*	12
トウヒ属	*Picea*	1
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	43
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	8
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	1
スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don	18
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.- C.	10
ヤナギ属	*Salix*	2
クルミ属	*Juglans*	2
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	16
カバノキ属	*Betula*	8
ハンノキ属	*Alnus*	15
ブナ属	*Fagus*	6
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	42
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	3
クリ属	*Castanea*	8
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	5
エノキ属－ムクノキ属	*Celtis-Aphananthe*	3
カツラ属	*Cercidiphyllum*	1
サクラ属近似種	cf. *Prunus*	1
ウルシ属	*Rhus*	2
カエデ属	*Acer*	1
マタタビ属近似種	cf. *Actinidia*	1
ミズキ属	*Cornus*	1
ガマズミ属	*Viburnum*	1
タニウツギ属	*Weigela*	1
草本		
ガマ属	*Typha*	81
オモダカ属	*Sagittaria*	33
イネ科	Gramineae	542
カヤツリグサ科	Cyperaceae	18
ミズアオイ属	*Monochoria*	7
クワ科	Moraceae	1
イタドリ節	*Polygonum* sect. Reynoutria	3
ソバ属	*Fagopyrum*	1
ナデシコ科	Caryophyllaceae	1
カラマツソウ属	*Thalictrum*	2
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	2
バラ科	Rosaceae	4
マメ科	Leguminosae	4
アリノトウグサ属	*Haloragis*	1
セリ科	Umbelliferae	1
オオバコ属	*Plantago*	1
マツムシソウ属	*Scabiosa*	1
ミゾカクシ属	*Lobelia*	1
ヨモギ属	*Artemisia*	17
他のキク亜科	other Tubuliflorae	1
タンポポ亜科	Liguliflorae	5
シダ植物		
ヒカゲノカズラ属	*Lycopodium*	2
サンショウモ	*Salvinia natans*	1
単条型胞子	Monolete spore	16
三条型胞子	Trilete spore	5
緑藻類		
クンショウモ属	*Pediastrum*	1
樹木花粉	Arboreal pollen	212
草本花粉	Nonarboreal pollen	727
シダ植物胞子	Spores	24
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	963
不明花粉	Unknown pollen	23

Ｔ．－Ｃ．はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

を用いて花粉分析を行い、その結果を表３・図２に示した。検鏡の結果、イネ科花粉が多量に検出され、オモダカやコナギといった水田雑草を含む分類群のオモダカ属やミズアオイ属も多く検出されている。よって、イネのプラント・オパール個数は若干少なかったものの、花粉分析結果を合わせ考えると、試料採取地点付近において水田稲作が行われていた可能性は高いと思われる。また、ソバ属が検出されており、付近においてソバの栽培も行われていたと推測される。

４．遺跡周辺の古植生

花粉分析結果（表３，図２）から、多く検出されているコナラ属コナラ亜属を主体に、クマシデ属－アサダ属・クリ属・ニレ属－ケヤキ属などの落葉広葉樹林が遺跡周辺丘陵部に広く分布していた。また、マツ属複維管束亜属（アカマツやクロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）も多く得られており、このニヨウマツ類の二次林も多くみられたと推測される。その他、スギやツガ属・イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科などの針葉樹類や、常緑広葉樹のコナラ属アカガシ亜属も一部に生育していたであろう。

低地部は上記したように水田稲作が行われていたと考えられ、この低地部には湿地林の主要素であるハンノキ属が侵入していた。このハンノキは稲架（はさ）として畦などに植栽されていた樹木であり、今回の分析結果もこうした様相を示している可能性もあろう。草本類について、水田内にはオモダカ属やミズアオイ属などの水田雑草類が多く生育していた。また、水田脇の湿地的なところにはガマ属が生育し、水田域周辺や畦などの比較的乾いたところにはネザサ節型のササ類（ゴキダケ、アズマネザサなど）やウシクサ族（ススキ、チガヤなど）、シバ属、ヨモギ属、タンポポ亜科などがみられた。なお、時代は年代測定結果から江戸時代前半頃と推測される。

５．放射性炭素年代測定結果と花粉分析結果

加速器による年代測定結果は260±50年前（年代測定の章参照）で、上記古植生は江戸時代の前半頃と推測される。ここで、山梨県甲府市の大坪遺跡の花粉分析結果をみると、出土遺物から平安時代と推測される頃においてコナラ亜属やスギ属・イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科が分布を広げており、ニヨウマツ類はあまり検出されていない（鈴木　1996）。辻(1984）によると、ニヨウマツ類が急増する年代について関東地方では宝永テフラ降下（1707年）以降にみられ、その後、同様の分析結果が関東各地から報告されている。また、西日本ではそれよりもやや早くニヨウマツ類の増加がみられる。こうしたことから、今回の分析結果もニヨウマツ類が増加を始めた頃の可能性があり、放射性炭素年代測定結果と矛盾しない結果、すなわち、ニヨウマツ類が急増する少し前の時期（江戸時代初期前後頃）が示されていると思われる。

引用・参考文献一覧

仁科義男　1931　「大丸山古墳・大塚古墳」『史跡名勝天然紀念物調査報告』5　山梨県

仁科義男　1934　「東八代郡右左口村豊富村西八代郡大塚村古墳群の調査」『史跡名勝天然記念物調査報告』8　山梨県

豊富村　1974　『建村百年史』

藤原宏志　1976　「プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法—」『考古学と自然科学』9

山梨県教育委員会　1977　『笛吹川沿岸土地改良事業地域内埋蔵文化財分布調査報告書』

藤原宏志・佐々木彰　1978　「プラント・オパール分析法の基礎的研究（2）—イネ（Oryza）属植物における機動細胞珪酸体の形状—」『考古学と自然科学』11

小林秀夫　1978　「合掌形石室の諸問題」『中部高地の考古学』

川西宏幸　1978　「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2

橋本博文　1980　「甲斐の円筒埴輪」『丘陵』8

坂本美夫　1981　「山梨県における五世紀後半代の埴輪」『甲斐考古』18-2

藤原宏志　1984　「プラント・オパール分析法とその応用－先史時代の水田址探査－」『考古学ジャーナル』227

辻　誠一郎　1984　「関東地方におけるマツ林繁栄の時代とその背景」『日本生態学会大会講演要旨集』31

今村啓爾　1985　「五領ヶ台式土器の編年—その細分及び東北地方との関係を中心に—」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』4

保坂康夫　1987　『横畑遺跡・弥二郎遺跡』　山梨県教育委員会

今福利恵　1990　『勝坂式土器様式の個性と多様性』『考古学雑誌』76-2

岡野秀典　1993　『高部宇山平遺跡』　豊富村教育委員会

岡野秀典　1995　『高部宇山平遺跡II・浅利氏館跡・三枝氏館跡』　豊富村教育委員会

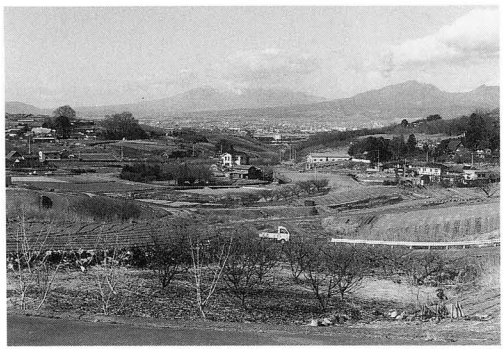
高橋克壽　1996　『埴輪の世紀』歴史発掘9　講談社

鈴木　茂　1996　「甲府市大坪遺跡の花粉化石」『大坪遺跡発掘調査報告書III』　甲府市遺跡調査会他

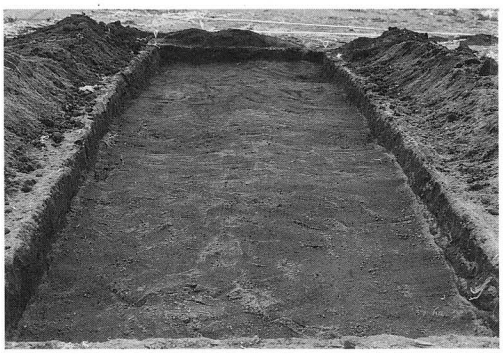
図版 1

高部宇山遺跡調査前風景

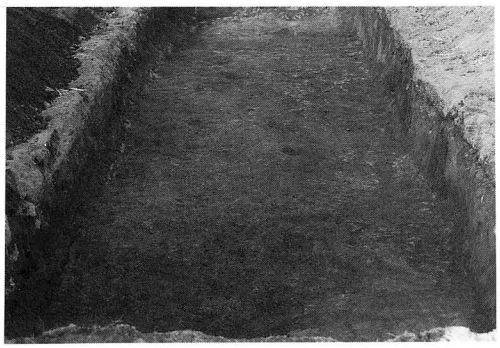
高部宇山平遺跡第 2 トレンチ



三枝氏館跡遠景



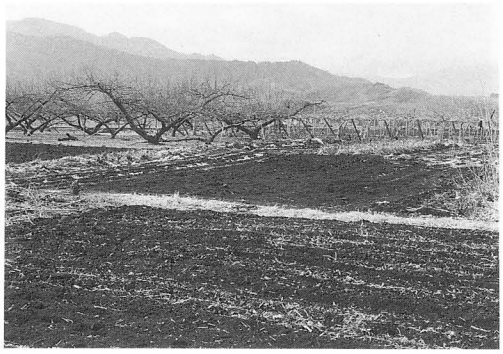
三枝氏館跡第 3 トレンチ



三枝氏館跡第 9 トレンチ

三枝氏館跡第14トレンチ

図版 2



駒平遺跡第11～18トレンチ調査前風景

駒平遺跡作業風景

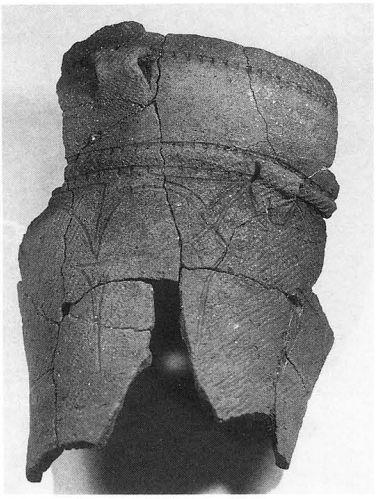
駒平遺跡第 4 トレンチ

駒平遺跡第18トレンチ

駒平遺跡第14トレンチ土器出土状況(1)

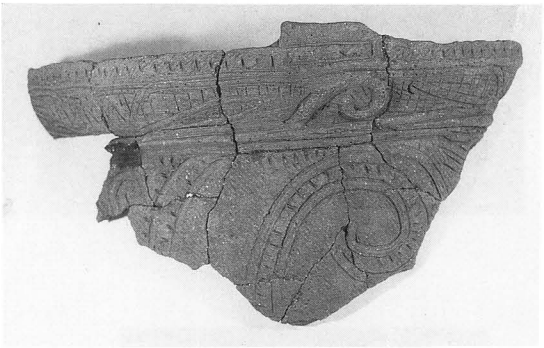
駒平遺跡第14トレンチ土器出土状況(2)

駒平遺跡縄文土器(1)

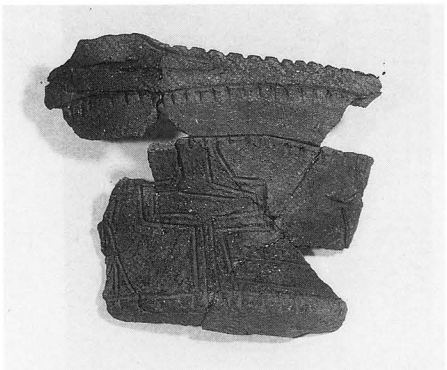


駒平遺跡縄文土器(2)

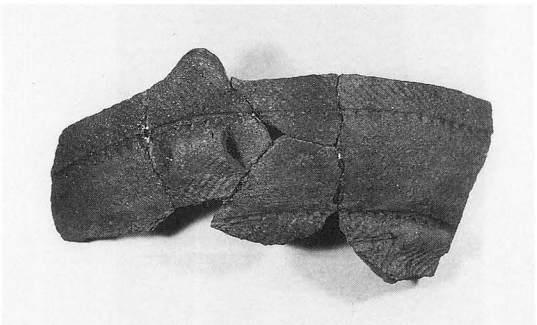
駒平遺跡縄文土器(3)



駒平遺跡縄文土器(4)



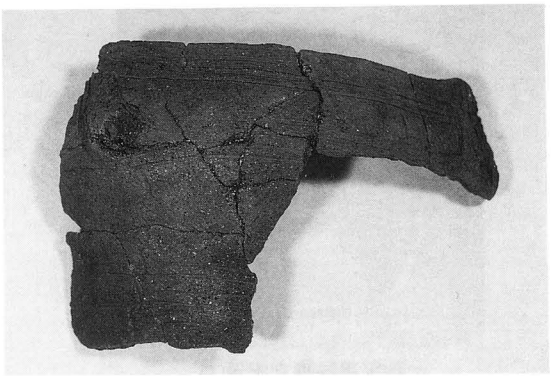
駒平遺跡縄文土器(5)



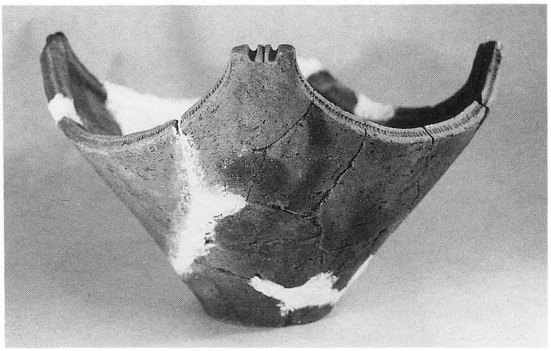
駒平遺跡縄文土器(6)

図版 4

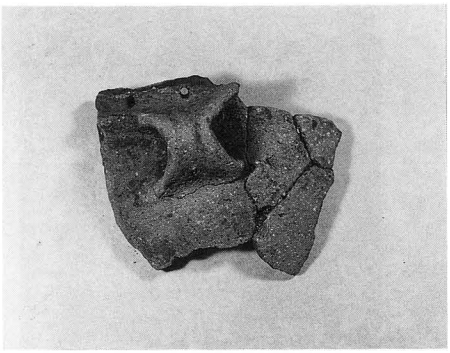
駒平遺跡縄文土器(7)



駒平遺跡縄文土器(8)

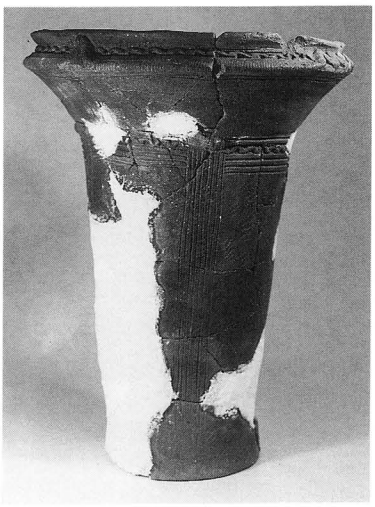


駒平遺跡縄文土器(9)



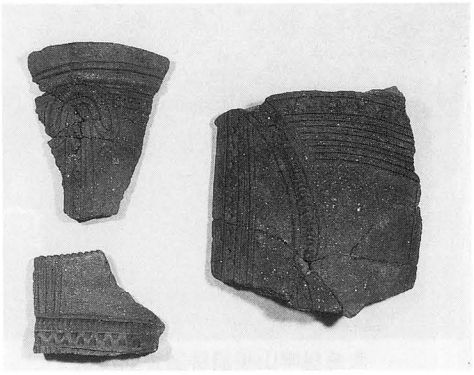
駒平遺跡縄文土器(10)

駒平遺跡縄文土器(11)

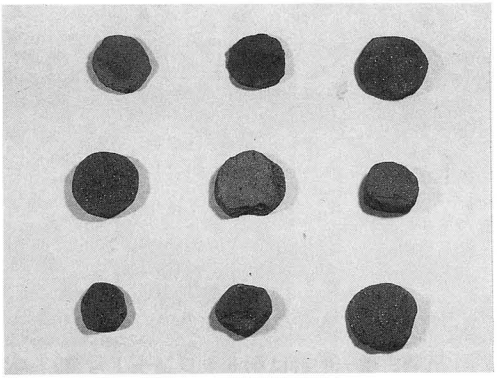


駒平遺跡縄文土器(12)

駒平遺跡縄文土器(13)



駒平遺跡縄文土器(14)

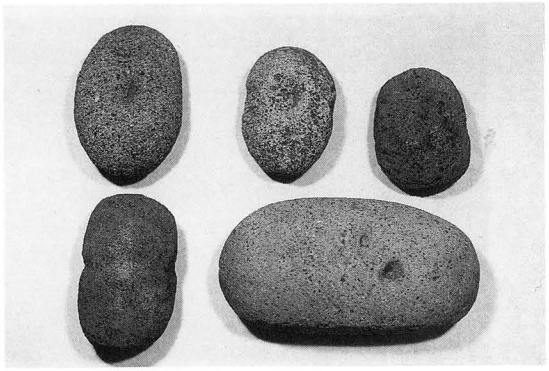


駒平遺跡土製円盤

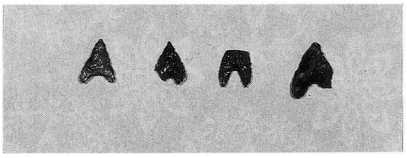
（正面）

（側面）

駒平遺跡土偶(1)



駒平遺跡凹石(1)

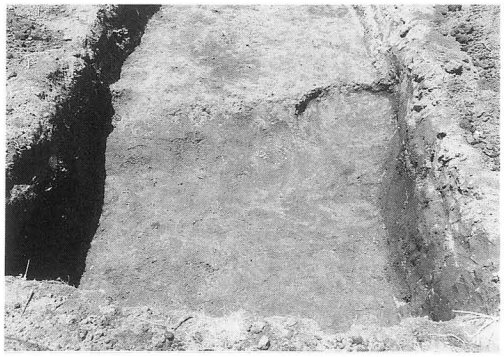


駒平遺跡石鏃

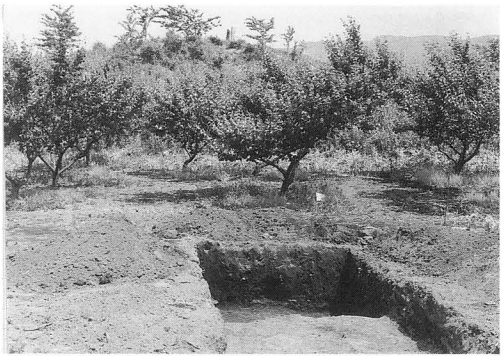
図版 6

大鳥居宇山平遺跡調査前風景
（中央の小山は王塚古墳）

大鳥居宇山平遺跡作業風景

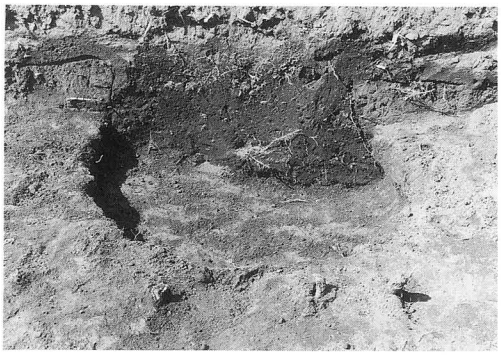


大鳥居宇山平遺跡
第 3 トレンチ 1 号溝

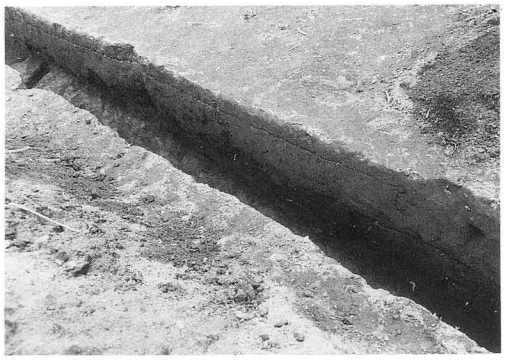


王塚古墳（手前は第 3 トレンチ 1 号溝）

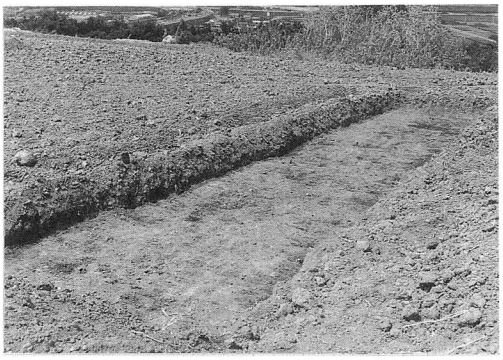
大鳥居宇山平遺跡
第 3 トレンチ 1 号溝埴輪出土状況



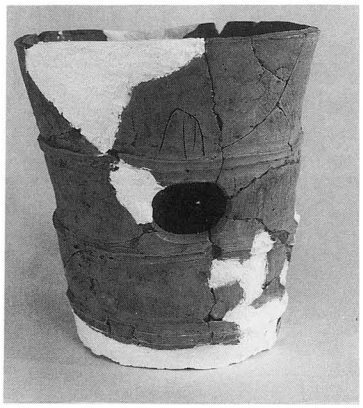
大鳥居宇山平遺跡
第 2 トレンチ 1 号土坑



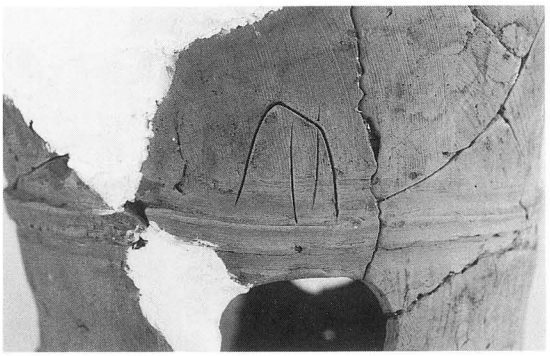
大鳥居宇山平遺跡第 5 トレンチ



大鳥居宇山遺跡第10トレンチ

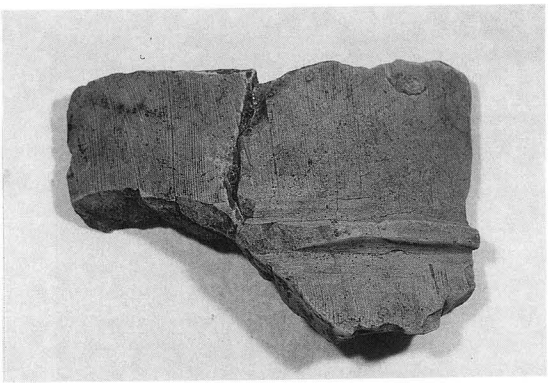


王塚古墳埴輪(1)



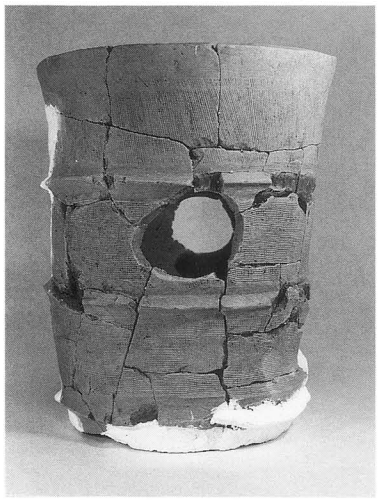
ヘラ記号(1)

王塚古墳埴輪(2)

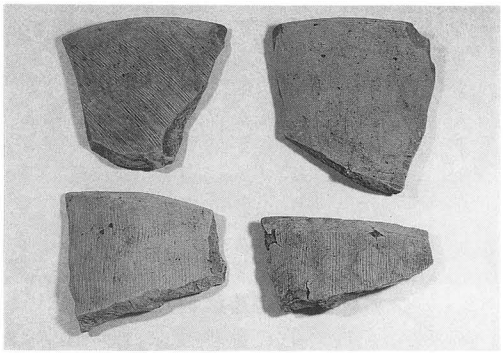


王塚古墳埴輪(3)

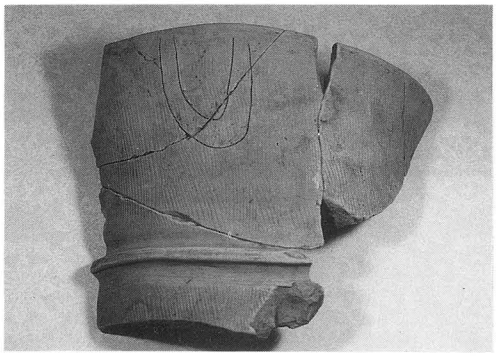
図版 8



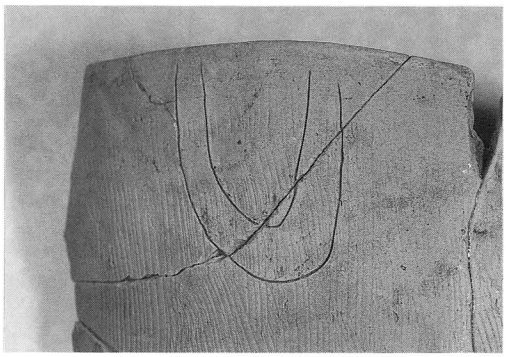
王塚古墳埴輪(4)



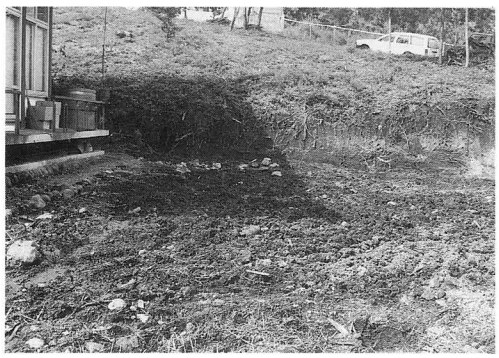
王塚古墳埴輪(5)



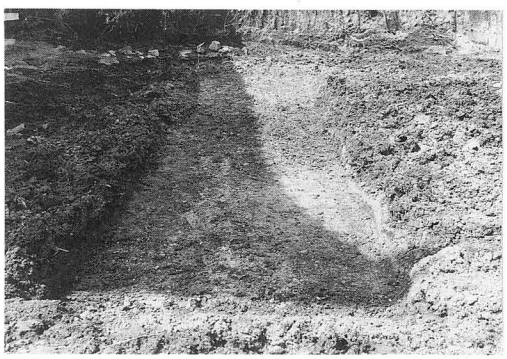
王塚古墳埴輪(6)



ヘラ記号(2)



大福寺境内調査前風景



大福寺境内第 1 トレンチ

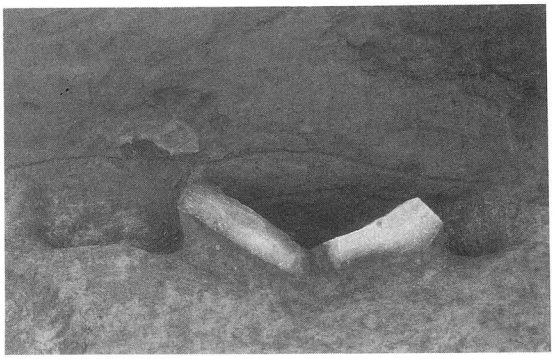
横畑遺跡第 1 ～ 3 トレンチ全景

横畑遺跡第 1 トレンチ

駒平遺遺跡19～27トレンチ調査前風景

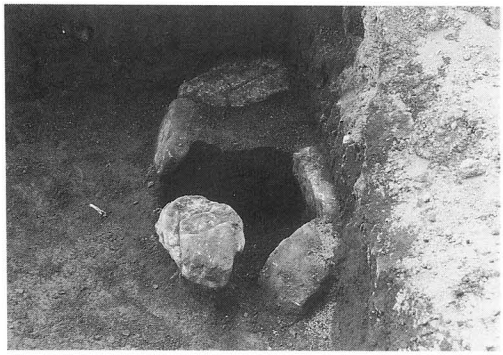
駒平遺跡第19トレンチ

駒平遺跡 3 号小穴

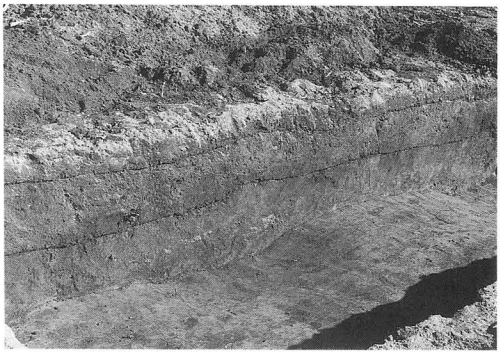


土偶出土状況

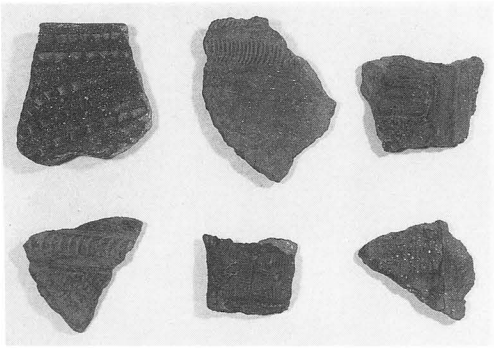
図版10



駒平遺跡 2 号炉



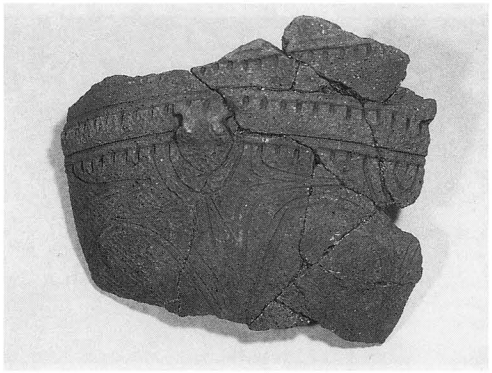
駒平遺跡第26トレンチ



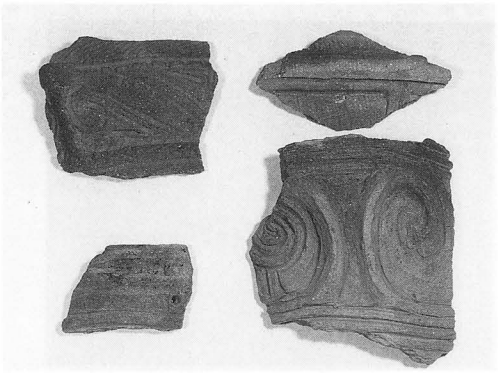
駒平遺跡縄文土器(15)

（正面）　　（背面）

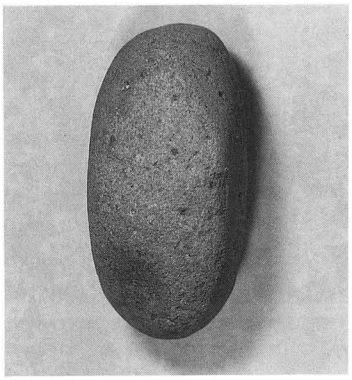
駒平遺跡土偶(2)



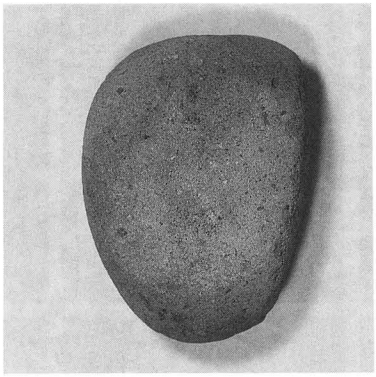
駒平遺跡縄文土器(16)



駒平遺跡縄文土器(17)

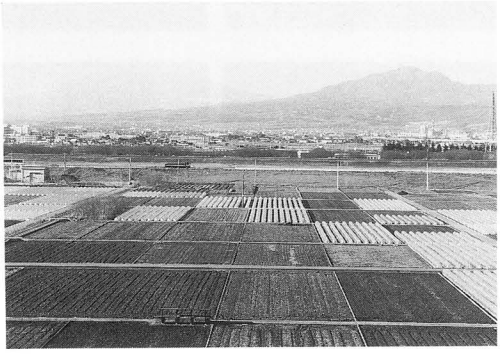


（正面）



（背面）

駒平遺跡凹石(2)



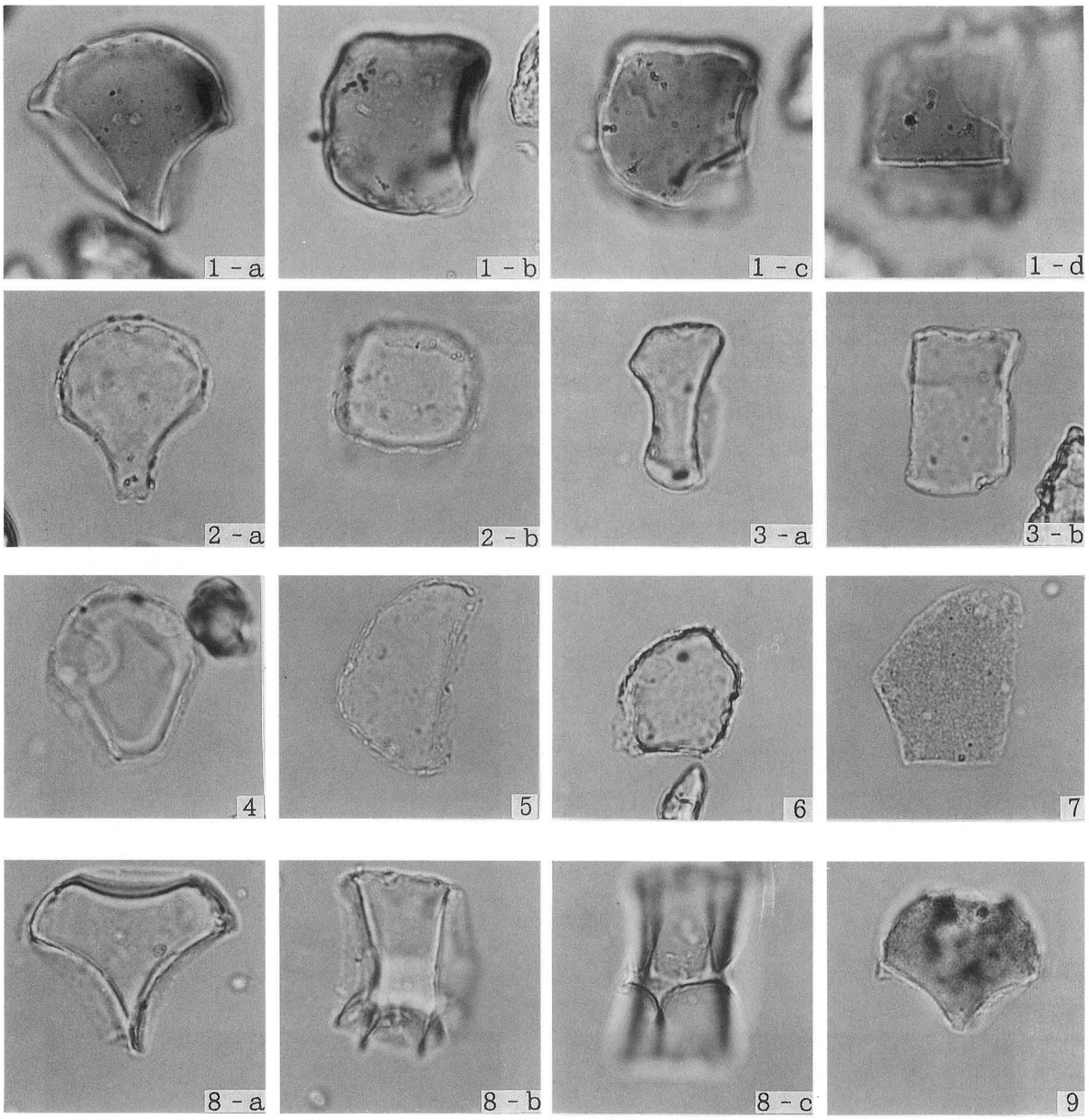
明治遺跡全景

明治遺跡第１トレンチ調査前風景

明治遺跡第１トレンチ

明治遺跡第２トレンチ

図版12



30 μm

図版　明治遺跡のプラント・オパール

1、2：イネ（1－a，2－a：断面、
1－b，1－c：側面、1－d：表面、2－b：裏面）

3：ウシクサ族（3－a：断面、3－b：側面）

4：ネザサ節型（断面）

5～7：クマザサ属型（断面）

8、9：シバ属（8－a，9：断面、8－b：側面、8－c：側面）

報告書抄録

ふりがな	へいせい7・8ねんどそんないいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	平成7・8年度村内遺跡発掘調査報告書
シリーズ名	豊富村埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第3集
編著者名	岡野秀典
編集機関	豊富村教育委員会
所在地	〒400−15　山梨県東八代郡豊富村大鳥居3800　TEL 0552−69−2447
発行年月日	1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
高部宇山平遺跡（たかべうやまだいらいせき）	山梨県東八代郡豊富村高部字伊勢塚（やまなしけんひがしやつしろぐんとよとみむらたかべあざいせづか）			950720～950721	60	個人住宅
三枝氏館跡（さいぐさしやかたあと）	山梨県東八代郡豊富村木原字高内（やまなしけんひがしやつしろぐんとよとみむらきはらあざたかうち）			960117～960227	217	道路建設
駒平遺跡（こまだいらいせき）	山梨県東八代郡豊富村木原字駒平（やまなしけんひがしやつしろぐんとよとみむらきはらあざまだいら）			960117～960227	173	道路建設
大鳥居宇山平遺跡（おおとりいうやまだいらいせき）	山梨県東八代郡豊富村高部字前山（やまなしけんひがしやつしろぐんとよとみむらたかべあざまえやま）			960515～960603	168	農業関連
大福寺境内（だいふくじけいだい）	山梨県東八代郡豊富村大鳥居字飯室（やまなしけんひがしやつしろぐんとよとみむらおおとりいあざいいむろ）			960924	18	会館建設
横畑遺跡（よこばたけいせき）	山梨県東八代郡豊富村大鳥居字横畑（やまなしけんひがしやつしろぐんとよとみむらおおとりいあざよこばたけ）			961217～961219	60	道路建設
駒平遺跡（こまだいらいせき）	山梨県東八代郡豊富村木原字駒平（やまなしけんひがしやつしろぐんとよとみむらきはらあざまだいら）			970109～970122	150	道路建設
明治遺跡（めいじいせき）	山梨県東八代郡豊富村高部字明治（やまなしけんひがしやつしろぐんとよとみむらたかべあざめいじ）			970217～970227	8	その他開発

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高部宇山平遺跡	集落跡	縄文時代～古墳時代			
三枝氏館跡	城館跡	戦国時代			
駒平遺跡	集落跡	縄文時代	土坑	深鉢・浅鉢（縄文時代中期初頭）、土偶、土製円盤、凹石	
大鳥居宇山平遺跡	散布地	縄文時代～古墳時代	王塚古墳の周溝 土坑	円筒埴輪（5世紀後半）	ヘラ記号線刻2点
大福寺境内	社寺跡	奈良時代～近世			
横畑遺跡	集落跡	旧石器～近世			
駒平遺跡	集落跡	縄文時代	土坑・小穴 石囲炉	深鉢（縄文時代中期初頭～後半）、土偶、土製円盤、凹石	
明治遺跡	包蔵地	近世			

豊富村埋蔵文化財調査報告第3集

平成7・8年度村内遺跡発掘調査報告書

印刷日　1997年3月31日
発行日　1997年3月31日
発行所　豊富村教育委員会
〒400-15 山梨県東八代郡豊富村大鳥居3800
印刷所　(株)エンドレス
〒405 山梨県山梨市上石森123